り、然れども、秦の短き治世は、事實上、恰も思想活動、盛衰の因つて判るゝところにして多樣多變、世界の人文史上、稀に見る現象は、その光輝を歛め、やがて全く暗黑の中に葬られ了んぬ。

第二期　中古文學

第一　兩漢文學

(一)　漢代思想界の趨勢

三代の間に蓄積したる漢族の素養と準備とは、春秋戰國の兵燹と筆論とに消費し、傾注し盡されたり。こゝに於てか、人心は鬪に倦み、思想は爭に疲れ、腦漿の乾涸したる形跡は、すでに戰國の末葉に於て認知さるべく、現世を以て苦痛と感じ、休養安息を以て理想的快樂となせる厭世的傾向は、當初の南方思想中に尋見すべかりしなり。而して、暴秦の一統は、益す斯勢を激成し、焚書坑儒の慘禍は、その終をなしたりき。之に繼いて秦楚の攻戰あり、項劉の逐鹿あり。かゝる爭擾紛亂は、益す人心を抑壓し、萎縮せしめしのみ。その愈よ倦み、愈よ疲れたる極は、さながら半死の人の如く、昏迷して復た起つべからず。思想界の事、固より言ふべき者あらず、漢代挾書律の廢止は、やゝ枯草に雨を下し、轍魚に水を與へし觀ありと雖も、只管休養安息を渴望する場合なれば、僅に蘇生して、一縷の生命を繼ぎ得たるのみ、竟に活力を鼓舞して舊時の盛觀を再現するに至らず、文景の後、國家の組織秩序、完成確立して、外觀上、憂患なきに及びてや人心は全く

平穩沈靜に歸し、こゝに始めて、休養安息を樂むを得、更に進めば、物質的饒富の中、肉體的快樂を滿たすに汲々たらむとす。かくの如くして、獨立思想の缺乏を來し、更に降つて、迷信的傾向を生じたり。故を以て、漢代を通じて理想的生活なく、精神的產出なしといふも、決して過言に非ざるなり。

以上は社會心理の上より觀察したる漢代、否、特に漢初の狀態なりとす。而して、この時代に於て、南方思想、即ち老莊の學說が、盛に流行したるは、史的事實の證明するところ、蓋つて、その內部の事情を探究するに、少くとも、三個の原因の伏在するを見る。即ち上に述べたる一般時勢趨向の外、かの暴秦を亡ぼせしものゝ多數は、南人なりしといふ歷史的關係と、すでに北方思潮及び中部思潮より發展せし政治的方策の効果極めて少きを實驗したる餘の社會的必要とあり、愈よ之を助長せしめしを見るべし、その例證は、頗に堪へざるを以て、こゝに贅せず。

之を要するに、老莊の學說は、漢初に在りては、大に流行すべき運命を有し、且つ上下官民を通じて之を持守すべき必要ありき。然れども、無爲退嬰は、人心自然の性情と相反するもの、唯だ是れ一時の催眠藥たるべきのみ、之を用ふること久しければ、身體を害することなしとせず。諸呂の變・七國の亂、漢初猶ほ多少の紛亂なしといはず。武帝に至りては、文景豐富の後を受け、內は土木を興し、外は征戰をなし、その規畫するところ、概ね成功を見るに至り、漢祚の隆盛、正にその絕頂に達し、國民の膨脹は、社會の組織・國家の制度を確定するの機會に到達しぬ。且つや、老莊に感化されて、厭世主義を抱持せし人民は、漸くその休息の期を終り、更に自ら進み、力を皷して興味の饒多なるを求めむとし、恰も物質的饒富を極めたる時に際して、積極的、殊に肉體的に傾きたる實感的快樂を求むるに日も維れ足らず。かくの如くして、天下を擧げ、漸く放逸淫佚の惡風頹俗を醞釀するに至らむとす。今この人民を以て成れる天下の政法を整理せむとせば、斷じて根本的大革新を厲行せざるべからず。こゝに於てか、北方思想、孔孟の敎義は必要上、復た新に標章せられき。

北方孔孟の敎義は、その初、陸賈によりて鼓吹せられき。然れども、固より未だ勢力あらず、文景の間に在りては、學者皆野に困處しその背誦せし遺經を講習するを以て一生を終りしのみ、武帝が之を好むに至りて、俄然その勢を恢復しぬ。建元元年、丞相英綰、上書して曰く、申・商・韓非・蘇秦張儀の言、皆國を亂る、請ふ止めむと。帝制して可なりとなす。次いて、趙綰・王臧の屬、儒學に明かに、帝も亦た之に嚮ひ、幾たびか天下に籌咨して民間の俊逸を擧げ、賢良方正文學の士を招きぬ。こゝに於て公孫弘、布衣より拔擢せられ

て相位に上り、董仲舒は一代の宿儒を以て、重く對策に取られて、直に之を政治上に適用せらるゝに至れり。彼は異學禁制の意見を提出せしと同時に、又大に儒學を振興せむとし、その第一方法として、學士養成の策を建てたり。曰く、夫れ素と士を養はずして、賢を求めむと欲す、たとへば、未だ琢かずして、文彩を求むる如きなり。故に士を養ふの大なるものは、大學に若くはなし、大學は賢士の關するところなり。教化の本源なり。今以ふに、一郡一國の衆、對に應ずるなきは、是れ王道の往々にして絶ゆればなり。臣願はくは陛下大學を興し、明師を置き、以て天下の士を養ひ、數ば考問し以て其材を盡せば、英俊得べし、と。これ仲舒が有名なる天人策、命題議論の歸着するところにして、その取捨如何は、思想上、社會上、必ず一大影響を與ふべきものなり。而して、武帝は大に之を取るところあり、卓然として、百家を表章し、學校を設け、五經博士弟子員を置き、茂才孝廉を擧げて之が職を命ぜり。蓋し仲舒は一世を擧げて儒教統一の天下となさむと欲し、武帝は四海を打して人心統一の社會を造らむと欲す、一は儒學の功臣、一は守成の明主を以て自任せしもの、その主とするところ、互に相同じからずと雖も、兩者の意志は、ゆくりなくも合體して、その實行を見るに至れりき。

場儒陰老、その態度、すでに曖昧なり、故に相助くることなくして、相害するに至りしは、斷じて爭ふべからずげにや、儒學の標章は、愈よ當時の思想界を沈滯せしめたりき。何となれば、是れ比較選擇を否定するものにして、改善進歩の精神と背馳すればなり。而して、老莊思潮の人心に浸染するの深き、遂に之を洗滌すべからず、愈よ勢力を逞うし、却つて五行讖緯等、當時の迷信的傾向と抱合したり。武帝その人、すでに然り、而して、上の好むところ、下、之より甚しきものありといはずや。予はこゝに公言せむ。仲舒が他の完全なる方法を以て、儒教を廓張し、老莊思潮と對立せしめなば、兩者の間、多少の辨難攻擊を見るに至り、思想界は幾分活動を促がすに至りしならむ、と。仲舒の圖りしところは、儒教をして固定腐敗せしめ、牽いて、漢代思想界をして枯死せしめ、併せて支那人文の進歩を妨害せしものに外ならず。而して、儒教の標章に聯關して發生したる學問の新氣運は、實に訓詁なりき。但だ探究的精神と相反する、頗る甚しきもの、豈に特に言を費すを須ゐむや。

さばれ、漢代諸子者流の見るに足らざるは、ひとり訓詁の餘風に感染し、思索力を麻痺せし結果のみに非ず、實は社會維持の觀念、全くその心頭より取り去られ、焦眉の急に迫りし大問題の絶無となりしに起因するを忘るべからず。かくの如き獨立思想の欠乏は、文學に大影響を及ぼし、あらゆるものをして、一般に敘事的傾向を帶ぶに至ら

しめき。當時は、議論の文と雖も、多く事を敘して、その證蹟を擧ぐ。歴史文學の最も觀るに足るべきもの、固より偶然ならず。之に次いで、律語に於ては敷張を以て能事となせる辭賦、ひとり行はれ、ひたすら形式的方面に向ひ、その整齊を尙ぶの極は、やがて散文をして律語化せしめ、遂に八代の衰を起すに至らしめき。

然れども、先秦時代の文學に缺乏せしところ、實に敘事なりとすれば、漢代以下は、たとひ、その實質に於て、相若かざるも、兎に角、其缺を補ひしに似たるものあり。而して、訓詁が文字上の學問たるとともに、當時の文學の中堅たる辭賦は實に文字上の技術たりき。かくて國民の物質的膨脹は、之をして、其極に到達せしめ、やがて律語散文ともに其變を極めたる各種の體形を簇生するに至らしめき。

漢代の文學は、すべて物質的凡俗的遊戯的にして、先秦時代の活潑なる思想界に於ては、その位地を占むべく、むしろ纖弱軟柔なりしが、元と是れ人間に於て必然的普遍的實在性を有するものなるを以て、漢代太平の時運を待つて、はじめて發生せるなり。然れども、物には漸あり、戰國の末に於ける、學者としての荀卿、賦家としての宋玉の如き、その備を作りしものに外ならず。

漢は、高祖基を開き、武帝に至りて四方を經略し、社稷の盛を極めたりしが、王莽一たび之を簒し、尋いて光武中興、後に獻帝に至りて亡ぶ。而して、東西兩漢の民風、截然として別あり。前者は豪放雄大、自由の氣に滿ちたれども、後者は縝密瑣細、太だ局促するところあり。その一は、創業君主の感化に依るならむとも、時勢の遞降、儒教の腐敗、亦た與つて力あるを疑はず、兩漢文學を研究するもの、這般の概念を心頭に置かむを要す。これ實に文學上に必然の影響を與ふべき約束を有するものなればなり。

(二) 陸賈

陸賈は、漢代儒家の祖となすべきものにして、その人、すでに傳ふべく、その書、亦た頗る價値あり。史記の本傳に據れば、その人と爲り、啻に口辯あるのみならず、氣慨あり、學術あり、一世の人傑と稱するも不可なきが如し。故を以て、世亂れて辯士となり、時治まりて詩書を談じ、意氣卓犖、議論公正、毫も阿諛便佞の醜態なく、その出處進退の際に於けるや、機を見て去從を決し、義に由つて患難を處し、優遊自得、其位に素して行ふ。その材質、自ら然らしむるに出づと雖も、一は學識に因るや必せり。賈が誦せしところの詩書、之を焚坑以前に學び得たるや、殆んど疑なし。而して、馬上に居て之を得るも、むしろ馬上を以て治むべけむや」の一語を以て高祖の虛傲を挫き、その慢心を破り、その陋習を祛き、將に喪びむとする斯文を發揮し、漢祚數百年、治國の大本を立てしに至りては、

固より高陽の酒徒・薛の鄙儒・委格採芝の輩の及ぶところに非ず。後再び南越に使して尉佗を屈し、平勃を調停して、諸呂を平げたるが如き、亦た宰肉識薄の智の相若く能はざるところ、而かも晩年優遊自適、以て其身を終る。命を知るものに非ざれば、何ぞ能く此の如くならむ。著はすところの新語二卷、固より有用の文字、一篇を奏する毎に、高帝輙ち善と稱し、左右萬歳と呼ぶ。憾むらくは、高帝の朝儀を定むる、斯人に命ぜず、反つて阿諛曲從の叔孫通に命ず、たとへば、騏驥を卻け、駑馬に駕するに似たりといふべし。

新語二卷十二篇、史記本傳に見ゆ。漢書藝文志に陸賈二十七篇といへるは、他の論述を併せて算せしものにして、玉海に今存するもの七篇といへば、宋末五篇を佚せしを知る。馬端臨の文獻通考に之を載せざるは、全書を見さればなるべし。今存するもの、亦た十二篇、元明以來、裒集して之を得たるならむ。四庫全書提要、その僞を疑ふと雖も、實は毛を吹いて疵を求むるものゝみ。その文章の如きも、雄偉粗厲、野にして俚ならず、何ぞ疑を挾むを須ゐむ。然れども、この書、如上の事情に因り、往々にして脫誤改竄の處あり。凡そ先秦前後の古書、錯脫訛謬の多きは、固より理の免れざるところにして、その全く疵なく、訛謬なきは、反つて疑ふべきの一端なり。新語の一書、文中闕字多く、下卷明誠十一より終篇思務十二に及びては、五六字を缺くものあり、七八字を缺くものあり、或は缺字聯續して殆んど讀むべからざるあり、これ斷じて古書たるの好證左なり。漢書藝文志、別に陸賈賦三篇といひ、又楚漢春秋九篇あれども、惜むべし、ともに傳らず。

(三) 賈誼

漢代を通じて、大に民間の俊秀を擧げ、時に破格の登庸をなし、刀筆の吏にして、三公の位に上るもの、頻々相繼ぐ、故を以て、草莽布衣の士、論策を以て名を爲せしもの、決して少しとせず。この種の論客は、戰國遊說の士と頗る相類すと雖も、時勢の變は舌に代ふるに筆を以てせしめたり。唯だ夫れ、之を以て人主の聖聽を竦動せしめ、一擧して震天動地の大業をなし、名を竹帛に垂れむとする大野心に至りては、固より甲乙すべきなし。就中文景の間、國家の組織、未だ確立せざる時に於ては、自然の勢、この輩をして、最も出で易からしめしが、後に儒敎を表章し、考試を以て登庸を爲すに至りては、復た前の如くならず。されば、有數の論策家は、全く漢初に限られたる特殊の產物にして、洛陽の少年賈誼、その第一なりき。

賈誼の學は、吳公より傳ふ。吳公は李斯と同邑にして、常に學事したりといふ。誼年二十餘、孝文帝に召されて博士となる。詔令の議下る毎に、誼盡く、之が爲に對へ、諸生咸な能及ばずと以爲へり。帝之を說び、頻に超遷し、一歳の中、太中太夫に至る。誼、大に漢制を

革定せむと欲す。時に帝はじめて、位に即き、謙讓未だ遑あらず。然れども、諸律令、更め定むるところ、及び列侯悉く國に就く、その說、誼より之を發せり。こゝに於て、帝、議して以爲へらく、賈生、公卿の位に任へたり、と。而して、絳灌・東陽侯・馮敬の屬、盡く之を害し、乃ち誼を短つて曰く、洛陽の人、年少初學、專ら權を擅にし、諸事を紛亂せむとす。と、こゝに於て、帝亦た後に之を疏んじ、其議を用ひず、乃ち誼を以て長沙王の太傅となす。誼、すでに辭して往き、長沙の卑濕なるを聞き、自ら壽の長きを得ざるを知り、又適を以て去りしが故に、意頗る自得せず。湘水を渡るに及び、賦を爲り以て屈原を弔ふ。すでにして、長沙に往き、居ること三年、鵩あり、飛んでその舍に入り、坐隅に止まる。楚人、鵩を命づけて鵩といふ。誼、之を傷悼して鵩賦あり。後歲餘、徵して見らる。時に帝方に釐を受け、宣室に坐し、鬼神の事に感じて其本を問ふ。誼因つて具さに然る所以の狀を道ふ。夜半に至り、帝席を前めすでにして罷めて曰く、吾久しく賈誼を見ず、自ら以爲らく之に過ぎたりと、今や及ばざるなり。と。之に頃くして、誼を拜して梁の懷王の太傅となす。居ること數年、懷王馬より墮ちて死し、後なし。誼自ら傅となつて無狀なりしを悼み、哭泣すること歲餘、亦た死す、年三十三。

賈誼年わづか壯にして死せしと雖も、實は天下稀に見るの一大經世家にして、後世蘇老泉の如き、之に私淑し、頻に推尊して、九鼎大呂の重きを爲さしめき。誼の如きは、眞に王者の佐たるべく、之をして世故の閱歷を累ねしむれば、少くとも、管仲固より望むべきのみ。然れども、惜むべし、早熟の天才は、遂に運命の寵兒に非ず、故を以て、新進の少年博士、その位地、猶ほ卑きに拘はらず、絳灌等、諸大臣、未だ相信ぜざる時に方り、痛哭流涕長太息すべき事ありといひ、以て天子を驚かし、他の猜忌を受くるを顧みず。蓋し進言の禮を知らざるものか、或は之を知ると雖も、自信の念、殊に甚しく、その忌諱に觸るゝを臆測するも、敢て此に及べるか、試に其傳に因り、其人と爲りを冥想すれば、誼は北人に類せず、極めて多感、加ふるに、年少氣鋭、其功を成すに急にして、自ら抑制する能はず、此事あるに及びしや必せり。蘇東坡、かつて誼の生涯の薄福に對して、少からぬ同情を寄せ、更に百尺竿頭の一歩を進めて曰く、賈生の如きは、漢文の生を用ひざるに非ず生の漢文を用ひざるなり。かの絳侯は、親ら天子の璽を握りて之を文帝に授け、灌嬰は兵數十萬を連ね、以て劉呂の雌雄を決す。又皆高帝の舊將なり。これその君臣相得るの分、特に父子骨肉手足のみならむや。賈生は洛陽の一少年なり、一朝の間に盡く其舊を棄てゝ其新を謀らむと欲するは、亦た甚だ難し。賈生たるもの、上、その君を得、下、その大臣灌嬰の屬の如きを得、優遊浸漬、深く之と交り、天子をして疑はしめず、大臣をして忌

まざらしめ、然る後、天下を舉ぐれば、唯だ吾が爲さむとするまゝ、十年を過ぎずして志を得べし、安んぞ立談の間にして、遂に人の爲に痛哭することあらむや。謀の一たび用ひられざる、安んぞ終に復た用ひられざるを知らむや。默默を以て其變を待つことを知らずして、自ら殘つて此に至る。嗚呼、賈生は志大にして量小、才餘ありて識足らず、深く賈生の志を悲む、と。その他、朱子の如きも、同一の言をなせり。要するに、誼の如きは、その才、世用とならず、溘然夭死せし不遇なる經世家にして、嘆惋するは固より可、之を否斥するは、其人と爲りを知らざるものなり。

賈誼の著として、世に傳ふるもの、新書あり。有名なる治安策及び過秦論の數篇、又その中に載す。漢書藝文志に賈誼五十八篇とあり。崇文總目には、舊と七十二篇、劉向删定して、五十八篇となすといへり。論者或は云ふ、誼、はじめに、この著あり、治安策の如き、其中より抄出し、特に一篇として、上疏せしものならむ、と。但し今傳ふるものは、まことに何孟春の云へる如く、體裁の備らざること、殊に甚しきが故に衆論紛々たり。朱子曰く、新書は漢書に載するところを了するの餘、亦た粹なるものを得難し、看來れば、只だ是れ賈誼の一雜記稿のみ、と。陳振孫曰く、その漢書有るところに非ざるものは、輙ち淺駁にして觀るに足らず、決して誼の本書に非ず、と。紀曉嵐之を駁して曰く、原本散佚し、好事者、因つて本傳に在るところの諸篇を取り、その文を離拆し、各標目を立て、五十八篇數のに足せしならむ。其書全く眞ならず、又全く僞ならず、朱子以て襍記の藁となすは固より未だ其實を核せず、陳氏亦た篤論に非ず、と。要するに、この書は、兎も角も、賈誼の自著散佚の殘部にして、たとひ正眞の古味古色を領知する能はざるも、賈誼滿腹の經綸、その一斑を窺ふに於ては、何の不可かあらむ。但し篇數舊に非ざるは、斷じて疑ふべからざるに似たり。治安策・過秦論は、不朽の大作にして、固より異議なし。その他の諸篇と、雖も、未だ驟に之を棄つべからず、胎教の古禮の如き、詩の騶虞・易の潛龍・亢龍を解したる如き、亦た深く經義を得たるものにして、その手筆たること、辯を俟たず。漢書藝文志、別に賈誼五十八篇といひ、陰陽家五曹官制五篇、註に「漢制なり、賈誼の條せしところに似たり」といひ、他に賦七篇あり。今の賈長沙集、賦五篇、騷一篇、疏六篇、論三篇、計十五篇を收む。殘缺多しと雖も、その當行本色を窺ふふし。

賈誼は、經世家たると同時に、思想家なりき。その學の系統上、儒の道德に本づき、法の刑政を參し、之を折衷して、公平の見地を立つ、故に立論偏せず、根抵牢固なり。而して、又別に賦家たり、文士たりき。彼は、多面的にして、いづれも超凡なり。その才、すでに俊拔、その文亦た雄偉、規模の宏大、筆力の縱横、ともに、之を兼ね、殆んど端倪すべからず。一言す

れば、孟子に似て新奇の典型を存する者なり。漢代屈指の文豪、議論に於ては賈誼、叙事に於ては司馬遷、これすでに足れり。而して其賦に於けるや、時勢の感化と、一身の境遇とは、北人たる渠をして、南方的厭世思想を歌ふに至らしめき。鵩賦の後半は、最も明白に之を表示するものにして、司馬遷は、「死生を同うし、去就を輕くし、又爽然として自失せり」といへり。

(四) 賈山及び晁錯

文帝の時、賈誼の外に賈山あり。潁川の人。祖父祛、六國の時、魏の博士弟子たり。山、その學を受く。言ふところ、書記を涉獵して、醇儒たる能はず。孝文の時、治亂の道を言ひ、秦を借りて諭となし、名づけて至言といふ。帝之を納る。その文、奇爽にして、前後の關鍵、なほ頗る散、優に西漢の風格あり。唐順之曰く、その文、戰國を去る未だ遠からず、奇氣あり、而かも、繩墨を用ひず、と。王應麟、その才學を稱して曰く、山の才、誼に亞ぐ。その學、晁錯よりも粹なり、と。これ儒の立脚地より見たるものにして、理を言ふの嚴覈明晰は、遂に一歩を錯に讓る。山の上言せしところ、この外、猶ほ頗る多し。漢書藝文志に、賈山八篇といへども、今は漢書本傳中に一兩篇を見るのみ。その言、多く激切なり。

次は晁錯、亦た潁川の人、人となり、峭直刻深にして、申商刑名の學を修め、文學を以て、太常典故となる。文帝の時、尚書を修むるものなし。帝、錯をして、濟南の伏生に就いて之を受けしめ、太子舍人より累遷して博士となる。かつて上書して、太子の爲に刑名の學を修めむを請ふ。帝之を善しとす。こゝに於て、錯三拜して、太子の家令となる。錯、その辯を以て、太子に幸せらるを得、太子の家、號して智囊といふ。當時匈奴彊し、錯上書して、兵事を言ふこと再び、帝、之を嘉す。後有司に詔して賢良文學の士を擧げしむ。錯、選中に在り。帝、親ら策す。時に賈誼すでに死し、對策者百餘人中、唯だ錯、高第たり。仍つて中太夫に遷る。錯また宜しく諸侯の削るべきと法令の更定すべきとをいふ。その書、凡そ六十篇。帝盡く聽く能はずと雖も、其材を奇とす。景帝の時、錯大に用ひられ、遂に其言に從ひ、諸侯の地を削る。こゝに於て、吳楚の叛あり。錯、亦た譖せられて刑死す。その詳、こゝに述べず。

司馬遷いふ、賈誼、晁錯、申商に明かなり、と。然れども、誼は儒術を主として、刑名を交へ、錯は刑名を主として、儒術を斥く。故に畫策せしところ、更に剴切、班固が誼を評して、その術、固より疏なりといひしもの、錯は此病なし。こゝに於て、鄭曉をして、策、漢より大なるなく、漢、晁の策に過ぐるなし。事に就いて文をなし、文は簡徑明暢、事は皆鑿々として行ふべし。賈太傅、及ばず。文中子曰く、洋々たるかな、晁錯・董公の對と。以あるかな」と

いふに至らしむ。然れども、その學、刑名に偏するの故を以て、蘇老泉の云へる如く、往々にして詐術に近きものあるを病む。吳楚七國の亂は、實に晁錯一人の手を以て、直に平地より波瀾を起したる政治上の一大事變なり。然れども、惜むべし、晁錯その人、操守堅からず、自己一身の安全を求むるに汲々たりしを以て、その謀るところ、極めて忠なるに係らず、慘澹たる最後をなし、千古の寃恨を留むるの止むを得ざるに至れりき。東坡又嘗て之を論じて曰く、錯をして、自ら將として吳楚を討たしむれば、必ずしも功なくむばあらず。唯だ其れ自ら其身を固うせむと欲して、天子悅はず、奸臣以て其隙に乘ずるを得たり。錯の自ら全うする所以のものは、乃ち其れ自ら殆うする所以か、と。これ實は當時の人を諷するが爲めにせしものと雖も、猶ほ且つ錯の人物境遇を穿ち得るを覺ゆ。

漢書藝文志、法家に晁錯三十一篇あり、今存するものは數篇のみ。貴粟疏、尤も人口に膾炙す。錯は終生賈誼の如き閑文字を作らず。東坡曰く、蘇秦の談說、晁錯の敷奏、唯だ當時の事情を曲盡せしのみならず、而かも文詞富贍、體製新奇、作文の法となすに足る、と。錯の文、規律森嚴なれども、議論なほ叙事を以て之を行り、古文の色澤を存するに至りては、全く誼と相同じ、この後の奏疏は、多く平直にして、曲折に乏しく、遂に相及ばず、その根柢、すでに然ればなり。

(五) 鄒陽及び枚乘

漢初の制、秦の難に鑑るところあり、封建郡縣、兩つながら併用す。こゝに於て、巴蜀關中の天嶮は、帝者の直轄地にして、その他は、宗室諸王を封じ、其大殆んど帝室と相若き、其親未だ遠からざる間は、大に崇信せられ、加之、戰國の末謂ゆる諸君客を養ふの風、なほ存せしを以て、爭つて天下の游士を招く。文景の間、吳王濞・梁王武その尤たり。次いで、武帝の時、河間王德、時に好學を以て知られ、淮南王安、別に博文を以て聞こゆ。

吳王濞は、高祖の兄劉仲の子、仲、代王に封ぜられしが、匈奴を禦ぐ能はずして、國を失ふ。黥布の平らぐや、帝、濞を沛に立てゝ吳王となし、三郡五十三城に王たらしむ。すでに拜して印を受くるや、高祖濞を召して之を相し、謂つて曰く、若(なんぢ)の狀、反相あり、と。心ひとり悔ゆれども、すでに拜せり。因つてその背を拊(う)つて告げて曰く、漢、後に五十年、東南に亂あれば、豈に若ならむか。然れども、天下同姓にして一家たり。愼んで反する無かれ、と。濞、頓首して曰く、敢てせず、と。孝惠呂后の時、天下はじめて定まり、郡國諸侯、各務めて自ら其民を拊循す。吳に豫章郡の銅山あり。濞、乃ち天下亡命の者を招致して、益す錢を鑄り、海水を煑て鹽となす。故を以て賦なく、國用富饒。次いで四方の游士を招致す。齊の鄒

陽・吳の枚乘・莊忌等、ともに之に事へ、皆文辯を以て名を著はす。吳王、太子の事を以て怨望するや、病と稱して、朝せず、陰に反謀あり、諸人屢ば諫むれども、その遂に說くべからざるを見、皆去つて梁に之く。

梁の孝王武は、文帝の第二子、景帝の同母弟なり。吳楚七國の叛するや、先づ梁の棘壁を擊ち、數萬人を殺す。孝王城守し、將をして拒がしむ。吳楚、梁を以て限となし、敢て過ぎて西せず。亂の收まるや、梁の破つて殺虜するところ、略ほ漢と中分す。梁、最も親うして功あり。又大國にして天下膏腴の地に居り、北は、泰山に界し、西は高陽に至るまで、四十餘城あり、皆大縣多し。竇太后、最も之を愛し、賞賜勝げて道ふべからず。こゝに於て、孝王東苑を築く、方三百里、唯陽城を廣むること七十里、大に宮室を治め、複道を爲り、宮より平臺に連屬すること三十餘里、天子の旌旗を賜ふを得、その出づるや、千乘萬騎を從へ、東西に馳獵して天子に擬し、出づるときは蹕といひ、入るときは警といひ、四方豪傑の士を招延し、山より以東、遊說の士畢く至らざるなく、羊勝・公孫詭、入つて謀臣となり、鄒陽・枚乘・莊忌の屬、又皆至る。孝王屢ば太子たらむとして泄れ、帝の怒るところとなりしが、竇太后在るの故を以て幸に赦され、遂に國を失はず、漢初の吳梁二國は、相次いで、文士の巢窟たりき。

鄒陽、もと齊人、吳王濞の反せむとするに際して、先づ之を諫め、去つて梁に遊ぶや、莊忌・枚乘と交も上書す。入と爲り、智略あり、慷慨にして苟合せず。羊勝・公孫詭の間に介し、因つて其能を嫉まれ、譖せられて獄に下るや、乃ち獄中より上書す。その文、君臣際會の難を說き、徒に天下の士を殺すべかざるを以て歸となす。司馬遷曰く、鄒陽は辭不遜なりと雖も、その物を比し、類を連ぬる、悲むに足るものあり。抗直撓まずといふべし、と。林次崖、又た曰く、意思千轉百轉、九層の浮圖の如く、愈よ出てゝ愈よ高く、詞源萬里の黃河の如く、滾々として竭きず、終に大海に歸す、と。然れども、唐順之が、錦を剟し、翠を剪るが如しといひしもの、遂に誤らず、詞に偶儷多く、時勢の好尙、亦た免るべからず、之を賈晁等に比すれば、復然として異なり。孝王、その辭を嘉し、出して上客となす。後、孝王罪あり、景帝之を怒るに及び、陽、長安に遊說し、事治せられざるを得たり。その進退、かつて自ら公言せしところに負かず、その言說、戰國遊士に似たり。故に漢書藝文志、縱橫家、鄒陽七篇あり。惜いかな、今傳はらず。

枚乘、字は叔、淮陰の人、吳王を諫むるの書、その辭淸明、鄒陽に勝る。事を用ひずして、多く喩を用ふるを以てなり。次いで吳王の逆謀露るゝや、復た之を諫む。故を以て、名を知られ、七國の亂、平らぐや、郡吏に拜す。然れども、久しく大國の賓たるに慣れて、之を樂ま

ず、乃ち去つて梁に遊ぶ。梁の客、皆辭賦を善くし、乘尤も高し。孝王の卒するや、淮陰に歸る。武帝太子たりしときより、其名を聞きしに山り、位に即くや、安車蒲輪を以て之を徵す、未だ至らず、途にして卒す。

乘が奇儁の才、加ふるに淮陰に產れ、吳梁に客たるや、論策家たるよりも、むしろ詩人たり、賦家たりき。漢書藝文志に、枚乘賦九篇とあれども、今傳ふるものは、七發一篇のみ。これ實に屈原の九歌・宋玉の九辨より出て、更に一新機軸を出せしものにして、七篇相次いで、聯絡を存し、移形換步の妙、人の耳目を新にせしむ。而して、通篇問答を以て、之を遣りしところ、なほ戰國遊說の風を帶ぶ。加ふるに、筆力蒼勁、奇麗中、跌宕の氣あり、司馬相如と並稱し、ともに神技と稱せらる。この後、七は辭賦の一體となり、傅毅の七激・張衡の七辨・崔駰の七依・馬融の七廣・曹植の七啓・王粲の七釋・張協の七命・皆之に倣ひ、傅玄亦た七林あり。然れども、時降れば踏襲これ事とし、毫も新意なく、遂に乘の舊に若かざるなり。

乘は、南方の產にして、その後、北に入る。故に南方の辭賦を究めて、創體を出せし外、北方の詩歌に就いて、新奇なる機軸を出せり。古詩十九首中の數首、實に其作に係るといふ、未必の言に屬すと雖も、古來傳唱するところ、俄に棄つべからず。要するに、漢代文學の一大俊傑、その蘖子皐、又名を知らる、後章別に述ぶところあるべし。

梁苑風流の客、皆賦に習ふ。西京雜記に云ふ。孝王、かつて忘憂の館に遊び諸遊士を集めて各賦を爲らしむ、乘は河柳賦を作り、公孫詭は鹿賦を作り、鄒陽は酒賦を作り、公孫乘は月賦を作り、韓安國は賦を作つて成らず、鄒陽之を代作せり、と。莊忌、又賦を善くす。漢書藝文志に嚴夫子賦二十四篇あり。忌は吳の人。その子助、武帝の時に文名あり。おもふに、この時代の作、剛健の氣に富み、最も傳ふべきものなりしや必せりと雖も、今その一を存せず、散佚すでに久し。

(六) 司馬相如

漢代の辭賦は、その最盛時期たる武帝の時に於て、大に世に行はれ、貴族的文學として標榜せられ、豪奢放縱なる當時社會人心の反映たることを顯彰せり。

辭賦は、元と輕佻好文なる荆楚人士の間に起れりき。さすがに、屈原は厭世詩人の祖として、その思想、極めて眞摯なりしが、宋玉・景差輩に至りては內容よりも、むしろ外形を重んずるの風を示せり。司馬相如、かつて曰く綦組を合せて文を成し、錦繡を列して質となし、一經一緯、一宮一商、これ賦の跡なり。賦家の心、宇宙を包括し、人物を總攬す。致乃ち之を內に得て傳ふべからず、と。こゝに、賦家の心といふも、實は藝術的匠心に外な

らず、又宇宙を包括し人物を總攬すといふも、實は其材を取る範圍の頗る大なるを誇稱するに過ぎず。要するに、賦家は、觀るところを敷張して敘述するのみ何等の意象もなきなり。されば、賦家の大多數は、一個の修辭家にして、嚴格なる意義に於ける詩人に非ず。こゝに於てか、後世の評者をして、「賦家は無意を患へず、患は無蓄に在り、無蓄を患へず、患は以て之を運するなきに在り」と謂はしむ。すでに重きを外形に置く以上は、その主とするところは文字の末に在り、終に彫蟲の弊に陷らざるを得ず。鍾嶸が「專ら賦體を用ふれば、患、意の浮に在り、意浮なれば散ず」といひしもの、まことに賦家の病に中れり。揚雄又かつて曰く、詩人の賦は麗以て則、詞人の賦は麗以て淫、と。又曰く、或は問ふ、吾子少にして賦を好む、曰く、然り、童子彫蟲篆刻、俄にして曰く、壯夫爲さゞるなり、と。さすがに、彼は當時の賦の何物たるかを知り、其益なきを觀破せり。予は、こゝに斷言す、賦は優秀なる詩形たるに拘はらず、其初、二三輕佻なる文士の爲に誤られ、本來の意義を失ひ、やがて邪徑に彷徨し、不幸にも完全なる發達を爲すに及ばざりき、と。前に述べたる如く、漢に於ては、騷と賦とを別ち、賦は浮誇の辭、縟麗の文、しかも獨り盛行したりき。

辭賦は外形的にして物質的なり。故を以て、漢代に於て盛行すべき運命を有せり。武帝の時、內治外攻、殆んど成功し、その版圖は擴張せられ、制度は完成せられ、物質的生活は正に其隆を極めぬ。こゝに注意すべきは、武帝の人物、雄略豪舉と奢侈放恣とを一身に兼ねたること、是れなり、漢代一般の好尚、亦た此の如く、その俗、自ら活潑豪快にして、絕えて怯弱卑屈ならず。約言すれば、之を驕奢といふべくして、淫柔と稱すべからず。その內、自ら質を含み、魏晉以後、蕩として流れしものとは、大に其選を異にせり。こゝに於てか、當時の文學は、物質的美と大との範圍內に於て、壯麗の中、自ら質素の氣を含めり。故を以て、賦家の題目は、狩獵都城等を主とし、赫々たる功業を後世に炳焉たらしめむとする帝者の驕慢心に迎合し、賦は直に貴族的文學、となり、賦家は自ら一種の狎臣たりき。而して、漢代賦家の冠冕を司馬相如となす。

漢代を通じて、精神的生活なく、加ふるに、賦家は人主に養はる、その人物の猥瑣なること言を俟たず。司馬相如、固より才學ありと雖も、亦た是れ一個輕薄の放蕩兒に過ぎざるなり。相如は蜀の人、蜀の文學は、漢に至りて、始めて見るべく、相如と揚雄を以て其首となす。蜀と齊楚とは、方位を異にすと雖も、均しく邊境に在るを以て、土風民俗、多少類似するが如く、相如その人、輕佻なりと雖も、亦た自ら奇僻の處あり、故を以て、藺相如の人と爲りを慕ひ、名を改めたりと稱せらる、相如は決して學なきの人に非ず、少時讀書を好み、擊劍を學ぶといひ、又七經に通ずといふを見れば、その素養の深きこと、想ふ

べきなり。はじめ景帝に事へて武騎常侍となりしが、猛獸を格するを好まず、帝又文學を嗜まざりしを以て、久しく志を得ず。會ま梁の孝王來朝す。齊人鄒陽・淮陰の枚乘・吳の莊忌夫子の徒、之に從ふ、皆辭賦を善くするの士、相如之を見て說び、遂に病と稱して官を辭し、梁に客遊す。梁王乃ち諸生と舍を同うせしめ、居ること數歲。この間、その賦才を養ひしこと、頗る多かりしが如く、その傑作の一なる子虛の賦は實に此時に成れりと傳ふ。或は子虛は上林と連續して、自ら一篇、後年の作なり、と。然れども、當時梁に在りて牛耳を握りしものは、枚乘にして、相如は未だ第二流に居るを免れざりき。すでにして、孝王卒し、梁の客、皆散じ去る。相如乃ち其鄕に歸る。家元と頗る富み、貲を以て郎たりしと雖も、その歸るや、貧にして自ら業とするなし、相如素と臨邛の令王吉と善く、吉因つて之を臨邛郭下の亭に舍せしむ。その窮、愈す甚しきに至るや、遂に吉と謀り、臨邛の富人卓王孫の女、放誕風流の寡婦文君を挑むに琴心を以てし、これと奔り、卓王孫の怒つて一錢を分たざるや、一酒舍を買うて酒を賣り、文君をして壚に當らしめ、身自ら犢鼻褌を着けて保傭と雜作し、器を市中に滌ひ、以て王孫を辱かしめ、遂に衣服財物錢百萬を分つの止むを得ざるに至らしむ。相如の爲すところ、諂劣汚下、殆んど言を爲すに堪へず、尋常の遊冶郎、猶ほ此に至らず、宛として倡優の沒道義に似たりといふべし。相如、すでに、王孫の財貲を得、成都に還り、田宅を買うて居る。之に久うして、蜀人楊得意といふもの、狗監となりて、武帝に侍す。帝、子虛の賦を讀み、之を善しとして曰く、朕、この人と時を同うするを得ざるか、と。得意曰く、臣の邑人司馬相如、自ら言ふ、此賦を作れり、と。帝驚き、召して相如に問ふ。相如曰く、然り。然れども、これ諸侯の事のみ、未だ觀るに足らず、請ふ天子遊獵の賦を爲つて之を奉ぜむ、と。帝乃ち尙書をして、筆札を給せしむ。その成るや、帝大に悅び、拜して郎となし、後數ば賦を上り、大に帝の意を得たり。すでにして病を以て退いて茂陵に家居し、終に死す。傳へて云ふ、相如もと消渴の疾あり、文君の色を悅ぶや、終に痼疾となり、之が爲に死す、と。或は附會に出づるならむと雖も、亦た以てその人物を察するに足るべし。

相如は、武帝の朝に於て、文界の覇權を握れり。帝の辭賦を好むや、安車蒲輪を以て枚乘を迎へしより、梁の客、前後して大抵招致せらる。然れども、頹齡老朽、皆長く存せず、或は遊說の士を以て、自ら居り、其節を保つて敢て失墜せず。賦家として養はれしものは枚乘の孫子枚皐・東方朔、及び相如にして、相如實に其雄たり。相如口吃にして、著書を好み、卓氏と婚して財に饒、かつて西南夷に事ありしとき、詔を奉じて巴蜀を宣撫せし外、絕えて國家の事に與らず、病と稱して閉居し、官爵を慕はず、常に帝に從つて長楊に獵

すのみ。狎臣の生活は實に此の如くなれりき。

相如の作るところ、上林・子虛、論者の言の如く、元と必ず一篇、試にその內容を略述せむか。楚、子虛をして齊に使せしむ、齊王悉く車騎を發し、使者と出畋す。畋し罷んで子虛、烏有先生に詫す。亡是公在り。座定まるや、烏有先生子虛に問うて、今日の畋、樂しきかといふや、子虛、これに答ふるに、齊王、子虛に誇るに車騎の衆を以てしたりしに對し、己れは雲夢の事を以てしたりといふに筆を起し、三問三答を以て、之を遣る。その結構布置、大抵宋玉の諸作と似たり。而して、その究極するところ、畋獵は、奢侈甚しきものにして、賢君の爲さゞるところ、武帝が終日馳聘し、神を勞し、形を苦しめ、車騎の用を罷らし、士卒の精を靡し、府庫の財を費し、德厚の恩なく、獨樂を務めて、衆庶を顧みず、國家の政を忘れて雉兎の獲を貪るを諷するに在り。故を以て、司馬遷は曰く、相如、虛辭濫說、多しと雖も、その要、これを節儉に歸引す、と。然れども、作者が最も其力を盡し、其筆を舞はせしは、居然として畋獵の盛に在り。之を觀るもの、畋の害を聞かずして轉た其樂を想ふに至らむとす。揚雄かつて或人が賦以て諷すべきかと問ふに答へて「諷すれば已む、已まずむば、吾、勸に免れざるを恐る」といひしもの、正に此種を指すにあらざるか。予は、ここに至りて、その謂ゆる諷諭なるもの唯だ作者一片の口實に過ぎざるを臆想せずむばあらず。大人の賦の如きも、亦た然り。史に據るに、相如拜せられて、孝文園の令となる。天子すでに子虛の事を美す、相如、上の仙道を好むを見て、この賦を作れりといふ。西京雜記に曰く、相如將に賦を獻ぜむとす、未だ爲るところを知らず、一黃衣の翁を夢む、之に謂つて曰く、大人の賦を作るべし、と。遂に大人の賦を作り、神仙の事をいひ、以て之を獻じ、錦四匹を賜ふ、と。相如又自ら曰く、上林の事、未だ美とするに足らず、尙ほ靡なる者あり、臣かつて大人の賦を爲る、と。知るべし、子虛上林と並傳すべき傑作なるを自信せしを。而して、武帝は之を稱し、飄々として凌雲の氣あり、天地の間に遊ぶに似たりといへり。かくの如くして、何の諷意かある。美人賦は自ら刺る爲にせしものにして、張溥は「風詩の尤、上は宋玉を掩ふ。蓋し長卿風流放誕、色を論ずるに深し、その自ら敍傳するところ、琴心善く好女を感ぜしめて、夜亡ぐ、史遷の形狀、安んぞ能く此に及ぶを得む」といへり。唯だ夫れ、上宮の閉館、獨處せる佳人と猥坐し、黼帳低く垂れ、袖褥重ねて陳するところ、皓體呈露、弱骨豐脆、柔滑脂の如く、この刹那、危機一髮、誰か又、以下六句二十有四字に着意するものあらむや。揚雄又曰く、靡麗の賦、百を勸めて一を風す、猶ほ鄭衛の聲を馳騁し、曲終つて雅を奏するごとし、と。實に然り。然れども、予は或點に於て、相如一輩寫實の筆致、頗る大膽なるを愛せずむばあらず、諷諫は決して文學の第一義に非ず、彼の因襲

的偏見を以て、之を律するもの、何ぞ言を爲すに足らむや。相如の作るところ、類を分てば、畧ぼ次の如し。

(一) 田獵に關するもの……子虛　上林

(二) 神仙に關するもの……大人

(三) 戀情に關するもの……美人　長門

(四) 憑弔に關するもの……哀二世

相如の名、一世に重く、その晩年、茂陵の家居するや、武帝その病の甚しきを聞き、往いて悉く其書を取らしむ。すでに死して書なし、之を其妻文君に問ふ。對へて曰く、長卿もと書あらざるなり。時々著せば、人また取り去る、と。同時に長安の慶虬之あり、亦た賦を善くす、かつて情思賦を作りしも、時人貴ばず、乃ち之を相如に托し、遂に大に世に行はれしといふ。相如當日の聲望、亦た以て想見すべきに非ずや。

相如の人物の卑劣なると其賦の內容に乏しきとは、上に述べたる如くなれども、予は一個の修辭的賦家として、彼が獨絕の位地を占め得べきを公言するに憚らず。相如は、さすがに藝術的良心あり。故を以て經營慘澹、加ふるに、天賦の修辭的技工と相待つに及びては、殆んど其敵を絕てり。當時枚皐文章敏疾、而して相如制作遲淹、皆一時の譽を爲す。但し相如は、首尾溫にして、枚皐時に累句あり、故に揚雄之を比論して曰く、軍旅の際、戎馬の間、飛書馳檄には枚皐を用ひ、廊廟の下、朝廷の中、高文典作には、相如を用ふ、と。相如の賦、文理語脈、一點の疵瑕なく、たとへば春蠶絲を吐くが如く、層々斷えず、その意、一段は一段より深く、段盡き意極まれば、俄然一轉語を下す、變化あり、開闔あり、波瀾あり、毫も平板の病なし。故に揚雄往々その賦の理旨に慊らざるに拘はらず、亦た之を稱して曰く、もし孔氏の門賦を用ふれば、賈誼堂に升り、相如室に入ること。又曰く、長卿人間より來らず、其れ神化して至るところか、と。西京雜記に曰く、長卿の賦、詩人稱す、典にして麗と。詩人と雖も、加ふる能はざるなり、と。王世貞、又子虛・上林を評して曰く、材極めて富、辭極めて麗、而して筆を運ぶこと極めて古雅、精神極めて流動、意極めて高く、及ぶべからざる所以なり、長沙其意あつて其材なく、班・張・潘、其材あつて其筆なく、子雲其筆あつて、その精神活動の處を得ず、と。又曰く、屈氏の騷は騷の聖なるものなり、長卿の賦は賦の聖なるものなり、一は以て風し、一は以て頌す、體を造ること、極めて玄、と。

漢書藝文志に、司馬相如賦二十九篇といへども、今存するものは、如上の數篇のみ。又諫獵書・諭巴蜀檄・難蜀父老文・封禪文等あり、史漢二書、載するところの傳、自筆に係ると稱す。然れども、彼は到底賦家にして其文は綿麗骨少きの感あり。他に凡將一篇あり。文

字の學に精しく詞彩の麗、百世に冠たるもの、固より偶然ならず。

相如の妻文君、また藻思あり。相如、かつて陳皇后の爲に、長門賦を作つて、金を得、因つて妾を納れむとす。文君之を怨んで詩を作り、相如の死するや、又誄を作る、ともに誦すべし。おもふに生來多少の文才ある上に、其夫の感化、愈よ之を然らしめしなるべし。

(七) その他の賦家

相如と相並び、武帝の朝、賦家として知られしもの、他に枚皐あり。字は少孺。枚乘梁に在りしとき、皐の母を取つて小妻となす。その東に歸るや、皐の母、隨ふを肯んぜず、乘、怒り、皐に數千錢を分ち與へ、母とともに留まり居らしむ。年十七、梁の共王に上書して郎となりしが、後、讒せられて罪に遇ひ、亡げて長安に至り、赦に遇ふや、北闕に上書して、自ら乘の子なりと稱す。武帝もと乘を重んじ、迎へしも至らざるに因り、その子を問へども、能く文を爲るものなし。こゝに於て、大に喜び、殿中に賦せしめ、旨に協うて郎となる。皐、經術に通せず、詼諧俳倡に類す。賦頌を作爲し、好んで嫚戲し、因つて貴幸を得たり。當時、東方朔・郭舍人等、亦た文學滑稽を以て畜はる。皐、賦を作る、朔よりも善く、かつて帝の行に從ひ、甘泉・河東・泰山等に至る。帝感ずるところありて之を賦せしむるに、詔を受けて輒ち成れりといふ。當時司馬相如と殆んど相並ぶと雖も、拙速は遂に工遲に若かず。

皐亦た自ら之を知る、故に云ふ、爲賦不如相如、と。又、かつて自ら言ふ、爲賦廼俳、見視如倡、と。蓋し自ら悔ゆるなり。その賦、東方朔を詆毀せしものあり、又自ら其文を詆毀す。漢書藝文志、枚皐賦百二十篇と稱す、今存するもの、僅に數篇、しかも存亡ともに闕せざる底の作なり。

東方朔、やゝ特色あり。朔は滑稽家と稱せらる。滑稽家の由來するところ、頗る古るく、之を一言すれば、帝者狎臣の一種なり。然れども、彼は決して滑稽の雄を以て止むべきものに非ず。少にして古しへの傳書を好み、經術を愛するを以て、博く外家の語を觀るところ多く、はじめ長安に入り、公車に至つて上書するや、凡そ三千の奏牘を用ふ。公車兩人をして共に其書を擧げしめ、僅に能く之に勝つ。武帝、上方より之を讀み、止めば輒ち其處を乙ぬ、之を讀む二日にして乃ち盡く。其中に言ふあり、「臣朔年二十二、長九尺三寸、目は懸珠の如く齒は編貝の如く、勇は孟賁の如く、捷は慶忌の如く、廉は鮑叔の如く、信は尾生の如し。かくの如くして以て、天子の大臣と爲るべし、と。詔あり、拜せられて郎となる。朔の人と爲り、頗る滑稽なるは、蓋し深刻の世に處し、身を保つの一方便となせしに似たり。その、俗に陸沈して、世を金馬門に避く、宮殿の中、以て世を避け身を全うすべし、何ぞ必ずしも、深山の中、廬嵩の下のみならむや」といへる如き、尤も其意を見るに

足る。朔の滑稽は、多く諷諫に意ありて然るもの、決して、帝者に狎侮するを事とせず。又その死せむとするとき、武帝を諫め、巧佞を遠ざけ、讒言を退けむことを勸めし如き、豈に枚馬二人の比ならむや。故に夏侯湛、かつて之を賛して曰く、出でゝ休顯せず、入つて憂戚せず、雄節邁倫、高氣世を蓋ふ、と。褚少孫、誤つて滑稽を以て之を目し、揚雄・班固、亦た然るもの、何の故ぞ。朔の作るところ、七諫諸篇の如き、直に離騷の遺韵を傳へ低徊怨嗟、尤もその筆力を見るべく、その體、枚乘の七發に沿ふと雖も、辭意漸を以て深きは、又一種の創意、隱約の裏、その操守を見るべし。然れども、朔の本色は、諫起上林苑疏・答客難・非有先生論の三篇に在り。林希逸、その疏を評して曰く、義理甚だ正暢、利害甚だ明快、辭氣昌大美麗、典なるは黄鐘大呂の如く、郊廟に薦むべく、黼黻冕弁の如く、冠衮を表すべし。枚乘・鄒陽、文章を以て名づくと雖も、或は未だ過ぐる能はざるなり、と。徐中行曰く、朔が上林苑を諫止する一書、相如が諫獵・長揚に較ぶれば、更に宏贍古雅、乃ち西京諫書の第一なり、と。推稱至れりといふべし。答客難は、その體、宋玉の對問に本づき、又朔の創意に係る。後に揚雄の解嘲・崔駰の達旨・班固の答賓戲・張衡の應問、皆之に擬し、枚乘の七發と同じく、文家の一體となり、屋下屋を架するもの、百世盡きず。非有先生論に至りては、又實に阮籍大人先生傳等の粉本なり。朔の創設するところ、決して少しとせず。しかも、その文、之を一概して、豪宕不羈、縱横自在、宏贍にして美麗。枚皐、その賦を短ると雖も、朔の文章に於けるは、はるかに重きを爲す。十洲記、又その作と稱すれども、信ずべからず。漢書藝文志、朔の作を載せず、今存するもの、東方大中集あり、上に記せしものゝ外、なほ數篇の文あり。又詩三首あり、誡子詩、最も傳ふべし。

その他、武帝の世、士大夫、賦を善くするもの、頗る多く、藝文志、載すところの者のみを擧ぐるも、朱買臣に賦三篇あり、吾丘壽王に賦十五篇あり、見寬に賦二篇あり、莊忌の子莊助に賦三十五篇あり、其弟莊忽奇に賦十一篇あり。然れども、相如等と異にして、俳倡を以て朝に畜はれず、從つて、賦は餘技に過ぎず、その作、すでに少く、しかも又傳はらず。武帝以後、漢室漸く衰へ、帝者俳倡を畜はず、文士賦を以て活を爲すに足らず。これが故に、賦家を以て本職となすもの、殆んど之なしと雖も、偶ま之に及び其名を擅にするもの、極めて多し。劉向・揚雄の徒、前後に輩出して、西漢に鳴り、東京に入つては、班固・張衡・蔡邕ありて、その後、漢の末造に及ぶや、家國衰亡の感は、その音節詞調をして悲涼ならしめ、自ら骫骳の氣を帶び、俯仰徘徊の趣を極むに至らしむ。辭賦は、こゝに、又一轉し、自然の勢、多少内容を貴び、且つ主觀的に赴くの傾向を生じたり。六朝詞人の作、之を漢代に比して、規摸の宏壯を遜ると雖も、一種經綿の情致あるもの、主として此に本づく。

(八) 淮南王安

武帝の世、奎運頗る盛、帝又自ら詩賦を作り、その妙、之を以て家を爲すものに遜らず。こゝに於て、上の好むところ、下之より、甚しきものあり。當時の諸侯中、北には河南獻王德あり、南には淮南王安あり、各その地の思想と文學とを皷吹し、實に文界の保護者たりき。

淮南王安の父長は、孝文帝の弟なり、法を廢して不軌、國を失うて早く死す。文帝之を憐み、その三子を立て、故地を三分して、之に主たらしむ。こゝに於て、安は淮南王となれり。その人と爲り、書を好み、琴を皷し、弋獵狗馬馳騁を喜ばず、また以て陰德を行ひ、百姓を循附し、名譽を流さむと欲し、賓客方術の士を招致すること數千人、遂にその客、蘇飛・李尙・左吳・田由・雷被・毛被・伍被・晉昌等八人及び諸儒大山・小山の徒と道德を講論し、仁義を總統し、內書二十一篇を作爲す。外書又甚だ衆し、別に中篇八卷あり、神仙黃白の術をいふこと、亦た二十餘萬言。今に傳ふる淮南子は、その內書二十一篇のみ、當時稱して鴻烈といふ。高誘云ふ、鴻は大なり、烈は明なり、以て大に道を明かにするの書となせるなり、と。後に劉向校定撰具して、淮南內篇と名づけ、一に劉安子といふ。その中外二篇は、早く散佚せり。

武帝、すでに藝文を好む。安の屬、諸文たり、辯博善く文辭を爲るを以て、甚だ之を尊重し、書を報じ、及び書を賜ふごとに、文士を召し、草藁を視して、廼ち遣る。はじめ、安、入朝して、作りしところの內篇を獻じて、新に出づるや、帝、愛して之を秘す。また離騷の傳を作らしめしに、旦に詔を受け、日食時に上る。又頌德及び長安都國頌を獻ず。安、見具する每に、得失及び方技賦頌を談說し、昏暮にして然る後に罷む。たゞ荊楚亂を好むこと、古しへより然るものあり、淮南の客、又この地の人多く、遂に反を爲し、元狩元年、自刎して死す。安、實に客を以て其名を爲し、又客を以て其身を誤る、蓋し自ら取るのみ。

淮南君臣の作、頗る多し、漢書藝文志に曰く、淮南王賦八十二篇、曰く、淮南王群臣賦四十二篇、と。然れども、後世傳ふなく、唯だ招隱士の一篇、楚辭に收む。屈原を閔傷するに因つて作り、全篇太だ單醇、唯だ王孫兮歸來、山中兮不可以久留の二句、杳然とし神遠し。

淮南子の一書、今に之を傳ふ。この書、元と諸人の討論に出てたりと雖も、文氣格法の能く整一するを見れば、安の手裁に出でしや、明かなり。その書、はじめて成るや、愛慕する者、見るを得ず。見れば、拱璧を得るが如く、自ら云ふ、字々風霜を挾む、と。揚雄又以爲へらく、一出一入、字字百金に直す、と。皆その文を稱するなり。之に次いで、その內容の博洽俊偉を稱するもの、後世その人に乏しからず。劉知幾が「天地を牢蓋し、博く古今を極む」

といひ、黄震が「淮南鴻烈は、文辨を以て天下方術の士を致し、諸子を會粹し、旁ねく異聞を搜つて之を成す。凡そ陰陽造化天文地理四夷百蠻の遠き、昆蟲草木の細、瓌奇詭異にして、人の耳目を眩するに足るもの、森然として其間に列せざるなし。蓋し天下類書の博なるものか」といひ、高誘が「その大を言へば、天を覆ひ、地を載せ、其細を說けば、根なきに淪む、古今の治亂、存亡禍福、世間の詭異瓌奇の事、その義や著しく、その文や富む、物事の類、載せざるなし」といひ、高似孫が「その文字、殊に新特多く、士の常を厭ひ俗を玩ぶもの、往々にして其書を愛す。況んや、その物理を推測し、陰陽を探索する、卓然として、人の意表に出づるものあるをや」といひ、王世貞が「淮南鴻烈は錯雜に似たりと雖も、而かも氣法あるは、當に劉安の手裁に出て、しなるべし」といへるが如き、即ち是れなり。而して之を斥くものは、その雜駁にして一貫せる思想なきを痛論す。揚雄が「淮南の用は太史公に若かず、太史公の用は聖人將に取るあらむとす。淮南は取ることなきのみ」といひ、王宋沐が「淮南鴻烈、その說、固より曲學者流、能く吾儒の爲に重んぜらるるなし」といへる如き、即ち是れなり。然れども、公平に考ふれば、淮南の學は南北兩思潮調和の規畫に本づき、子思の性論を以て、老莊の形而上學に聯結せむと欲せしものにして、哲學史上一顧の値なきにあらずと雖も、文學上よりいへば、詞賦の麗辭を以て理義の高論を潤色せむと欲せしものにして、甚だ謂なき事に屬す。加之、先秦思想家の情熱を缺くを以て、絶えて人を感發するの力なく、字字果して風霜に挾むや否や、百金に直するや否や固より知るべからず。たとひ、絢爛目を奪ひ、汪洋涯なしと雖ひ、散文よりは、むしろ辭賦に近く、まさしく、六朝文學の俑を作りしものなり。要するに、淮南子の書、その撰述の次第、呂氏春秋と甚だ相似たりと雖も、文に於ては、むしろ、夐かに劣れりといはざるべからず。

(九) 司馬遷

漢の史、唐の詩、宋の文、元の曲、これ尋常口頭の語にして、その時代の特殊的產物を列擧せしものなり。就中、漢の史の尤も重きを爲せるは、實に一人の司馬遷ありしに因る。こゝに便に從ひ支那に於ける歷史の發展に就いて略述するところあらむか。黄帝以後、三代の間、左史事を書し、右史言を記せしは、かつて前に述べたる如く、周官・禮記に太史・小史・內史・外史・左史・右史の目あり。當時の史官にして、その名の存するもの、夏には太史終古あり、殷には太史向摯あり、周には史佚あり、太史伯陽あり、太史儋あり、その書今傳はらずと雖も、左傳に夏訓を引き、杜註に夏書なりとあり、又夏殷春秋といへるものの、かつて存せしといふ。而して、書經は、實に三代右史の記錄より拔抄せし者なり。之に

次いで、春秋時代、諸侯の國に觀るに、左傳に「魯の季孫、外史をして惡臣を掌らしむ」といひ、衞史龍滑曰く、我は太史なり」といひ、他に趙盾其君を弑すと書せし晉の董狐あり、晉の亂を見、その圖籍を以て周に歸せし太史屠黍あり、兄弟三人相繼いで崔抒の罪を書せし齊の太史あり、三墳五典九丘八索の書を讀むといはれし楚の左史倚相あり。その他、一一擧げず。又孟子に楚の檮杌・晉の乘・魯の春秋、その事、一なりといへる如く、各國皆記錄あり。孔子は魯の史記に因つて春秋を作り、左丘明は博く史料を各國に求め、之に依傍して左傳・國語の二書を著はし、古しへ左右二史撰述の主旨を傳へしこと、かつて考察を經たり。降つて戰國に及ぶも、史氏ひとり廢せず、趙鞅は晉の一大夫なれども、直臣過を書して、簡筆を門下に執るものあり。田文は齊の公子のみ、坐して賓客に對する毎に、侍史屏風に記す。澠池の會、秦趙二王、各その御史に命ぜしが如き、以て觀るべきなり。然れども、先秦時代、諸侯の記錄は、秦火楚炬の二變に盡きて、その一を存ぜず、又眞正の歷史として、黃帝以後、春秋の時に至るまで、帝王公侯卿大夫の系譜を錄せし世本十五篇と、漢初陸賈の手に成りし楚漢春秋九篇とありしが、漢の中葉以後、その傳を失せり。かくの如くして、司馬遷は其著を以て後世に知らるゝ第一の史官なりき。

司馬遷の先は、周室の太史なり。上世より、かつて功名を虞夏に顯はし、世々天官の事を掌る。後世中ごろ衰へ、その父談に至り、學あるを以て、太史公となりしも、武帝甚だ之を重んぜず、戲弄倡優、之を畜ひ、又流俗に輕んぜらる。遷は其子なり、龍門に生れ、河山の陽に耕牧し、少にして、不羈の才あり。年十歲、古文を誦し、二十以後、諸方に遊び、後仕へて郎中となり、使を奉じて、西、巴蜀以南を征し、南、邛筰昆明を略し、還つて報命す。この歲、武帝はじめて泰山に封ず。而して、父談、太史公として、周南に留滯し、事に與り從ふを得ず、憤を發して、將に卒せむとす。遷、適ま使して反り、父を河洛の間に見る。談、遷の手を執り、修史の業を完うすべきを遺命し、聲淚交も下る。談卒して三年、遷、太史公となり、史記石室金匱の書を綴集し、一意父の遺志を果さむとす。偶ま李陵の禍に遭ひ、又その志を激し、遂に之を成す、今傳ふるところの史記、即ち是れなり。西京雜記に云ふ、陵の匈奴に降るや、遷を蠶室に降す、怨言あり、獄に下つて死す。宣帝その官を以て令となし、太史公文書の事を行はしめ、復たその子孫を用ひず、と。遷の末運、何ぞ其れ慘なるの甚しきや。

漢代の傾向は、回顧に在り、集成に在り、敍事に在り、且つ之を表面よりいへば、武帝の世、漢祚正に其隆を極め、武威諸蠻に及びし時、史記の作、昭代の盛を誇張せむが爲にせしものとも云ひ得べく、要するに、時勢の必然的產物なり。

凡そ千古に不朽なるべき大なる撰述には、必ず大なる準備を要すること、言を俟た

ず。遷は世襲の史官にして、出來得る限りの史料を閲覽し、愼重の態度を以て、之を考證取捨せしこと、固より當に然るべしといへども、猶ほ大なるものあり。前にも述べし如く、遷は年二十に及びし頃より諸方を遊覽せり。蓋しその志、史蹟の實地討査に在り。その自ら記するところに因れば、「南は江淮に遊び、會稽に上り、禹穴を探り、九嶷を窺ひ、沅相に浮び、北は汶泗を渉り、業を齊魯の都に講じ、孔子の遺風を觀、鄒嶧に鄉射し、鄱薛彭城に阨困し、梁楚を過ぎて歸る」といひ、漢より以前、列國の興廢起伏せしところ、殆んど之を探り盡くせり。游踪の廣きこと、かくの如く、その間、河嶽英靈の景を綜覽し、人物文章の秀に接見し、地方風俗の異同、人種好尚の差別をも概察し、因つて、大に識力を增し、文氣を鼓舞し、副次的利益を得しこと、固より異常なりき。蘇轍の韓魏公に上る書に、「太史公、天下を行り、名山大川を周覽し、燕趙間の豪傑と遊ぶ、故に其文疎宕にして自ら奇氣あり」といへり。又かつて自ら「天官を唐都に學び、易を楊何に受け、又道論を黃生に習ふ」といへる如く、あらゆる當時の學術の素養を積み、文學哲學は云ふに及ばず、天文土木の末に至るまで、一として通ぜざるところ無きものゝ如く、又北方の產なるに拘らず、老莊の學說をも闚ひ、諸學派の長短上下を公平に批判するの識力に至りては、專門の學者、却つて及ばざるものあり。その六家の要旨を論じ、六經の歸指を說きたるが如き、簡切にして該當、以て予が前言の謬ならざるを知るべし。かくの如き素養と識力とあり、之に加ふるに、天地を動かし鬼神を泣かしむる底の筆力を以てす。彼の如きは古今稀に見るところ、天成の大歷史家といふも、決して過褒に非ず。劉知幾、かつて史を作るに三長あるを論じ、才學識、その一を缺くべからざるを斷言せしが、之に當るものゝ、とり司馬遷あるのみ。

實際的傾向を有する支那人は、詩を以て敎訓となせしと同じく、歷史を以て亂臣賊子を筆誅する褒貶の宣告書となせり。然れども、蘇老泉が「遷固の史、是非あつて賞罰なし、彼れ亦た史臣の體、宜しく然るべきなり」といへる如く、史記は、之を春秋及び左公穀三傳に比較するとき、夐に其選を異にし、その體裁、純然たる歷史に近きものあり。かくの如きは、その創意に係る記事本末の一體、自ら然らしめしところ、之を要するに、遷は支那に於ける純然たる歷史家の祖なり。

史記の如何なる書なるかは、世人すでに熟知するところ、特に絮說を要せず。その篇末に載する太史公自序は、其書の性質とその價値とを自ら說明したるものにして、其意の在るところを察するに足る。曰く、天下の放失せる舊聞を網羅し、王迹の興る所以、始を原ね、終を察し、盛を見、衰を觀、これが行事を論考し、略ぼ三代を推し、秦漢を錄し、上

軒轅を記し。下、こゝに至るまで、十二本紀を著はし、すでに之を科條す。時を並べ、世を異にし、年差明かならず十表を作る。禮樂損益し、律歷改易す、兵權山川鬼神天人の際、敝を承け、變に通じ、八書を作る。二十八宿、北辰を環り、三十輻、一轂を共にし、渾行窮なく、輔弼股肱の臣、配せられ、忠信道を行ひ、以て主上に奉ず、三十世家を作る。義を扶けて倜儻、これ時を失はしめず、功名を天下に立つ、七十列傳を作る。凡そ百三十篇、五十二萬六千五百字、太史公の書となす。序略以て遺を拾ひ、一家言となし、六經の異傳を協へ、百家の雜語を齊へ、これを名山に藏す、副は京師に在り、以て後世の聖人君子を俟つ、と。

史記百三十篇、遷の死後、孝景記・孝武記・禮書・樂書・兵書・漢興以來將相年表・三王世家・日者列傳・龜策列傳・傅靳蒯成列傳を失ふ。その後、褚少孫、之を補撰したれども、文辭鄙陋、狗尾續貂の誚を免るゝ能はず。しかも、その增入、決して、この十篇に止まらざること、趙翼の論の如し。

史記の著作は、遷が畢生の大事業なり。而して、その未だ半ならざるに、李陵の禍に遇ふ。その任安に答ふる書を見るもの、誰か一幅の痛涙を濺ぐことを禁ぜざらむ。曰く李陵すでに生きて降り、その家聲を隤し、重ねて天下の觀笑となる、悲いかな、悲いかな。事、未だ一二俗人の爲に言ひ易からざるなり。僕怯弱、苟くも活きむと欲すと雖も、亦た頗る去就の分を識る、何ぞ自ら縲紲の辱に湛溺するに至らむや。且つ夫れ、臧獲婢妾、猶ほ能く引決す、況んや、僕の已むを得ざる若きをや。隱忍苟も活き、糞中の土に幽して辭せざる所以の者は、利に盡きざるところあるを恨み、世を沒して文采後に表れざるを鄙めばなり。古しへは富貴にして、名、摩滅するもの、勝げて記すべからず、唯だ倜儻非常の人のみ稱せらる。蓋し西伯拘はれて周易を演じ、仲尼戹んで春秋を作り、屈原放逐せられて乃ち離騷を賦し、左丘明を失うて厥れ國語あり、孫子脚を臏せられて兵法修列し、不韋蜀に遷されて、世、呂覽を傳へ、韓非秦に囚へられて說難孤憤あり、詩三百篇、大抵聖賢發憤して爲に作るところなり。これ人皆意に欝結するところありて、その道に通ずるを得ず、故に往事を述べて來者を思ふ。左丘目なく、孫子足を斷たるゝ如きに及びては、終に用ふべからず、强ゐて書策を論じて、以てその憤思を舒べ、空文を垂れて、以て自ら見はす。僕竊かに不遜、近く無能の辭に托し、天下の放失せる舊聞を網羅し、之を行事に照し、その成敗興壞の理を考へ、凡そ百三十篇、亦た以て天人の際を究め、古今の變に通じ、一家の言を成さむと欲す、草創未だ就らず、此禍に會ひ、其成らざるを惜む、是を以て、極刑に就いて慍色なし、僕誠に此書を著し、之を名山に藏し、之を其人の通邑大都に傳へば、僕、前辱の責を償ふ、方に戮せらるると雖も、豈に悔あらむや、これ智者の爲に道ふ

べくして、俗人の爲に言ひ難きなり、と。かくの如くして、遷は知己を千秋の後に待てり。而して「周公より五百歳にして孔子あり五百歳にして斯に在るか」といひしが如き、自ら待つところ、すでに淺からず、其書を以て、六經以後の大作となせる絶代の抱負を見るに足るべし。

單に史家として、遷を見るも、識見超絶なること、すでに前に述べしが如く、黄帝以前は、雅馴ならずとして、故らに之を記せず、且つ項羽を以て本紀に列し、孔子を以て世家に上ぼしたる如き、固より多少の議論ありと雖も、兎も角もその識見の卓異なるを知るに足る。これに加ふるに、成敗の跡を以て、漫然人物を論ずるの愚を爲さず、常に無限の同情を寄せ、迂腐なる儒教的見地より一歩を踏過せるは、問はずして明かなり、然ども、當時挾書の律、はじめて除かれしのみにして、書を得るの道、未だ廣からず、秘府の藏、宏富ならざるに非ざるも、上下數千年に亘る正史を編述せむには、猶ほ材料の不足を嘆すべかりしこと必せり。その主として依據せしは、世本・國語・戰國策・楚漢春秋の類のみ。而して詞彩を重んずるの極、時に事實を曲げしやの嫌なきに非ず、且つ年次の推度、固より十分ならず、後世或は之を論ずるものなきに非ずと雖も、上記の事情を審かにするものは、十分の寛容を爲すに吝ならざるべし。劉向・揚雄、一時の博雅を以てして、猶ほ且つその良史の才あるを推稱す、他は知るべきのみ。

班固が、獨り之を否斥し、「その是非、頗る聖人に繆れり。大道を論ずれば、黄老を先にして六經を後にし、遊俠を序せば、處士を退けて姦雄を進め、貨殖を述ぶれば、勢利を崇びて賤貧を羞とす、これ其蔽とするところなり」といへる如きは、全く自ら其業を伸ばさむが爲に、特に瑜瑕を穿鑿するものにして、斷じて篤論に非ず。如上の數者、その諷意ありと否とは、姑らく措き、之を史的事實として記述する、何の不可かあらむ。古人云ふ、仲尼は多愛、義を愛するなり。子長は多愛、奇を愛するなり、と。その多恨にして、豪を喜ぶや、乃ち然りと雖も、又一隻の眼あるものといふべし。予は遷が取材の範圍、決して狹隘ならず、その識見の陋固ならざるを多とするものなり、

史記の内容及び規畫は、略ほ此の如く、その筆力文致に至りては、更に偉なるものあり、摹寫盡く其神に入り、一として可ならざるなく、項羽本紀・留侯世家・刺客列傳・淮陰侯列傳・遊俠列傳等、千古の絶調たるは、今復た贅せず。魏其武安列傳の如き、尋常瑣細の事實を描破して、筆々生動、さながら之を眼前に見るが如し。世に「事實は小説より奇なり」といへる語あり、一部の史記、殆んど是れなり、垓下の圍深くして、楚歌の聲裡、數行虞氏の涙を濺ぐが如き、圯橋書を授け、穀城俗を謝し、黄石・赤松、巧に對偶を爲すが如き、寵姫

臥内の兵符を盜んで、公子兵を發し、力士四十斤の鐵推、嚄唶たる宿將を殺し、邯鄲圍解け、秦軍却走すといふが如き、知らず是れ何等の情趣ぞ。遷の文、その變化跌宕の處に至りては、左氏猶ほ且つ遜色あるに似たり。試に古人の評語二三を擧ぐれば、呂祖謙は「太史公の書法、指意の深遠、寄興の悠長、微にして顯、直にして變、文、こゝに見えて起り、景、彼に在り、魚龍變化、得て蹤跡すべからず」といひ、黄復翁は「子長措辭深く、寄興遠く、抑揚去取、自ら一家を成す、天馬駿足、步驟凡ならざるが如く、少しも籠絡に就くを肯んぜず、かの孟堅、墓規倣矩、甘んじて籬下に寄す、安んぞ子長の風を望まむや」といへり。而して、遷の筆を行るや、行雲流水の如く、優に風神あり、平直の病なく、しかも質厚を失はず。李塗曰く、西漢文字を尙ぶ、司馬子長、變じ得て、此の如し、文終に質なるを失はず、と。凌約言、又六經以後の四文豪を品して曰く、六經よりして下、古に近くして閎麗なるものは、左丘明・莊周・司馬遷・班固の四鉅公、ともに成書あり、その文章、卓々乎として大家を擅にせり。左傳は楊妃の盛に舞ふが如く、廻旋搖曳、光彩人を射る。莊子は神仙世に下るが如く、咳唾を吐けば、沙を成す。子長の文は豪、老將兵を用ふるが如く、縱騁羈すべからず、而かも自ら律に中る。孟堅の文は整、之を武事に方ふれば、その遊奇布列、尺寸を爽はず、而して部勒雍容、觀るべし諸家機軸變化同じからずと雖も、要するに、皆文章の絶枝なり、と。

遷亦た、時習に從つて賦を作る。漢書藝文志に司馬遷賦八篇といへり。或は云ふ、司馬遷、文を以て賦を作り、司馬相如、賦を以て文を作る、と蓋し中れるが如し。今皆傳はらず。

（一〇）董仲舒及び劉向父子

武帝が一たび儒を標章してより、その學、大に世に行はれしと雖も、訓詁記誦の末に趨くもの、爭でか創思特見あるを得む。然り、時に其人なきに非ざれども、第二流以下の輩、たとひ、博學能文の譽、一世に高く、善く北方の思想及び文辭の命脈を絶たざりしと雖も、先秦孟荀諸家、旺盛の氣力なく、その集中の死文字は、遂に人心を震盪する能はずして止みぬ、

董仲舒は、廣州の人、博士たり、帷を下して講習す、弟子その面を見ることなく、又三年園を窺はず。精勵刻苦、かくの如く、その進退容止、禮に非ざれば行はず、武帝位に即いて、賢良方正の士を擧ぐ、前後數百、仲舒賢良を以て對策す、前に謂ゆる天人策、即ち是れなり。武帝その言を嘉し、擧げて江都の相となし、易王に事ふ。易王は帝の兄、素より驕つて勇を好む。仲舒、禮誼を以て醫正し、王敬重す。仲舒國を治むるに、春秋災異の變を以てし、陰陽の錯行する所以を推す。中ごろ廢して中大夫となり、次いで、又災異を言ひ、之を繆りしに坐して黜けらる。仲舒人となり廉、公孫弘と相善からず。膠西王、尤も縱恣にして、

數ば吏二千石を害す。弘、乃ち帝に言ひ、仲舒を以て、其相となす。膠西王、仲舒の大儒なるを聞き、善く之を待つ。仲舒久くして皐を獲むを恐れ、病んで免す。次いで、桂巖山に居り、桂巖子と號し、產業を修めず。學を好み、書を著すを以て事となす。その家居するや、朝廷儀あれば、使者をして、其家に就いて、之を問はしむ。その後、年老ひ、壽を以て家に終り、因つて茂陵に徙り、子孫皆學を以て大官に至れりといふ。

仲舒の學說、主として天を言ひ、五行讖緯の說を以て之を潤色す、頗る淺近なり。而して、その天を言ふは、詩書に見えたる拜自然的精神を推衍したるものなれども、その愛利を幷立するは、自ら墨子と神契するところあり、儒としては、稍や醇ならざるに似たり漢書藝文志儒家に董仲舒百二十三篇あり、今存せず。春秋繁露、傳へて其著となす。然れども、學者その僞を疑ふものあり。春秋といひ繁露といひ皆書中の篇名、他に玉杯・竹林等あるに拘らず、獨り之を以て名づく、その故を知らず。史記・漢書。言之に及ばず、頗る異とすべし。而して、五行對に「河間獻王、溫城の董君に問うて曰く」の句あり、その自筆に非ざること言を俟たずおもふに、門弟子、その說を蒐錄せしものか。仲舒又士不遇賦一篇あり、今に之を傳ふ。

仲舒と前後して、公孫弘・兒寬・卜式等あり。就中、弘、最も稱すべく、遂に相となる。漢書藝文志儒家に、公孫弘十篇・兒寬九篇あり。又終軍八篇・吾丘壽王六篇・莊助四篇等あれども、皆殘缺して全を存せず、史漢の本傳、その一兩篇を觀るのみ。

前漢の末、儒を以て稱せられしもの、劉向父子に及ぶものあらず。向、字は子政、楚の元王の後、漢の同族なり。はじめ、更生と名づく。宣帝の時、武帝の故事に循ひ、名儒俊材を招選して左右に置く。更生、通達にして能く文辭を屬し、王褒・張子僑等と並に進對し、賦頌を獻ずる、凡そ數十篇。帝、復た神仙方術の事を興す、而して、淮南に枕中鴻寶苑秘書あり、書は神仙鬼物を使ひ、金を爲くるの術、及び鄒衍道を重ね命を延ぶるの方を言ふ、世人見しことなし。而して、更生の父、武帝の時、淮南の獄を治めて、其書を得、更生幼時讀誦して奇となし、之を獻じて、黃金成るべきをいふ。費甚だ多くして驗なく、因つて吏に下され、その兄、贖うて死を免る。會ま穀梁春秋を學官に立つるや、更生を徵し、又五經を石渠に講論し、遂に用ひられて中に給事す。元帝即位、太傅蕭望之・少傅周堪等と心を同うして、政を輔け、屢ば上書して、災異を言ひ、又嬖臣權家を斥くべきを言ふ。終に志を得ず。望之等の死するや、頗る之を傷み、疾讒・摘惡・救急及び世頌等、凡そ八篇を著し、因つて、遂に廢せられしこと十餘年、成帝の世、又進用せられ、名を向と更め、屢ば封事を奏し、光祿大夫に遷る。この時、政、元舅王鳳の手に在り、兄弟七人、皆列侯たり。時に災異多し。向、外戚貴

盛の咎となす。帝、正に詩書に精しく、古文を觀、向に詔して、五經秘書を領せしむ。乃ち洪範五經傳論を上り、王氏の專權を斥く。帝、之を知れども、遂に王氏を廢する能はず。之に久うして、向墓陵を起すの大奢なるを諫め、又趙后・衞婕妤等微賤より起り、禮制を踰え、宮闈頗る紊るを觀、列女傳を薦め、又新序・說苑を上り、次いで數ば上疏す、書凡そ數十。帝之を用ふる能はずと雖も、內、その言を嘉し、常に嗟嘆す。帝、繼嗣なく、政、外家に出て、災異愈よ多し。こゝに於て、封書を上る。その言、頗る激切。帝、向を召して見、その意を嘆息悲傷し、之に謂つて曰く、君、且つ休せよ、吾將に思はむとす、と。遂に以て中壘校尉となし、因つて九卿となさむと欲せしも、王氏位に在るもの、及び丞相御史の助くところとならざるを以て、終に遷らず。列大夫の官に居ること、前後三十餘年、歲七十二にして卒す。後十三年、王氏遂に漢に代る。向、人と爲り、簡易にして威儀なく、廉靖にして道を樂み、世俗と交接せず、專ら思を經術に積み、晝は書傳を誦し、夜は星宿を觀、或は寢ねずして旦に達す。その好學、想ひ見るべし。

その著、列女傳・新序・說苑、今に傳へ、唯だ新序中、廿篇を失ひしのみ。又、劉中壘集あり。賦一篇・騷一篇・疏七篇・上書封事議對の屬七篇・頌一篇・銘二篇・序七篇・及び洪範五行傳あり。宋の元豐の間、館閣の諸名士、ともに古今人物の得失を商較す。王安石云ふ、漢元の晩節、

劉向數ば天下の事疑を言うて、太だ分を犯す、と。呂晦叔曰く、同姓の卿なればか、と。衆以て然りとなす。その趣、屈原放流、なほ君を思ふと相似たり。故に騷に九嘆あり。王逸序し、曰く、向、博古敏達を以て經書を典校し、舊文を辨章し、屈原忠信の節を追念するや、故に九嘆を作る。嘆は傷なり、息なり、言ふは、屈原放れて山澤に在り、なほ君を傷念して、嘆息已むなし、謂ゆる賢を讃し、以て志を輔け、詞を騁し、以て德を耀かすものなり、と。その間、豈に托するところなからむや。唯だ其學五行に拘す、蓋し當時の流弊のみ。その人、すでに簡易、文また簡易、重厚博大はあれども、雄豪の致なし、而して、所長は敍事に在り。說苑・新序・列女傳等の文、未だ高からずと雖も、明媚人に近く、博洽亦た賞すべく、班固が「豈に直諒多聞、古人の益友に非ずや」といひしもの、決して過褒に非ず。その書疏、又敍事に善く、唐順之、かつて之を稱せり。要するに、劉向その人、儒家としては、董仲舒・揚雄の間に介在すべく、史家としては、遷固の次に列すべく、拘忌多しと雖も、忠亮の節、まことに稱すべく、亦た一大家となすに足る。三子あり、歆尤も著はる。唯だ王氏に媚付し、父の志に負くは、頗る醜とすべし。

劉歆は、向の子、少にして、詩書に通じ、善く文を屬すを以て、召見せられ、詔を受けて父と秘書を校し、父の死後、復た中壘校尉となる。哀帝即位、王莽に擧げられて、光祿大夫に

遷り、大に貴幸せられ、父に襲ぎて、復た五經を序す。歆乃ち六藝群書を集め、種別して、七略となし、父の前業を卒る。漢書藝文志は、其要を摘みしものにして、實に目錄の學を掬めしものなり。歆の父子、はじめ皆易を治む。宣帝の時、向に詔して、穀梁春秋を受く。歆、秘書を校するに及び、古文春秋左氏傳を見て、大に之を好み、その書、はじめて世に行はる。これ近時左傳を以て、歆の僞撰に出づとなすの說を生ずる所以なり。而して、之を以て、諸博士を責讓するや、執務大臣に忤ひ、衆儒の訕るところとなり、誅を恐れ、外に出てゝ三郡に守たり。數年にして官を辭す。莽、もと歆を重んず、政を持するに及び、明堂辟雍を治めしめ、紅休侯に封じ、儒林史卜の官を典らしめ、律歷を考統し、三統歷譜を著はす。幾もなくして、莽の位を簒するや、國師となり、名を秀と改む。嗚呼、父は漢を存するに拳々として、子は其賊に依る、咄々怪事、その人物の鄙劣、知るべきのみ。後、遂に莽の誅するところとなる。

その著七略、傳はらずと雖も、漢書藝文志、實に之に仍る。はじめて、支那文獻を考覈せし功、亦た沒すべからず。劉子駿集、賦三篇・書三篇・議三篇・序論各一篇、その文、典實峻潔、務めて、三代を模倣す、筆力勁健なれども、次に載する揚雄と相並んで、千古に通有なる惡弊の俑を作りしものなり。その學術をいへば、父に過ぐと雖も、人物は、却つて及ばず。而して父子兩世の間、偶ま文界趨勢の轉向期に際せしは、最も注意すべし。

向と同時に匡衡あり、詩に通じ、又善く之を作る。郊祀歌十九章中、その遺篇を見る。又奏疏數篇、漢書の本傳に載す。その文、溫にして雅。若し夫れ、張禹・孔光の輩に至りては、講經を以て奇利を釣るもの、その人、すでに稱するに足らず、文亦た傳はらず。谷永・杜欽の徒は、歆と同時、文章人物、相似て、ともに汚下なり。その文、頗りに對偶を雜へ、四六の傾向、愈よ明晰なり。知るを要す、前漢の末、すでに駢儷と模擬との端を開き、仍つて、八代文章の衰を促せしことを。

（一一）王褒及び揚雄

劉向と時を同うし、その北方文學を代表せしに對し、南方文學を代表せしものを王褒となす。而して、揚雄は劉歆と相並ぶ。

王褒、字は子淵、蜀の人、宣帝の時、武帝の故事を修め、六藝群書を講論し、博く奇異の好を盡し、能く楚辭を爲むるものを徵すや、九江の被公、召見せられ、益す高材劉向・張子僑等を召す。神爵五鳳の間、天下殷富、數ば嘉應あり、帝頗る歌詩を作り、協律の事を興さむと欲す。丞相魏相、奏して、音を知り善く雅琴を鼓するもの、渤海の趙定・梁國の龔德をいひ、皆召見せらる。こゝに於て、益州刺史、風化を衆庶に宣べむと欲し、王褒の俊材あるを

聞き、請うて相見、褒をして、中和樂職宣布詩を作らしめ、好事を選び、鹿鳴の聲に依り、習うて之を歌はしむ。褒、亦た其傳を作る。刺史、因つて褒が軼材あるを奏す。帝迺ち之を召し、その至るや、聖主得賢臣頌を作らしむ。この時、帝、頗る神仙を好む、故に褒の對、之に及ぶ。帝、數ば褒等を從へて放獵し、幸するところの宮館、輒ち歌頌を爲らしめ、その高下を第し、差を以て帛を賜ふ。識者多く以て淫靡不急となす。帝曰く、博奕なるものあらざるか、之を爲す、猶ほ已むに賢る。辭賦の大なるものは、古詩と義を同うし、小なるものは、辯麗喜ぶべし。たとへば文に綺縠あり、音樂に鄭衞あるが如し。今、世俗なほ此を以て耳目を娛ます、辭賦之に比すれば、尙ほ仁義風諭あり、鳥獸草木、多く之を聞く、倡優博奕に賢るや遠し、と。頃くして、褒を擢んでゝ諫大夫となす。その後、太子體安からず、忽忽善忘を困しんで樂まず。詔して、褒等をして、皆太子の宮に之き、太子に娛侍し、朝夕、奇文及び自ら造作するところを誦讀せしめ、疾愈ゆるや、迺ち歸る。太子、褒の爲りしところ甘泉及び洞簫の頌を喜び、後宮左右をして、皆之を誦讀せしむ。後、方士云ふ、益州に金馬寶鷄の寶あり、祭祀して致すべし、と。宣帝、褒をして、往いて視せしむ、道にして病死し、帝之を閔惜すといふ。

漢書藝文志に、王褒賦十六篇といへども、王諫議集に載するところは、洞簫一篇のみ。騷に九懷あり、論に四子讓德論あり、頌に聖主得賢臣頌・甘泉頌あり、他に雜文三篇あり、張溥曰く、王生俊才、歌詩尤も善く、太子に進御し、中和諸體を外にせず。然れども、辭、理よりも長く、聲偶漸く階す、固より西京の一變なり、と。同時の張子僑、亦た賦三篇ありしといふ。

揚雄、字は子雲、蜀の成都の人、蜀人の思想界に於ける、曩に文士としての司馬相如あり、今又雄の出づるあり、大に氣焰を吐き得たりといふべし。少にして、學を好み、章句訓詁を爲さずして通ず、而かも、博覽にして、見ざるところなし。人と爲り、簡易佚蕩、口吃にして劇談する能はず、默して深湛の思を好み、淸淨亡爲、嗜好少く、富貴に汲々たらず、貧賤に戚々ならず、廉隅を修めて名を當世に徼むることを爲さず、家產十金に過ぎず、乏しくして儋石の儲なく、なほ晏如たり。自ら大度ありて、聖賢の書に非ざれば好まず、その意に非ざれば富貴と雖も、事とせざりきといふ。年四十餘、蜀より來つて、京師に至るや、客にその文、相如に似たりといふものあり、大司馬車騎將軍王音、之を奇とし、召して門下史となし、之を薦め、後數ば賦を上りしにより、遂に除して郎給事黃門となる。哀帝の時、董賢事を用ひ、權人主を傾け、薦むるところ、拔擢せざるなく、これに附離するもの、或は移つて二千石に至る。而して、雄や官を移さず、方に太玄を著し、自ら守ること泊如

たり。或は雄を嘲るに、玄の尙ほ白きを以てするものあり。乃ち文を作つて之を解し、號して解嘲といふ。世なほ之を傳誦す。王莽、漢祚を簒するに及び、談說の士、符命を用ひ、功德を稱し、封爵を得しもの、甚だ衆し。雄も、亦た之に附隨したりしが、遂に侯たらず、僅に耆老の次を以て、轉じて、大夫となる。劇秦美新の文は、この時に作りしものといふ。その後、劉歆・甄豐、皆上公たり。雄、ひとり、移らず。莽すでに符命を以て自立したりしと雖も、即位の後、その原を絕ち、以て前事を神にせむと欲す。而して、豐の子尋・歆の子棻、復た之を獻ず、莽、豐父子を誅し、棻を四裔に投ず。辭の連及するところ、便ち收めて請はず。時に雄、書を天祿閣に校す、使者來つて雄を收めむとす。雄自ら免れざるを知り、乃ち閣上より投じ、幾んど死す。莽、之を聞き、雄、實に情を知らずとなし、詔して問ふなからしむ。然れども、京師之が語をなして曰く、惟寂寞自投閣、爰淸淨作符命、と。未だ幾ならずして、病を以て免じ、後復た召されて大夫となりしが、天鳳七年、遂に卒す、年七十一。

劇秦美新の一文は、雄をして、後世の誚訾を受けしめし唯一の原因なれども、之に就いては頗る異論あり。或は斷じて、劉棻の作となし、或は谷子雲の作となし、明の焦竑の如き、雄の年次、莽の世に及ばず、漢書の本傳、この邊、亦た班固の手筆に非ざるを以て絕對的憑據を値せざるを論斷せり。されば、雄の年代及び事蹟は、實に未決の疑問にして、唯だ朱子が綱目に誌するところ、新莽大夫たるの故を以て、直に之を評價すべからざるなり、

揚雄は、西漢末造の大儒。否、むしろ漢代を通じての大學者なり。その識と學と、固より董仲舒に駕して上る。而して、その多能なるや、賦を作りて、幾多の群小作家を壓倒し、司馬相如と並び稱せらる。但しその文士的生活は、四十以前に限られ、その間、最も好みしものは、辭賦の一體なりき。これより先、蜀人に司馬相如あり、その辭を作るや、弘麗溫雄なり。雄、心に之を壯とし、自ら作る每に、常に之に擬し、以て式となす。また屈原を弔ふの諸作あり、その文、名づけて反離騷と云ふ。又離騷に旁うて、重篇を作り、名づけて、廣騷といひ、惜誦より懷沙に至るまでの諸篇に旁うて、一卷を著し、名づけて畔牢愁といへり。然れども、その後半生は、全く哲理的思辨の爲に斷送されたり。その故、他なし、辭賦著作の價値、乏しきを認識したるに在り。彼の說に依れば、賦なる者は、將に以て風せむとするなり、必ず類を推して言ひ、麗靡の辭を極め、閎侈鉅衍、人をして加ふる能はざらしむを競ふなり。すでに廼ち之を正に歸す、然れども、覽るものすでに過てり。武帝神仙を好む、故に相如、大人賦を上り、以て帝を風せむと欲し、反つて飄々凌雲の志を生ぜしめぬ。是に繇つて之を言へば、賦の勸めて止まざるは明かなり、又頗る俳優淳于髡・優孟の徒

と相似て。法度の存するところ、賢人君子、詩賦の正とするところに非ず、と。乃ち賦を廢し、易に倣うて太玄を作り、論語に擬して法言を作りたるなり。

その一生の著述を總括すれば、略ぼ下の如く云ふを得べし。蓋し以爲へらく、經は易より大なるはなしと、故に太玄を作りぬ。傳は論語より大なるはなしと、故に法言を作りぬ。史篇は倉頡より善きはなしと、故に訓纂を作りぬ。箴は虞箴より善きはなしと、故に州箴を作りぬ。賦は離騷より深きはなしと、故に反して之を廣めぬ。辭は相如より麗なるはなしと、因つて四賦を作りぬ。作るところ、皆その本を斟酌し、相與に放依して馳騁し、心を內に守りて外に求めず、時人皆之を吻しぬ。唯だ劉歆・范逡、之を敬し、桓譚以て絕倫となせしといふ。雄の死するや、大司空王邑、桓譚に謂つて曰く、子、常に揚雄の書を稱す、豈に能く後世に傳へむや、譚曰く、必ず傳へむ、顧るに、君と譚と、見るに及ばざるなり、と。太玄・法言ともに存し、又揚侍郎集には賦七篇・騷一篇・解嘲・解難・九州箴・劇秦美新・上書一篇・書四篇・連珠四篇・誄一篇・文二篇・自序傳を收む。その他、言語の學に於ては方言あり、今又單行す。西京雜記に稱す、揚子雲好事、常に鉛を懷にし、槧を提げ、諸計吏に從つて、殊方絕域の語を訪ね、以爲へらく、輶軒の載すところを裨補すと。亦た洪意なり、と。

とにも角にも、揚雄は一個卓絕せる多面的大才なり。而して、嚴密に云へば、文學的方面よりも哲學的方面に於て、其重きを爲す。その哲學の見地は、之を太玄と法言とに徵すべく、前者は理論的方面に關して、宇宙現象の進動方式を論究し、後者は實際的方面に屬して、道德政治の法則を推斷す、而してその主とするところは、南北兩思潮の調和に在り。然れども、其書を作る、文字の奇奥を貴ぶが故に、汎く世に行はれず太玄の如き未だ一人の善く之を解するもののあらず、思想開展の上に影響を與へしこと、絕無といふも可なり。劉歆、かつて太玄を觀て曰く、空しく自ら苦む、今の學者は祿利あり、然れども、尙ほ易を明かにする能はず、また玄を如何、吾、恐らくは後人の用ひて醬瓿を覆はむことを、と。雄笑つて應へず。又た嘗て自ら曰く、後世必ず復た揚子雲ありて之を知らむ、と。その志操の確固なると、自信に富める抱負あるとに至りては、眞個學者の襟度を具ふるものにして、頗る推服すべきなり。若し夫れ、彼の文學的方面に至りては、一部の揚侍郎集あり、容易に、その大體を窺ひ知るを得べし。

雄の著作、之を一概して、前人を規摸す、故に摸擬の誚あり。太玄の易に擬し、法言の論語に擬せしは、姑らく之を措き、羽獵賦は司馬相如の上林を摸し、長楊の之を承るに似たるは、なほ上林の子虛に接するが如し、而かも、その辭は、相如の難蜀父老に倣ふ。甘泉の賦、又相如の上林大人を併せて擬せしに由つて成る。然れども、すでに相如の才の麗

を缺き、學識却つて之に駕し、字の奇險を以て、詞の贍麗を成す處、流動の致終に相若かず。祝堯かつて曰く、蓋し長卿諸人は、騷中に就いて侈麗の一體を分出し、以て辭賦となす。子雲に至りて、此體盛なり、情に因らず、理に止まらず、而して惟だ辭を事とす。宮室畋獵等の事に因り、以て興を起すといふと雖も、然かも矜夸を務めて詠歌に非ず、興の義、變ずること甚し。天地百神等の物を取り、以て比をなすといふと雖も、然かも、神怪に涉りて、博雅に非ず、比の義、變ずること甚し。古昔帝王の跡を陳べ、以て諷を含めたりといふと雖も、諛佞に近くして柔婉に非ず、風の義、變ずること甚し。朝廷の功德等、美を稱し、以て雅頌に傚へりと雖も、文飾多くして正大に非ず、雅頌の義、變ずること甚し。その風比興雅頌の義、亡びたるに非ず。三國六朝以降に至りて、辭益す侈麗なり、六義泯び盡して理失ふ。噫、こゝに於て世變を觀るべし、と。而して、解嘲解難は、東方朔の答賓難、非有先生論に擬す。すでに境遇位置を異にするが故に、情趣同じからず、文彩やゝ過ぐと雖も、精神なきを奈かむ。こゝに至りて、雄の文章學術を極斥するものは曰く、摸擬を以て身後千載の名を成さむとせしもの、模擬直にその素志に出でたるなり、と。或は之を班固の剽竊と並稱し、漢代文章の衰頽となせり。夫れ然り、豈に其れ然らむや。今その文章を見るに、實際模擬の痕跡を認むるに難からざるものありと雖も、その學の邃、その見の博、その才の高、その文字を識るの多き、善く他の長所を集めて大成し、蒼勁にして宏濶なる風趣あり。その文飾に富むや、却つて正大の義を失ふの嫌なきに非ざれども、その奇字を運旋して奥衍の體を爲せると、文中佳句の摘むべきもの多きとの兩事は、たしかに其文の特質として不可なく、薛敬軒が思索精至、學問該博、故に往々にして妙處あり、止だ零碎して之を取るべく、大段の妙處なしといへるは、未だ盡く肯綮に中らざれども、正に妥當の評語となすべく、蘇東坡が艱深の詞を以て淺易の說を文るといへるは、時に其病に中ると雖も、以て一般に推及するを得ず、遂に篤論に非ざるなり。

然れども、雄は文士たるを欲せざりしもの、之を攻むるも、固より相關せざるべく、彼は南北兩思潮の會流に棹して、たとひ、後世稱するなきも、特絕の位置及び功績を有するものなり。司馬光、かつて之を孟荀に比して、「孟子詩書を好み、荀子禮を好み、揚子易を好む」といひ、「孟子の文、直にして顯、荀子の文、富にして麗、揚子の文、簡にして奥」といひ、又曰く、揚子雲は眞に大儒なり、孔子歿後、聖人の道を知るものは雄に非ずして誰ぞ、と。蓋し光は多少嗜痂の癖に類するまでも、痛く雄を尊重し、その言ふところ、所好に阿ねるの弊なきに非ざれども、未だ全く誤れりといふべからず。韓愈が曩に之と荀卿とを並稱し、大醇にして小疵といひしは、語に分寸あり、中らずと雖も遠らざるものといふべ

し。

最後に文學上、雄の創意に係るものを擧ぐれば、連珠の一體あり。劉勰以爲へらく、その辭、小なりと雖も、明潤なり、と。後漢より以下、この體に倣ふもの、頗る多く、遂に宋玉の對問・枚乘の七發とともに、一種の文體となりぬ。

(一二) 兩漢間の文士

新莽の興亡、轉瞬の間に起り、光武再び漢室を盛にするに至るまで、天下騷亂、殊に甚しく、學者詞人、不遇にして、文辭を事とせしもの、少しとせず。これより始めて文士あり、因つて、史に文苑傳あり。而して、後漢文學の端を啓きしもの、桓譚・馮衍・班彪・杜篤あり。就中班氏の一門、材を出すこと、尤も多く、その首に居るものを閨秀詞人班倢伃となし、その時、殆んど劉向と並ぶ。

班氏の先は、楚の同姓、戰國の末、地を北に避く、その後、況といふものに至りて、左曹越騎となる。倢伃は其女なり。成帝初めて位に即き、選ばれて、後宮に入る。はじめ、少使となり、俄にして大に幸せられ、倢伃となりて、增成舍に居り、再び館に就く。男ありしが、數月にして之を失ふ。帝、後庭に遊び、かつて、倢妤と輦を同うして載せむと欲す。辭して曰く、古の圖畫を觀るに、賢聖の君、皆名臣側に在るあり、三代の末主、廼ち嬖女あり、今輦を同うせむと欲せば、之を近似することなからむや、と。帝その言を善しとして止む。太后之を聞いて、喜んで曰く、古しへ樊姬あり、今班倢伃あり、と。倢伃、詩及び窈窕德象女師の篇を誦し、進見上疏する毎に、古禮に依則す。鴻嘉の後より、帝稍や內寵に隆なり。倢伃、侍者李平を進む。平、幸を得、立つて倢伃となり、姓を衞と賜ふ、謂ゆる衞倢伃、是れなり。その後、趙飛燕姉弟、亦た微賤より興り、禮制を踰ゆること、寖や前よりも盛なり。班倢伃及び許皇后、皆寵を失ひ、復た進見すること稀なり。鴻嘉三年、趙飛燕・許皇后・班倢伃、媚道を挾み、後宮を咒詛し、詈、主上に及ぶを譖告す。許皇后、坐して廢せらる。班倢伃を考問するや、對へて曰く、妾聞く、死生命あり、富貴天に在り、正を修めて尙ほ未だ福を蒙らず、邪を爲して以て何を望まむと欲する。鬼神知るあらば、不臣の愬を受けず、もし其れ知るなくば、之れを愬ふるも、何の益かあらむ。故に爲さざるなり、と。帝、その對を善とし、之を憐憫して、黃金百斤を賜ふ。趙氏姉弟、驕妬なり。倢伃、久うして危うせられむことを恐れ、太后を長信宮に供養するを求む。帝、許す。倢伃退いて東宮に居り、賦を作つて傷悼す。成帝崩ずるに及び、園陵に充奉し、薨ずるや、因つて園中に葬る。

劉向、之を贊して曰く、君子謂ふ、班倢伃同輦を辭するの言は、蓋し宣后の志なり、李平を同列に進むるは、樊姬の德なり、詛祝の譖を釋くは、定姜の知なり、供養を東宮に求む

るは、寡李の行なり。その賦を作るに及び、哀んで傷らず、命を歸して怨みず、詩に云ふ、有斐君子、如切如磋、如琢如磨、瑟兮僩兮、赫兮喧兮、有斐君子、終不可諠兮、と。其れ班倢伃の謂なり、と。盧舜治曰く、その辨誣の數語を讀むに、溫厚和平、之を言ふもの罪なく、之を聽くもの憎まず、その語を戾太子に移さしめば、何ぞ江充巫蠱の禍あらむや、と。倢伃は、窈窕たる淑女、あくまで儒教主義に循從して、之に違ふことなく、その操行才藻の美、固より卓文君の比に非ず。倢伃、もと集あり、胡應麟、之を言へり。然れども、散佚すでに久しく、漢書すでに之あるを言はず。今存するものは、自悼・擣素の二賦と怨歌行の五古とに過きず。晁補之、自悼を評して曰く、其詞、甚だ古く、浸く楚人に近く、特に婦人女子の能く言ふところに非ず、と。朱子之を然りとし、且つ曰く、これ固より然り。その情、幽怨に出づと雖も、而かも、能く分を引き、以て自ら安んじ、古を引き、以て自ら慰む、和平中正、終に慘傷に過ぎず。又その德性の美、學問の力、人に過ぐるものあり、論者及ばざるなり、嗚呼賢なるかな、柏舟綠衣、經に錄せらる、その詞義の美、殆んど之に過ぎざらむや、と。之を司馬相如の長門賦に比し、その含蓄ありて、溫婉趣を欠かざるところ、むしろ復かに過ぐ。擣素又相若く、怨歌は、鍾嶸が「李都尉より、班倢伃に至る、百年間を將て、婦人ある、一人のみ」といひ、「辭旨清捷、怨深くして文綺」といへるもの、以て其價値を知るべく、秋扇の譬、古來思婦の套語となりしを見れば、その千古に流傳したるを思ふべきなり、班氏その後、文には班彪・班固及び班昭あり、武には班超・班勇あり。家門敎を立つる、蓋し法あるか。

桓譚、字は君山、沛國相の人、父は成帝の時、太樂令たり、因つて、その任を以て郎となり、音律を好み、善く琴を鼓し、博學多通、徧く五經を習ひ、皆大義を訓詁して、章句を爲さず、文章を善くし、尤も古學を好み、數ば劉歆・揚雄に從ひ、疑異を辨折す。性、倡樂を好み、簡易にして威儀を修めず、而かも、喜んで俗德を非毀し、是に由つて、多く排詆せらる。王莽居攝の時、ひとり默然として無言を守りしが、拜せられて、掌樂大夫となり、更始又召して大中大夫となす。光武即位、上書して事を言ひしも、旨を失うて用ひられず、後又上疏して、時政の所宜を諫めしも省せられず。この時、帝方に讖を信ず。譚上書して極言す、帝愈よ悅ばず。その後、詔あり、靈臺の處くところを會議す。帝、譚に謂つて曰く、吾、讖を以て之を決せむと欲す、如何、と。譚默然良や久うして曰く、臣、讖を讀まず、と。帝、その故を問ふや、その不經を痛斥す。帝、大に怒つて曰く、桓譚、聖を非とし、法を無みす、と。將に下して之を斬らむとす。譚、叩頭流血、良や久うして、乃ち解くるを得、出て、郡丞となる。意忽忽として樂まず、道にして病んで卒す。年七十餘。はじめ、譚、書を著し、當世の行事を云ふこと二十九篇、號して新論といひ、上書して獻ずるや、光武之を、善とす。琴道一篇、未だ成らず。章

帝、班固をして、續成せしむ。著すところ、賦・誄・書・奏、凡そ二十六篇ありしと雖も、新論の外、すべて傳らず。

譚、多少の見地あり、その極力揚雄を推稱せしが如き、光武に對して讖緯の妄を辨ぜしが如き、固より韙となすべし。兩漢交替の際、依違として身を持せしと雖も、劉歆の徒に比すれば、自ら徑庭あり。その書、善く一家の言を爲し、文亦た直達明晰、譚の後漢に於ける、猶ほ陸賈の前漢に於けると一般。然れども、單に文學を以てすれば、譚は終に馮衍に及ばず。

馮衍、字は敬通、京兆の人、幼にして奇才あり、九歲能く詩を誦し、二十に至り、群書に通ず。王莽の時、諸公多く之を薦舉せしも、辭して仕へず。時に天下兵起るや、莽、廉丹をして、山東を討伐せしめ、因つて、辟されて、掾となる。衍、乃ち丹に說くに、新必ず亡び、漢必ず興るを以てし、その去就を決せしむ。丹從はず、赤眉と戰つて敗死し、衍、因つて河東に亡命す。更始二年、鮑永、大將軍となり、地方を安集するや、之に說いて裨將となり、太原に屯し、上黨太守田邕等と甲を繕ひ、士を養ひ、並土を扞衞す。光武即位の後、更始すでに沒せしを審知し、兵を罷めて降りしも、その時にして至らざりしを以て用ひられず。後、曲陽令たるを得、劇賊を誅斬して、五千餘人を降しゝも、又讒毀に遇うて、賞せられず。建武六年、日食す、衍上書して人事を論ず。帝召し見むとす、又排間せられて、入るを得ず、尋いて、外戚陰氏に敬重せられ、諸王の聘請するところとなり、司隸從事に任ぜられしも、帝、西京外戚の賓客に懲りて、之を繩すや、罪を得て、獄に詣り、赦されて、故郡に歸るや、門を閉ぢて自ら保ち、敢て復た親故と通ぜず。明帝即位、又多く衍を短するに、文その實に過ぐるを以てし、遂に廢す。はじめ、北地の女任氏を娶りしも、悍忌なり、止むを得ずして、改め娶る、また妬悍。衍の一生、內外公私、ともに不遇を極むといふべし。然れども、大志挫せず、貧賤に戚戚たらず、居常慷慨、歎じて曰く、衍、少にして名賢に事へ、顯位を經歷し、金印を懷にして紫綬を垂れ、節を持して奉使し、苟くも得るを求めず、常に凌雲の志あり、三公の貴、千金の富、其願を得ざれば、懷に屑しとせず、貧にして哀まず、賤にして恨まず、年瘦頓すと雖も、猶ほ名賢の風を庶幾し、道德を幽冥の路に修め、以て身を終へ、名、後世の法とならむ、と。その後、貧に居て年老ひ、遂に家に卒す。

著すところ、賦・誄・銘・說・問交・德誥・愼情等、當時五十篇あり。景帝頗る其文を重んず。今傳ふるもの、凡そ十一篇。顯志賦・與婦弟任武達書・自論等、最も觀るべく、幾分駢儷の習なきに非ざるも、氣力旺盛、後年失意の後と雖も、磨勃の不平あり、詞藻極めて豐富にして、一種の神彩を見る。張溥、その集に題して曰く、孟堅の詳雅・平子の淵博、東漢に高步す。若し

豁達激昂文圖に鷹揚たるものは、必ず敬通を主とす」と。然れども、氣品識見を兼ねたるものに至りては、兩漢間、未だ一人の能く班彪に及ぶものあらず。

班倢伃を姑として班彪あり、字は叔皮、扶風安陵の人、家に賜書あり、內財に足る、揚雄以下、門に造らざるなし。彪性沈重、古を好む。年二十餘、更始敗れて三輔大に亂る、乃ち難を避けて、隗囂に天水に依る。囂、彪に問ひ、周末縱橫の事、又今起らむかといふや、對ふるに、劉氏必ず再興すべきを以てし、又王命論を作る。囂、悟らず。遂に地を河西に避けて、大將軍竇融の從事となり、之が爲に畫策し、漢に事へて河西を總べ、以て隗囂を拒がしむ。融、徵されて京師に至るや、光武之に問うて曰く、上章奏するところ、誰か與に參する。融對へて曰く、皆從事班彪の爲りしところ、と。召されて官に拜せられしも、皆久しからずして去る。その子固、評して曰く、仕、祿の爲にせず、如くところ合はず。學、人の爲にせず、博くして俗ならず。言、華を爲さず、述べて作らず、と。建武三十年卒す、年五十二。

後漢書の本傳に據れば、その著すところ、賦・論・書・記・奏事、合せて九篇ありといふ。北征賦は、その體、屈原の遠遊より出で、感愴の致を極め、後人倣ふもの多し。王命論、また觀るべし。彪、才高くして述作を好み、心を史籍の間に專にす。武帝の時、司馬遷、史記を著せしも、太初より以後は闕けて錄せず、後の好事者、揚雄・劉歆・陽城衡・褚少孫・史孝山の徒、頗る

或は時事を綴集せしも、多くは鄙俗にして、踵繼するに足らず。彪、乃ち繼ぎて前史の遺事を採り、傍ら異聞を貫き、後傳數十篇を作り、因つて前史を斟酌して、得失を議正す。その書、未だ完らず。その子固、次いで之を成す。漢書即ち是れなり。然れども、彪の才の高き、固の及ぶところに非ず。予は、その書の美處、概ね彪に出でたるを信ぜむとす。

すでに班彪を傳し、其子固に遷るの間、一言すべきは杜篤、その人物及び文致、ともに當代謂ゆる文士の標型たるに近ければなり。篤、字は季雅、京兆杜陵の人、少にして博學、小節を修めず、鄉人の禮するところとならず、事を以て收められて、京師に送らる。會ま大司馬吳漢薨じ、光武、諸儒に詔して之を誄す。篤、獄中に在りて、之を作り、最も高し、帝之を美とし、帛を賜うて刑を免る。篤、以へらく、關中は山河を表裏し、先帝の舊都たり、宜しく改めて、洛邑を營まざるべからず、と。乃ち論都賦を上奏す。その作、子虛・上林に沿へども、俊宏壯偉、頗る觀るべし。後、郡に事へ、目疾むを以て、京師を闕はざる二十年。その先世周及び延年、文政に名あり、外高祖辛武賢、勇武を以て稱せられ、皆高官に至る。篤、因つて常に嘆じて曰く、杜氏文明善政、而して、篤任じて吏とならず、辛氏義を秉り、武を經、而して、篤又事に怯なり。外內五世、篤に至りて衰ふ、と。その女、扶風の馬氏に適きしを以て、建武三年、馬防の西羌を擊つに從つて、從事中郎となり、射姑山に戰死す。著すところ、諸禮

十八篇・明世論十五篇ありしと雖も、皆傳はらず。同時に臭味略ぼ相似たるもの、王隆・夏恭・恭の子牙等あり。

(一三) 班固

班固、字は孟堅、彪の長子、九歳にして能く文を屬し、詩書を誦し、長ずるに及び、博く載籍を貫き、九流百家の言、窮究せざるなし。學ぶところ、常師なく、章句を爲さず、大義を擧ぐるのみ。性寛和にして衆を容れ、才能を以て人に高ぶらず、諸儒此を以て之を慕ふ。永平の初、東平王蒼に説いて、納れらるゝ。すでにして、父彪卒して鄉里に歸るや、彪續ぐところの前史、未だ詳ならざるを以て、乃ち潛精研思、その業を就さむと欲す。人あり、明帝に上書し、固私に國史を改作すといふ。詔あり、收めて京兆の獄に繫ぎ、盡くその家書を取る。固の弟超、馳せて闕に詣つて上書し、因つて召し見らるを得、固が著述せしところの意を言ひ、郡亦た其書を上る。帝甚だ之を奇とし、召して校書郎に詣らしめ、蘭臺内史となし、前唯陽令陳宗・長陵令尹敏・司隸從事孟異とともに、世祖本紀を成し、遷つて郎となり、秘書を校するを典る。固、また功臣平林新市公孫述の事を撰し、列傳載記二十八篇を作りて、之を奏す。帝、乃ち復た前に著すところの書を終成せしむ。建初中、略ぼ成るや、當世甚だ之を重んじ、學者諷誦せざるなし。郎となつて後、遂に親近せらる。章帝雅に文章を好み、固愈よ幸を得、數ば入つて禁中に讀書し、或は日を連ねて夜を繼ぐ。巡狩を行ふ毎に、輙ち賦頌を獻上し、朝廷大議あれば、公卿に難問し、前に辯論せしめ、賞賜恩寵、甚だ渥し。固、自ら二世の才術、郎に過ぎざるを以て、東方朔・揚雄、自ら論じて蘇張范蔡の時に遭はざりしを以てせしに感じて、賓戯を作り以て、自ら通ず。後、玄武司馬に遷る。帝、諸儒を白虎觀に會し、五經を講論して、白虎通德論を作り、固をして、其事を撰せしむ。固、又典引論を作り、漢德を述叙し、以爲へらく、相如の封禪は、靡にして典ならず、揚雄の美新は典にして實ならず、と。蓋し自ら其致を得たりとなすなり。後、母の喪を以て官を去る。永元の初、大將軍竇憲、出でゝ匈奴を征すや、固を以て、中護軍となし、與に議に參せしむ。すでにして還り、憲の敗るゝに及び、固、先づ坐して、官を免ず。固、學を諸子に敎へず、諸子多く法度に遵はず、吏人之に苦しむ。はじめ洛陽令仲兢、かつて行くやゝ固の奴、車騎を干す、吏推して之を呼ぶ、奴醉罵す。兢、大に怒れども、憲を畏れて敢て發せず、心に之を銜む。竇氏の客、皆な逮考せらるゝに及び、兢此に因つて捕繫し、固、遂に獄中に死す。詔して、兢を譴責し、主者吏を罪に抵して止む。

その著すところ、典引・賓戯・應譏・詩・賦・銘・誄・頌・疏・書・文・記・論・議・六言、當時凡そ四十一篇。今存するもの四十篇を踰ゆ。その全きを知るべし。漢書・白虎通、亦た盛に單行す、

漢書は、元を高祖に起し、孝平王莽の誅に至るまで、十有二世、二百三十年、その行事を綜べ、傍ら五經を貫き、上下洽通して春秋考紀表志傳を爲る、凡そ百篇。建初中、略ぼ成れりしが、八表及び天文志、未だ竟ゆるに及ばずして死す。和帝、固の妹昭に詔じて、東觀藏書閣に就き、踵いで、之を成さしむ。かくの如くして、一部の漢書は、班氏父子兄妹三人の手に據りて成り、彪固二人、執筆部分の區劃の如き、今考ふべからず。

史記漢書の優劣を言ふもの、古來紛々たり。然れども、予の見にして誤なくむば、漢書は、その本來の性質上、史記に比して甚だ劣れりといはざるべからず。何となれば、班固の主旨、多く古人の成文を潤色し、その體裁を整齊せしに過ぎざればなり。始元以前は、太史公之を先んじ、始元以後は、その父彪、之を成し、昭帝より平帝に至る、凡そ六世は、賈逵・劉歆に資し、復た陳宗・尹敏・孟異の徒に賴り、固の獨力を以て自ら爲りしもの、幾んど希れなり。故を以て、後人揚雄の摸擬に對し、之を剽竊の雄となすものさへあり。若しその特長をいへば、その體、史記を踏襲するにもせよ、善く材料を整理し、事實を据摭したるに在るべし。霍光列傳の如き、流石に史家として技倆を觀る。然れども、角を矯めて牛を殺すに似たるもの、亦た之なき能はず。遷の淮陰侯列傳、蒯通の事を附記し、韓信の本意、必ずしも反に在らざりしことを暗示し、千古の寃を雪ぐ、又一種の見解なり、而して固は之を分截して別に蒯通の爲に傳を立つ、殆んど支離の誚を免るゝ能はず。漢書の文、之を一概して、洗鍊琢磨、頗る至れりと雖も、光焰固より史記に及ばず。范曄、かつて之を稱して曰く、遷の文、直にして事は覈。固の文、贍にして事は詳。固の事を序する若き、激訐ならず、抑抗ならず、贍にして穢ならず、詳にして體あり、之を讀む者をして厭はざらしむ、と。然り、齊整平贍、たしかに其長を推す、唯だ讀む者をして厭はざらしむといふに至りては、過褒特に甚し。今公平に之を論ずるに、史記は人物皆生動すと雖も、漢書は唯だ傀儡の起倒を觀るのみ。加ふるに、遷の文辭は含蓄深く、趣味豐なるに反し、固の筆致は、露骨にして、趣味索然たり。程伊川、かつて論じて曰く、子長の著作、微情妙旨、之を文字蹊徑の外に寄す。孟堅の文、情旨盡く文辭蹊徑の中に露はる。子長の文を讀めば、必ず浮言に越ゆるもの、始めて其意を得、文字を超ゆるものは、乃ち其意を解く。班氏の文章、亦た博雅と稱せらる、但だ一覽の餘、情旨盡く、これ班馬の分なり、と。以て定評となすべし。

その集には、賦あり、詩あり、文あり、頗る多能なるを知る。兩都賦は、杜篤の論都に擬して作り、規模大にして局段高けれども、揚雄に比して、精刻やゝ遜る、況んや、相如に比するをや。その他は、論ずるに足らず、その詩數首、鍾嶸が孟堅才流にして掌故に老ゆ、その詠史を觀るに、感嘆の詩多し、といへるもの、盡せり。要するに、古朴の趣、僅に取るべきの

み、文に至りて、典引・賓戲・燕然山銘、最も人口に膾炙す。然れども、儷句愈よ多く、韓柳二氏、文を論じて、東漢以下を取らざるもの、固より理なきに非ず、況んや、摸擬の極、一歩を踏過し、時に剽竊に近きものあるに於てをや。要するに、固の人物識見氣度、ともに其父に及ばず、之に比すれば、その妹昭、むしろ上に在り、今便を以て下に附記す。

昭字は惠班、一名は姬、同郡の曹世叔に適く。博學高才。世叔早く卒し、節行法度あり。すでに漢書を踵ぎ成せし後、帝數ば召して宮に入れ、皇后諸貴人をして師事せしめ、號して大家といひ、貢獻異物ある毎に、輙ち詔して賦頌を作らしむ。鄧太后、朝に臨み、政事を與り聞くに及び、出入の勤を以て、特に其子成を關內侯に封し、官、齊の相に至る。時に漢書はじめて出て、未だ能く通ぜざるものの多し。同郡の馬融、闕下に伏し、昭に從つて、讀を受く。永初中、太后の兄大將軍鄧騭、母の憂を以て上書して身を乞ふ、太后許すを欲せず、以て昭に問ふ。昭即ち上疏し、太后從つて之を許す。昭、女誡七篇を作る。馬融之を善とし、妻女をして習はしむ。昭の婿の妹曹豐生、亦た才學あり、書を爲つて之を難じ、辭、觀るべきものあり。昭年七十餘にして卒す。太后素服して哀を擧げ、使者喪事を監護す。著すところ、漢書八表及び天文志・列女傳註十五卷・女誡の外、曹大家集あり。賦・頌・銘・誄・問注・哀辭・書論・上疏、遺篇凡そ十六篇あり、昭の人と爲り、優婉溫藉なる情操に滿つるよりも、むしろ鞏固なる意志と明鋭なる理解力とを有するものにして、この點よりいへば、四千年間に獨歩す、亦た偉ならずや。

(一四) 班固以後の文士

和帝の世、大將軍竇憲、椒房の親に因り、大に貴幸せらるゝや、一時の名士、その幕賓となりしもの、班固の外、傅毅・崔駰あり、竇府文章の盛、實に三人の力に賴る。

傅毅、字は武仲、扶風茂陵の人、少にして博學なり。永平中、平陵に於て、章句を習ひ、因つて迪志詩を作る。時明帝に賢を求むること篤からず、士多く隱處す、乃ち七激を作つて、これを諷す。建初中、章帝、文學の士を召し、毅を以て、蘭臺令史となし郎中に拜し班固・賈逵等と敎書を掌る。毅、明帝を追美し、顯宗頌十篇を作り、文雅大に顯はる。車騎將軍馬防、請うて軍司馬となし、待つに師友の禮を以てす。馬氏敗れて免ず。永元元年、竇憲請うて主記室となす。毅、早く卒す。著すところ、詩・賦・誄・頌・祝文・七激・連珠凡そ二十八篇、その作、古詩十九首中に存すといふ。魏の文帝、毅を以て、班固と伯仲の間に在りと爲す。而して、固は、當時之に慊らず、その筆を下して自ら休む能はざるを非る。その集、今佚す。

崔氏世、美才あり、典籍に沈淪し、遂に儒家文林となる。駰、字は亭伯、涿郡安平の人、生れて十三、詩易春秋に通じ、博學にして偉才あり、盡く古今の訓詁百家の言に通じ、善く文

を屬し、少にして大學に遊び、班固・傅毅と同時に名を齊うす。然れども、未だ仕へず。人、その玄靜を譏るや、揚雄の解嘲に擬して、達旨を作る。元和中、章帝、方嶽に巡狩し、四巡頌を上る、帝之を嗟嘆し、竇憲に言うて、之を引かしめ、遂に憲の上客となり、後、掾となる。憲、權を專にして驕恣、騶、數ば之を諫む。出てゝ匈奴を擊つや、道路愈よ不法多く、騶、重簿となり、前後奏記數十、長短を指切せしも、憲容るゝ能はず、稍や之を疏んじて、遠く外に出す。騶、意を得ざるを以て官に之かず。永元二年、家に卒す。著すところ、詩・賦・銘・頌・君・記・表・七依婚禮・結言・達旨・酒警、凡そ二十一篇といふ。今傳ふるところ、二三を少くのみ。その文思筆力、傅毅に及ばず、班固に比しては愈よ下れり。

その子瑗、字は子玉、能く父の業を傳へ、賈逵に學び、馬融・張衡と篤く、又文辭あり。その子寔、字は子眞、少にして沈靜、典籍を好み、政體に明かにして吏才餘あり、政論を作る。仲長統、之を稱す。他に述作凡そ十五篇あり。その從兄烈、又文才あり。その宗、琦、字は子瑋、また文章博通、數ば梁冀の不軌を諫め、又外戚箴・白鵠賦を作り、遂に忌むところとなりて殺さる。東漢の文章、班崔二氏、鬱然として、門戸ひとり大なり。

以上は、大抵班固と同時の人、やゝ後れては、張衡あり。字は平子、南陽西鄂の人、世、著姓たり。少にして、善く文を屬し、京師に入り、大學を觀、遂に五經に通じ、六經を貫く。才世に高しと雖も、驕尙の情なく、常に從容淡靜、俗人と交接せず。永元中、屢ば公府に辟されしも遂に就かず。二京賦を作る。又機巧に善く、尤も思を天文陰陽曆算に致し、常に玄經を耽好す。安帝徵して郎中に拜し、再遷して太史令となす。順帝のとき、侍中に遷りしが、宦官の爲に讒忌せられ、出てゝ河間の相となる。時に國王驕奢にして法度に遵はず。又豪右並兼の家多し。衡、車を下つて、治、威嚴あり、能く內に、屬縣の姦猾巧刼を行ふものを察し、皆密に名を知り、吏に下して收捕し、盡く擒に就く。諸の豪俠遊客、悉く惶懼し、逃れて境を出て、郡中大に治まる。時に天下漸く弊、鬱々として志を得ず、因つて四愁詩を爲る。事を視ること三年、上書して、骸骨を乞ひ、徵されて、尙書に拜せらる。永和四年卒す。年六十二。かつて、孔子易說彖象の殘缺せるものを繼がむと欲し、竟に成る能はず。著すところ、詩・賦・銘・七言・應問・七辯及び天文を說きしもの、凡そ三十二篇。今の張河間集、載するところは、詩三篇・賦十三篇・銘一篇・贊一篇・應問・七辯・誥一篇・疏五篇・表三篇・書六篇・議一篇・誄三篇・誄四篇あり。

後漢の文士、班張並稱す。然れども、强ゐて雕琢刻苦せし痕、終に掩ふべからず。二京の賦、之を班固の兩都に比して、結構變化、ともに及ばず、又含蓄に乏しく、たゞ精警奇矯、魏晉以上たるに負かざるところ、僅に取るべきのみ。思玄は、固の幽通に比して、やゝ漫衍、

南都は煩雜に流る。歸田の小品、淵明歸去來の源を開く。その特異なるは、儷句愈よ多からむとするに在り。四愁詩は、離騷を祖とし、其貌を易へ、優に才思あり。怨篇は、清曲誦すべく、同聲は、麗にして淫せず。要するに、衡の作、賦よりも、詩に於て工を見る。他なし、賦は頽靡の極に出で、詩は風氣將に開けむとし、武を用ふるの地、廣ければなり。この傾向は、漢末の蔡孔に至りて、愈よ明晰となり、魏晉に至りて、正に其極に達せり。衡、又史事に就いて、異見を出せしこと多く、屢ば上書せしも、竟に聽かれず、後の著述に至りて、多く典を詳にせず、時人之を追恨せりといふ。

衡と同時に李尤あり、字は伯仁、廣漢維の人、少より文章を以て顯はれ、和帝の時、蘭臺令史に拜せられ、稍や遷り、安帝の時、諫議太夫となり、詔を受けて、劉珍と漢紀を撰す。太子廢せらるゝや、之を諫爭す。順帝の時、樂安の相に遷り、八十三にして卒す。後漢書に、その著作二十八篇とあれども、今は序一篇、賦五篇、銘十五首の外に、七歎あるのみ。張溥曰く、微・賈もと之を上林長揚に比すれば、泰山と丘垤となり、とだゝ其銘、小致掬すべきものあるのみ。

その他、後漢書文苑傳に見ゆるもの、邊韶あり、蘇順あり、劉珍あり。珍、建武以來の名臣傳及び釋名を作る。又葛龔あり。次いで王逸あり、楚辭の註を著し、九思を作つて、之に足ずその子延壽、靈光殿賦を作る。皇甫謐、之を激稱すれども、實は觀るに足らず。

はじめ光武節義を尙び、東漢、清名の士に出すこと少からず、漢末に至りて、又其人あり文學に於ては、通弊益す甚しきも、なほ英靈の氣に富み、魏晉以下と異なるもの、豈に其故なしとせむや。而して、漢末の文士、蔡邕・孔融の二人、殊に其最を推す。

邕、字は伯喈、陳留圉の人、父祖、皆清白の行あり。性篤孝、母の病に侍し、寒暑節變に非ざれば、未だ嘗て襟帶を解かず、寢寐せざるもの、七旬に及ぶ。又叔父從弟と同居し、三世財を分たず、鄉黨その義を高しとす。少にして博學、太傅胡廣に師事し、辭章數術天文を好み、妙に音律を操る。閒居古を翫び當世と交らず、釋誨を作る。建寧三年、司徒橋玄の府に辟されて、甚だ敬待を受けしが、出でゝ河平の長に補せられ、又召されて郎中に拜せられ、書を東觀に校し、又盧植・韓說等と後漢記を補撰し、議郎に遷る。邕、以爲へらく、經籍聖を去ること久遠、文字謬多く、俗儒穿鑿して、後學を疑誤す、と。嘉平四年、乃ち諸儒と奏して、六經の文字を正定せむことを求む。靈帝之を許す。邕、乃ち自ら碑に書し、工をして鐫刻せしめ、大學門外に立つ。こゝに於て、後儒晩學、咸な正を取る碑はじめて立つに及び、その觀視し、及び摹寫するもの、車乘日に千餘兩、街衢に塡塞せしといふ。次いで、災異を論じ、時事を言ひ、不法の臣を劾し、怨者の爲に陷られ、家屬は髡鉢して朔方に徙され、五

原安陽郡に居る。尋いて、赦に會ひ、將に還らむとするや、五原の太守、之を餞す。邕、之を輕んぜしを以て朝廷を謗訕すと密告せられ、仍つて江海に亡命して、吳會に遠跡す。董卓の權を恣にするや、邕の名高きを聞き、之を辟せしが、疾と稱して就かず。卓大に怒り、强いて之を致し、甚だ敬重す。はじめ、第に舉げられ、侍御史に補し、又侍書御史に轉じ、尙書に遷り、三月の間、三臺を周歷し、後に巴郡太守に遷り、その優遇、殆んど比なし。卓の誅せらるゝや、王允之を廷尉に附す。太尉馬日磾曰く伯喈は曠世の逸才、多く漢事を識る、當に後史を續成し、一代の大典と爲さしむべし。且つ忠孝素より著はる、而して、坐するところ、名なくして之を誅す、乃ち人望を失するなからむや、と。允聽かずして之を囚へ、遂に獄中に死す。年六十一。縉紳諸儒、之を聞いて流涕せざるなし。北海の鄭玄、また嘆じて曰く、漢世の事、誰か之を正さむ、と。その筆に成れる漢史の一部、靈紀及び十志、列傳四十二篇、李傕の亂に因り、湮滅して存せず、別に著すところ、詩・賦・碑・誄・銘・讚・連珠・篇・弔・論・議・獨斷・勸學・釋誨・敘樂・大訓・篆勢・祀文章・表・書記凡そ百四篇、今傳ふるところの集、詩四篇・賦十八篇・疏四篇・表十篇・書七篇・論五篇・議六篇・對問二篇・設論二篇・連珠一篇・頌九篇・贊三篇・箴一篇・銘十篇・碑三十五篇・靈表二篇・誄・神誥・哀讚各一篇・祝辭五篇・弔一篇を收む。その他、篆勢・隸勢等三篇・獨斷、皆單行す。

邕の長所は、銘と墓碑とに在り。劉勰曰く、銘思ひとり古今に冠たり、と。又曰く、後漢より以來、碑碣雲起、才鋒斷ずるところ、邕より高きはなし。而して、その事を敘するや、該にして要、その采を綴るや、雅にして澤、清詞轉じて窮まらず、巧義出でゝ卓立す、その才たるを察するに、自然にして至る、と。別に楊賜の碑文を評しては「骨鯁訓典」といひ、陳郭二碑文を評しては「詞に擇言なし」といふ。後人皆法を此に取る。邕、又詩を作る、飲馬長城窟、尤も名あり。その女琰、又文學あり。後章別に論ずるところあるべし。

邕と前後して、藁葛の美を稱するもの、趙壹あり。字は元叔、窮鳥・刺世・疾邪の諸賦、最も名あり。偃蹇俗と反し、不遇にして終る。次は酈炎、字は文勝、靈帝の時、州郡の辭命、皆就かず。後、妻家の爲めに訟へられ、嘉平十六年、獄中に死す、年二十八。鍾嶸、その詩を以て班固と並論す。同時に劉梁あり、破群論及び辨和同論を著す、後者今、なほ存す、識見稱すべし。又高彪あり、人の督軍御史となり幽州を督するものを送るの箴あり、蔡邕、これを美とす。他に張超あり、文才に富み、草書を善くす。然れども孔融、ひとり漢末の文學を代表すべし。

融、字は文舉、孔子二十世の孫、裔の弟、年十歲、父に從つて洛に至る。時に李膺盛名あり、司隸校尉となる、門に詣るもの、皆俊才清稱、及び中表親戚は皆通ず。融、門に至り閽者に

謂つて曰く、我は是れ李府君の親、とすでに通じて前に坐す。膺問うて曰く、高清祖父、僕と舊恩あるか。對へて曰く、むかし先君仲尼、君の先人伯陽と道を論じて相師友たり。融と君とは累世の通家、と。膺及び賓客、これを奇とせざるなし。大中大夫陳韙、後れて至る。曰く、少時の了了は、大にして未だ必ずしも佳ならずと融曰く、おもふに、君の少時、必ず當に了了たりしなるべし、と。韙大に踧踖す。後、北海の相となり、學校を立て、儒術を表す。獻帝召して大中大夫に拜す。融、高談清敎、玩して誦すべし。名、當時に重んぜらる。漢室の亂に値ひ、志、靖難に在り、然れども、才疏意高、遂に成功なし。曹操その威望を忌み、遂に之を害す。融、常に曰く座上客常に滿ち、樽中酒空しからず、吾憂なしと。人と爲り、志高くして氣嚴、性正くして情直、吏に之を稱して「懍懍焉、皜皜焉、それ琨玉秋霜と質を比するも可なり」といふ。その數ば書を曹操に與へて、之を嘲罵し、翻弄したるが如き、痛快にして勁烈、その文、亦た自ら氣骨あり、用典疊句の弊を脫せざるも、毫も之が爲に役せられず。又詩を善くす、雜詩最も觀るべし。その述作、もと二十五篇といふ、今存するものは詩五首・六言三首・碑一篇・論四篇・議二篇・書十六篇・對一篇・上書五篇・奏疏二篇あり。

融と同時に、禰衡といふものあり。字は正平、平原般の人、少にして、才、辯あり、氣尙剛傲、好んで時に矯し、物を慢し、眼世人を空うす。唯だ孔融・楊修と好く、融亦た深く其才を愛す。時に衡は甫めて弱冠、融は年四十、遂に與に交友たり。上疏して之を薦む。曹操、その狂簡に堪へず、然れども、その名高きを以て殺す能はず、却つて劉表に致す。表亦たその侮慢を忍ぶ能はず、送つて黃祖に與ふ。祖、その不遜を恚つて、遂に之を殺す。年二十六。かつて鸚鵡賦を作る、豪懷放情、英偉の氣あり。

次は邊讓、陳留俊儀の人、少にして辨博、能く文を屬す。かつて章華賦を作る。大將軍何進、之を辟す。蔡邕深く之を敬し、その逸才を揚げて、進に薦め、擢進せられて、太守に至る。初平中、王室亂るゝや、官を去つて家に歸り、才氣を恃みて曹操に屈せず輕侮の言多し。建安中、その鄉人、之を操に構ふるものあり。操、郡に告げて之を殺さしむ。その文、遺失多く、僅に一二篇を存するのみ。

漢末氣節の士、相踵いで、慘禍を免れず、加ふるに、儒術頹廢、これより士人道義を重んぜず、その相率ゐて韜晦以て身を全うせむとするや、自然の勢、老莊の玄風を慕ひ、遂に流れて淸談となり、文學上にも、少からざる影響を與ふるに至れりき。

(一五) 東漢の諸子者流

東漢の諸子者流、桓譚の後、王充・王符・仲長統・荀悅等あり、皆倜儻奇偉の士、その學、その文、やゝ觀るに足る。

王充、字は仲任、會稽上虞の人、少にして孤鄉里孝を稱す。後、京都に至りて業を大學に受け、班彪に師事し、博觀を好みて、章句を守らず。家貧にして書なく、常に洛陽の市肆に遊び、賣るところの書を閱し、一見すれば輒ち能く誦憶し、遂に博く衆流百家の言に通ず。後、鄉里に還り、屏居して教授し、郡に仕へて功曹となり、數ば諫爭して合はざるを以て去る。後に刺史董勤、辟して從事となす。轉治中、自ら免じて家に還る。友人同郡の謝夷吾、上書して薦め、章帝特に公車に詔して徵す、病んで行かず。永元中、家に卒す。その著、論衡八十五篇、二十餘萬言、自ら言ふ、僞書俗文の實、誠ならざる、多きを傷んで作る、と。論衡は即ち論の平、以て是非善惡を判ぜむと欲するなり。然れども、黃震の云へる如く、惜むらくは、その初心、一身の怨憤に本づき、持論動もすれば詭激に亘り、理の平正を失ひ、書名の意と背馳するものあり、孔孟を譏つて老子を尊び、天地生育の恩なく、之を人身の蟣蝨を生ずるに比し、以て百神の祀を廢せむといふ如き、即ち是れなり。且つ自記篇に於て、頗る自ら標榜し、或は其性の恬淡寡欲、富貴を貪らざるを稱し、或は其書の時俗に違詭するを辨ずる如き、人をして、厭忌の念を生ぜしめむを恐る。語增・儒增・問孔・刺孟の諸篇は、論旨正を失ふも、最も驚人の語なり。傳へて云ふ、充の論衡を作るや、北方の人、未だ之を得しものあらず、蔡邕、江東に到り、はじめて、其書を得、其文の諸子に超ゆるを嘆賞す。邕、中國に還るや、諸儒、その談論、更に遠きものあるを覺え、必ず異書を得たるならむとなし、帳中を搜るに及びて、果して之を得、一時抄寫して、頗る流轉を極めたり、と。故に胡應麟曰く、蔡邕は秘して人に視さず、葛洪は贊して口を容れず、劉子玄は班馬を槌提して餘力を遺さゞるに、獨り是書を尊信せるは何ぞや。秦漢以還、聖道陸沈し、淫詞日に熾に、紀するに勝ゆべからず。充、茅塞瀾倒の辰に生れ、獨り岌然として自ら信じ、臂を其間に攘ひ、虛を剗り、增を黜け、僞を訂し、詐を斷り、詖淫の旨を遏截して行はしめず、後世の人をして藉りて口實となすことを得ざらしむ特立の士に非ずと謂ふべからず。故に伯喈は、その新奇を尙び、稚川は、その宏洽を大なりとし、子玄は、その辨才を高しとす、ひとり、その偏愎放言、聖賢を呵斥するに至りては、闢邪の功、その橫議の罪を贖ふに足らざるなり、と。之を要するに、正邪相混ずと雖も漢代に在りては、たしかに多少の特色を推すべきを疑はず。その文、深沈痛切ならざるも、通達平易、亦た觀るに足る。他の著養性書十六篇、今佚す。

王符、字は節信安定臨涇の人、少にして學を好み、志操あり。馬融・竇章・張衡・崔瑗等と友とし善し。安定の俗、庶孽を鄙み、而かも、符、外家なく、鄉人の賤むところとなる。和安の後より、世、游宦を務め、當塗者、更る相薦引す。而して、符、ひとり耿介、俗に同うせず之を以て

遂に昇進を得ず、志意蘊憤、隱居して書を著し、以て當時の得失を譏り、その名を顯彰するを欲せず、題して潛夫論といふ。亦た自嫌の意なり。その書三十篇。范曄云ふ、時短を指訐し、物情を討摘し、以て當時の風政を觀見するに足る、と。紀曉嵐曰く、政の期體を洞悉するは昌言に似たり、而して明切之に過ぐ。是非を辨別するは論衡に似たり、而して醇正之に過ぐ、と。その學、すでに根柢あり。情激し筆舞ふ處、往々にして、奇趣あり、充に勝ること遠し。仲長統の昌言、散佚すでに久しく、後漢書の本傳中に、數篇を見るのみ。こゝに詳論せず。

荀子の後十一世、淑といふもの、安帝の時に名あり。その子八人、世に八龍と稱す。長子儉の子を悅といふ、字は中豫、夙成慧敏、曹操に辟されて、黃門侍郎となり、獻帝、文學を好むを以て、禁中に侍講し、秘書監侍中に還る。すでにして、政の曹氏に移るを見、志、獻替に在れども、謀用ふるところなく、申鑒五篇を作りて、之を奏す。帝覽て之を善しとす。又漢紀卅篇、崇德正論及び諸論數十篇あり、今惟だ此書及び漢紀の殘篇を存す。建安十四年、六十二にして卒す。王鑒曰く、申鑒の作れる所以は、蓋し經世に志あるなり。顧ふに、當時の政體、機務を總攬し、權をして移らざらしむより大なるものあらむや。然るに曾て一言の之に及ぶなきは何ぞや。その政體を論ずる、賈誼の經制なくして醇に近く、劉向の憤激なくして諷に長ず。その雜言の篇は、頗る揚雄の法言に似たり。雄は意を曲げて新を美す、悅は一言の曹氏に及ぶことあらず、雄に視ぶれば、優れりと爲す、と。その書、隋唐志、皆五卷といふ、卷ごとに一篇、その學、儒道に本づき、言ふところ、皆醇正にして、道に詭ぶもの、最も尠しと爲す。後世、之を小荀子と稱し、荀卿に對せしむ。

（一六）漢詩の三大特徵

先秦時代、歌謠の粹は、一部詩經の中に在り。之を研究するや易きのみ。漢代の詩に至りては、特に之を拾蒐完成したるものあらざれば、かくの如く然るを得ず。漢書藝文志二十八家、三百十四篇と稱せり、固より辭賦の流行に壓倒せられて、かくの如く尠少なりとはいへ、一は五言詩體新創の後、比較的短少なる時期を限りたるが故にして、若し兩漢を合せなば、頗る夥多なるものありしならむ。然れども、惜むべきは、散滅佚亡、すでに久しく、荀綽の選に係るもの、亦た傳らず。之を一概して、百に二三を留め、今に存するもの、僅に百首內外のみ、誠に嘆惋に餘ありといふべし。

今夫れ、漢代詩歌の大略を領知せむと欲せば、果して何の書にか依據すべき、唯だ昭明太子の文選と徐陵の玉臺新詠とあるのみ。二書、ともに梁代の編撰に出て、古を去ること遠からざる寶典なれば、たとひ、取捨去就の點に關して、後人の誚譏を免れざるも

のあるにもせよ、之を含いて他に適從すべきものあるを見ざるなり。この餘、鍾嶸の詩品・劉勰の文心雕龍の如き、文學的製作の評隲を以て主とする者なれども、その緒論を取つて、前の二書に選出したるものと參照併觀し、精細なる考察を下せば、略ぼ流派を分ち、淵源を尋ねるを得て、瞭然掌を指すに庶幾きものあらむ。而して、今、據らむとする四種の書は、兼ねて魏晉以後の詩の研究にも、必須缺くべからざる者なること、讀者宜しく留意すべきなり。

上代三百篇の詩は、意を作れり。漢代の詩、亦た然り、而して、未だ詞を作りしものあらず。然れども、漢代の五言古詩は、新體詩として、將た平民文學として、當時の貴族文學たりし賦と、未だ對峙するに至らず、又名家の大手腕を役し、專心之に從事するものあらず。後世の謂ゆる詩人なるもの、絕えて無くして僅に之あるのみ。無名氏、頗る多く、その名あるものも、作るところ、常に二三首に止まり、最も多きも十首を出でず。或は文に長じ、或は賦を善くし、緒餘偶ま之に及びしのみ、故に少數なる詩を取りて、其人の思想趨向を論ずること、極めて難く、又その必要を認めず。されば三百篇を周詩といひしと同じく、單に之を漢詩といひ、漢人の作として之を論じ、全代を通じたる普遍的內部思想を發露開展すること、最も簡便にして、且つ至當なる方法といふべきなり。

三百篇は、上古北方の歌謠にして、實に支那律語の根源なりと雖も、後人が製作上の規度たるに對しては、むしろ簡古に失せり。故に漢代の詩は、次いで來るべき悠久の時代に、價値ある典型を與へ、かの禹域九州の曠土が、一大帝國として混同せし政治上の大勢は、やがて自ら延いて、南北人文の融和合一となり、文學上に少からぬ影響を與へしことを證するものなり。その特徵として、標榜すべきは、略ぼ次の如し。

(一)南北兩方詩體の中を取り、普遍的性質を有する五言及ひ七言を生ぜしこと。

(二)詩歌と音樂との間に存する緊密なる關係は、漸く弛解し、各自特殊の發達を爲さむとし、先づ古詩と樂府との別を生ぜしこと。

(三)社會的事態の複雜となるに從ひ、詩想の趨向、大に前代と同じからず、檢束制規は自ら寬となり、詩境漸く閑肆となりしこと。

(一七) 五七言の興起

漢詩の最も普通なる定格を五言と爲す。蓋し詩經の三百篇に於て、五言の如きもの、間ま之なきに非ざれども、實は一二句散見するのみにして、周詩の正體と稱すべきは、全く四言に在り。故に漢初に於て、猶ほその聲音を模するものありしと雖も、五言の新體、一たび興るに及びては、四言の體、漸く少きに至れり。

五言の詩、李陵蘇武河梁の贈別に始まるといふこと、一般の通說なれども、實は未必の言なり。文選に載する古詩十九首は、風餘詩母の稱さへあり、その體裁、はるかに蘇李の上に出づ。玉臺新詠には其中の八首(行行重行行、青青河畔草、西北有高樓、涉江采芙蓉、庭中有奇樹、迢迢牽牛星、東城高且長、明月何皎皎)と他に蘭若生春陽の一首とを以て、枚乘の作となせり。枚乘の死、蘇李の別に先つこと、殆んど半世紀、且つ蘇李の什は後人の擬作たるの證左、略ぼ動かすべからざるものあり、之を以て、五言の權輿となすは、斷じて非なり。然れども、亦た必ずしも枚乘の創制とも斷言し難ければ、唯だ武帝の頃、自然の風氣によりて掀まりしものと言はゞ足らむのみ。他に異說あれども取るに足らず。

翻つて、五言新體の起りし所以を考へむに、思想は、古今同じからず、漸次に複雜ならむとする傾向あり、語言時に因つて變じ、人心又奇を逐うて移る、且つ之を數理上より觀るも、字數少き句は、排列の變に乏しく、重複雷同を避け得ず。四言は質に過ぎて、調未だ舒びず、故に先づ一字を增し之を流暢にするに便せしもの、即ち五言なり。されば時勢の進捗てふ一語、庶幾くは概括的に說明し得たりとなさむか。然れども、こゝに五言詩體と南北兩方の古體との間に存する關係を探究すること又極めて必要なり。從來北詩は四言を以て定格とすれども何日不鼓瑟、誰謂雀無角の如き、五言亦た頻々として指を屈すべく、逸詩及び諺語の中には、整然たる五言を爲すもの、亦た必ずしも求め難きに非ず。而して、南賦の句格は、名詞多くして動詞少く、詞調頗る緊密、その五字以上の句にありては、兮の一字を除くとき、五言若しくは七言となるべきもの、頗る多しと爲す。例せば、九歌東君の前半「暾將出兮東方、照吾檻兮扶桑、撫余馬兮安驅、夜皎皎兮既明、駕龍輔兮乘雷、載雲旗兮委蛇、長太息兮將上、心低徊兮顧懷、羌聲色兮娛人、觀者憺兮忘歸」の如き、兮の字を除くとき、たとひ盡く上二下三の句格に非ざるも、兎に角、五言の句となり得べく、その他、類例決して少しとせず。五言の萌芽、南北古代の歌謠に見ゆるもの、かくの如し。換言すれば、五言は、彼に在りて一字を除き、此に在りて一字を加へ、實に南北兩方詩體の中を得るものにして、周末に於て、すでに發生せむとする兆候あり、故に漢代辭賦の貴族文學となるや、之と對峙し、やがて、その確立を見るに至りしならむのみ。且つ夫れ、從來の詩は、句格の參差たるを嫌はざりしが、こゝに至りて、徹頭徹尾五言を以て之を行り、決して、他の句格を混ぜず、均整を主とし、斷篇零章たりし詩を進めて、純然たる體裁を備ふるに至らしめば、最も注意すべきなり。

更に支那律語の體式を見るに、先づ三言より九言に至る。而して、其源を尋ねて、悉く詩經の中に在りとなすは、實に摯虞の文章流別に始まる。或は之を更に悠遠なる時代

に歸して、類似の說をなすもの、亦た少しとせず。然れども、偶ま一句二句の相雜はる者を拾ひ來り、直に呼んで其源となし、遂に歷史的價値の評量を爲すを忘却せしもの、未だ大早計の誚を免れず、且つや、發生確立の次序階段は全く說明するに由なく、甚だ謂なき事に屬すといはざるべからず。

かつて、試に之を論ず、一般の通則として、詩歌は時代の遷降に從ひ、或る部分は進步し、或る部分は退步す。太古の歌謠は小兒の言の如く、後世の詩は、成人の語の如しと、に於てか、具體的想像と原人的情操とを以てせる簡直淨鍊の趣は、漸次に消亡し、分析的觀察と技工的措辭とを得て成れる細緻巧麗の局面は、漸次に發達するなり。但し詩歌の純なるもの、即ち抒情詩の本領は、その語音の足らむよりは、むしろ言外の餘韻に存すること多きが故に、簡質なるもの、却つて含蓄に富み、言字滿つるに及びて、諷詠深遠の旨、漸く微なるに至るは、自然の數なり。李太白は曰く、興寄深微なるは、五言遂に四言に及ばず、と。然れども、之を七言に比し、繁簡の衷を折し、文質の要に居るもの、五言より善きはなく、漢代一たび之を創制せしより、魏晉以後の文人藝士、畢生の心力は、咸なこの一格に萃まり、降つて、唐宋を經、今日に至るも、未だ曾て廢弛せしことあらず。されば、漢人が五言を定めて正格となせしは、斯道の爲に、萬古不磨の法則を制定せしといふも、決して不可なきなり。

五言の新體詩は、すでに捌造されたれども、奇を好み、新を喜ぶが人情の常なれば、唯だ此のみにては、滿足するを得ず、武帝の元封三年には柏梁臺の聯句あり。これ七言の權輿にして、文學的價値に乏しと雖も、歷史上に於て、極めて重要なるものなり。

七言は、堯(或は少昊といふ)の時、皇娥・白帝の二歌ありと傳ふれども、王嘉の僞撰に係りて、信すべからず。王漁洋曰く、七言は擊壤歌に殆まり、雅頌の維昔之富不如時、予其懲而毖後患、學有緝熙于光明、臨河歌・南山歌以下に至りては、その辭、一に匪らざるも、皆七言の權輿なり、と。その他、垓下・大風・兩歌の如きは、七言類似の作なりと雖も、その風神を按ずれば、全く楚風の變體にして、形式上よりいへば離騷の片言隻辭に外ならず。七言の開始を以て、この柏梁聯句に在りと爲すこと、萬口異辭なき通說なり。而して、三秦記に曰く、柏梁臺の詩、是れ元封三年の作。然れども、梁の孝王は孝景の世に薨ず。又光祿勳大鴻臚・大司農・執金吾・京兆尹・左馮翊・右扶風、皆武帝太初元年、更めて名づくるところ、預め元封の時に書すべからず。その後人の擬作たるや、疑なきなり。然らざれば、大君の前、郭舍人、敢て狂蕩にして禮なく而して、東方朔、滑稽の語を以て戲となさむや、と。言ふところ、頗る條理あり、予は唯だ古書錯誤、乃ち然るなからむやといふの外、未だ之を破す

べき辭を知らず、故に概括的に言へば、五言創定の後、相繼いで、自ら七言の出づるものありとなすべきのみ。而して一方に於ては、居然として、その淵源を楚風の中に有するの一事、決して忘却すべからず。

漢代律語の精髄は、五言にあり、武を用ふるの地、廣くして盡きず、七言は、氣運未だ熟せざるを以て、唐に至るまで、十分の發達を爲さゞりき。

(一八) 詩歌音律關係の變遷

詩經に收錄するところの三百篇は皆音樂に施すべく、吳の季札、魯に遊び、諸國の風を聞きたる如き以て見るべきなり。而して、之を口誦せしは、春秋の時に掬まり、呼んで詩を賦すといへり、諸侯の會同宴見の際、古詩の兩三句を朗誦し、斷章取義、現在の場合に適合せしめ、自己の意を婉曲に諭するが如き、その例、左傳に多し。こゝに於てか、詩歌は漸く音樂と隔離し、將に自由なる發達を爲さむとし、歌誦せざる律語の一體も起り來りぬ。南方の辭賦は、その一、この趨勢に乘じて發生したるものにして、屈宋の作、實は概ね覽るを主とす。胡應麟が「詩亡びて樂廢し、屈宋代興、九歌等の篇、以て樂を侑め、九章等の作、以て情を舒べ、途轍漸く兆す」といへるは、まことに肯綮に中りし言を推すべく樂章はやがて普通詩歌の外に獨立する者となれるなり。

王風一たび蔓草に委して、春秋戰國の間、詩樂の制作、全く絕え、秦の古制を破壞するに及び、樂亡び、譜失し、呂律その調を得ず、僅に壽人の樂と五行の舞とあり、大率、周制に準じて之を爲せり。漢の始めて興るや、魯人制氏、世、大樂官に在り、たゞ能くその鏗鎗鼓舞を記せしといふ。之に次いで、高祖の時、叔孫通、秦の樂人に因りて、宗廟の樂を制定すあり。童兒をして之を歌はしめ、名づけて三侯の章といふ。是れ漢代に於ける樂章製作の濫觴なり。時に後宮に唐山夫人といふものあり、帝の命を受け、房中歌十七章を作る。當時未だ律に譜せず、惠帝二年、夏侯寬を以て樂府令となし、その音律を調へ、その簫管を備へしめ、改めて安世樂といふ。こゝに於てか、樂府の名は、始めて官名に見ゆ。而して西京雜記に云ふ、戚夫人、出塞・入塞・望歸の曲を歌ふと。但しその辭は知るべからざるを以て、こゝに論ぜず。文景の間は、舊に肄して、增改するところなし。

武帝に及びては、數ば云へる如く、內治外攻、殆んど成功し、世は物質的饒富を極め、文運從つて隆盛ならむとし、謳歌の聲、耳に滿ち、又時に郊祀の禮を起さむとし、こゝに新に樂章を定むるの必要を生じたり。乃ち復た樂府を立て、當時の音樂家たりし李延年を以て協律都尉となし、趙代の音を總べ、齊楚の氣を撮り、ひろく天下の詩を采つて夜

誦し、同時に著名の文士司馬相如等數十人を擧げて、新に歌詩を作爲し、略ぼ律呂を論じ、以て八音の調に合はしむ。この時よりして、樂府の名は、樂章てふ意義となれり。而して、當時この樂府てふ官省にて取扱ひし事項に、二樣の異りたるものあること、最も留意すべきなり。一は詩を采つて律に入れ、一は聲に依つて詞を製す。前者は李延年の專任せしところなるべく、略ぼ周代の采詩と相似て、五言古詩は、すでに平民文學として、將た新體詩として發生したりと思はるゝ時代のことなればなるべく、後者は、專ら相如等の擔當にして、古來傳承の曲譜に適合する詞章を新作せむと試みしものなり。郊祀歌十九章は、實に其手に出でたりと稱られ、その中、青陽・朱明・西皓・玄明の四章、題下に鄒子樂と署するは、作者の名なるべく、惟泰一・天地は、匡衡の作なること、明かにして、他の十三章は、蓋し相如一人の手に出でしならむと思はる。歌すでに成り、正月上辛を以て、事を甘泉圜丘に用ひ、童男童女七十人をして俱に歌はしめ、昏に祠つて明に至る。他の樂章も、亦た漸を以て增廣す。漢代樂府の發達完成、略ぼ此の如し。

飜つて今、樂府の辭章を觀るに、風起の詩の如きは、純然たる楚辭の斷句、たゞ韵脚多く散漫ならず、句々の字數、參差ならず、且つ全體に於て、頗る簡約、之を屈宋一流辭賦中の亂、或は重、或は反と稱する結尾の約言に比すれば、甚しき逕庭あるを見ず。安世郊祀は、たとひ詩の雅頌と趣を同うすと雖も、漢書禮樂志に「凡そ樂はその生ずるところを樂む、高祖楚聲を樂む、故に房中樂、楚聲を樂む」といひ、「桂華雜曲、麗にして經ならず、赤雁群篇、靡にして典に非ず」といふを見れば、ともに南方楚辭の音を以て、北方雅頌の禮を學びしものと謂はざるべからず。更に一言すれば、これも亦た南賦北詩の融合より出でし結果のみ。

こゝに樂章を制定する場合に於て、著しき困難の存することあり。實に音調の低昂は始めて節奏を生ずるもの、而して修辭上の藻葩と音樂上の節奏とは、往々にして枝梧することあり、之を調和すること、固より容易ならず、更に之を形式上より見るとき、聲に倚つて詞を製するや、自ら檢束なき能はず、而かも繁音促節、神理の完きを主とすれば、詩體の整正、必ずしも妙とせず、時に句法の參差錯落なるを要することあり。樂府中、一種自在なる長短雜言の體式に依りしものあるは、即ち此故なりとす。而して詩を采つて律に入れしものは、多少の改刪を經しことあるも、大抵原形の儘、五言古詩は常に五言古詩として存在せり。こゝに於てか、知るべし、古詩といひ、樂府といふは、形式上の分科に非ず、その發生と用途とを異にするより起りて、特に命名し、古來襲用せしものに過ぎざるを。

之を汎言するに古詩と樂府との別は、單に辭章上に於てすべきに非ず、宜しく、音節上に神解すべきのみ。劉勰が、大舜の言ふところ、詩言志、歌永言、聲依永、律和聲の十二字を分析し、前六字を以て詩の註脚となし、後六字を以て樂府の註脚となせしは、頗る適切なり。又或人が、古詩は目を主とし、樂府は耳を主とす、故に古詩は小說の如く、樂府は淨瑠璃の如く、その入神の極致は、敢て毫釐を差せざれども、體裁は夐に異なりといへるも好し。且つこの時代の詩は、主我的にして、專ら自己の境遇に依り、直に胸臆を攄し、感情を文字に表現し、悶を排し、悲を遣るに止まれども、樂府は對他的にして、聽者を感發するを主とせしが如し。之を要するに、古詩は文字の醇粹を尙べども、樂府は詞の雅俗を擇ばず、故に最も觀るべきは、一種天眞爛熳の趣味、疎野樸質の間に溢出し、盎然として掬すべきに在り。樂府古辭西門行と、十九首中「生年不滿百」の一首とを比較せば、その一端を知るの便あらむ。樂府の名題、固より一ならず、歌・行・歌行・引・吟・謠・曲の如き、その主たるものにして、之を詳論せしもの、別に其書頗る多し。苟くも、漢魏六朝の製作にして、この種の題名あるもの、概ね皆樂府なりとなすも、殆んど誤なし。

今便を以て一歩を踏過し、支那の全時代を通じ、樂府の意義、如何に變遷したるかを探究せむ。漢代はじめて、樂府の名ありしより、之に擬するもの、後世長しへに絶えず。但し、魏晉以下、郊祀宗廟に用ひむが爲に、特に製作したるものの外は、名は樂府と雖も、必ずしも樂に施すを得ず、文士音律に嫻ふもの少きを以てのみ。故に陳思王・陸士衡の如きも、時に乖調と呼ばれ、劉彥和、以て伶人に詔ぐるなく、故らに絲管を謝するを事とせり。蓋し、古しへ樂府の題目、以て賦詠すべきものあり、文士之が詞を作る。或は樂府の詞、その體、愛すべきものあり、文士之に擬す。故に此事あり。然れども、要するに、皆樂府の別支、故に一概して樂府といふのみ、樂章といへる古義に對しては、漸次隔離せむとする傾向あり。唐人の作、題意を離れずと雖も時事を諷詠し、牽合擬曳、裏面に多少の新意あるを上乘となせり。但し聲響步趨は、專ら擬古を常とするのみ、遂に音律に協合するや、否やを檢するに及ばず、李太白の諸作の如き、その好適例なり。他に又一種別樣なる杜甫・白居易等の所作あり、時事を詠じ、後の采詩者を俟つといふを以て樂府と稱せらる。馮鈍吟、之を論する詳かなり。而して、樂府即ち樂章なりとせば、唐人の絶句は、概ね之を樂府と謂はざるべからず。但し、特別の條件あらざる限り、普通に唐絶を樂府と謂はざるものは、樂府なほ依然として樂章たる意義を有するも、之を朝儀・軍旅等、公に關するものに限りたればならむか。宋の詞に於ける、金の北曲に於ける、元の南曲に於ける、亦た此の如きのみ。

明代に至りては、樂府の意義、更に變化し、甚だ曖昧の者となり了せり。李于鱗、鍾伯敬の妄は姑らく言はず。他に李西涯あり、詩三卷を作り、次第に古を詠じ、自ら樂府といふ。その文、すでに金石に諧はず、樂に非ざるなり。又古題を取らず、樂府に附すべからざるなり。又時事を詠ずる、漢人の歌謠及び杜陵の新題樂府の如くならず。直に是れ有韻の史論、自ら題して史讃といふべく、或は咏史の詩といへば可なり。然れども、予は之を樂府に非ずといはず、時代の遷降によりて、意義又變じたりといはむとす。但だ恐るゝところは、詩との區別、愈よ不明瞭に歸し去らむかに在り。

こゝに、馮鈍吟の說により、唐代以後、謂ゆる樂府なるもの、その發展上、如何なる分科を有するかを尋ねむに、凡そ左の七種に歸着すべし。

一、詩を制して樂に協ふ　二、詩を詩つて樂に入る

三、古じへ此曲あり、其聲に倚つて詩を作る

四、自ら新曲を製す　五、古に擬す

六、古題を派出す　七、杜陵の新題樂府

而して、予は上述の理由を以て、その外明代李西涯の自ら謂ゆる樂府

八、咏史樂府

を加へむとす。見よ、原始の樂府は、最初の三種、他の六は、すべて副次的產物なるを。

予は、この節を終るに臨み、一言以て之を蔽はむ。曰く、漢代古詩といひ、樂府といひ、ともに南賦北詩、化學的抱合の結成品にして、而かも、普遍的性質を添へし者なり、と。

（一九）漢代詩想の趨向

詩經に收むる三百篇は、かつて論ぜし如く、敎訓的抒情詩に過ぎず。その特質として感情を抑壓せし、强盛なる意志と堅忍なる精神とを認むと雖も、弊の極まるところ、自由なる人間思想の大半を排斥し、血なく淚なきの皮相文字、遂に神來の聲調に乏しきを憾まざるを得ず。然れども、その中、一二の除外例なきに非ず。たゞ夫れ、身賢聖に非ざるよりは、道德に殉する能はず、多少の怨嗟悲嘆は、避けむと欲して得ざるところ。加之、嚴格なる禮法の規矩は、人生をして枯燥無味ならしめ、時には苦痛を起さしむることありすでに、樂を享くるに非ざれば何ぞ獨り生を貪らむ、半百年の生涯、汲々として何の贏すところぞ。一念こゝに至る時は、如何なる主義傾向の下に在るも、愉逸を欲するの情を止むる能はず、これを人間普通の至情となす。まことに唐風山有樞の一篇は、此種の感慨を述べて、險吝を笑ひ、行樂を勸め、詩經中、他に匹儔を見ざるものと爲すべし。

繇つて考ふるに、老莊を始めとしての南方文學は、地理的影響に受けしところ、固より

大なりと雖も、歴史的感化、更に大なるものあり、社會が日に複雜となり、この種の至情より出てし希望、愈よ滿たされざるに由り、感情的なる人民が、熱血を注ぎて成れるもの、その厭世に赴き、嘲俗に傾きたる、固より然りとなすべし。

こゝに漢代の思想が老莊哲理に感化されしこと、決して尠少ならず。その理因はずでに考察を經たり。加ふるに、不完全なる社會に於て、理想や、常に現實と相容れず、世界は終に圓滿なる幸福を享くべきの地に非ざるを經驗したる上は、厭世思想の詩歌に逃出せしもの、固より理なしとせず、且つ漢代は禮法に汲々たらざりしを以て、詩人は比較的自由に感情を述ぶるを得、專ら人生を歌ひ、天地の悠久にして我生の倏忽なる、到底十分の快樂を享け難きを嗟嘆せり。予輩は、支那の詩歌が、こゝに始めて皮相的ならずして、漸く眞實的に近づきしを喜ばずむばあらず。

邦家の汚隆は社會心象に大關係を有す。はじめ武帝の位に上るや、文景豐富の後を受け、大を好み、功を喜び外は征戰をなし、內は土木を起し、重歛繁刑、百姓をして疲勞せしめ、輪臺の一詔、僅に民心を繫く。この一事、厭世思想の增進を促がせしこと、言を俟たず。かくの如くして、漢代の厭世的傾向は、南方思想の感化に本づくと雖も、這般の榮枯盛衰を經驗したる後は、頹然自放となり、漸くにして、老莊哲理の眞義に遠かりさながら、楊朱の思想と類似するに至れりき。漢代の詩歌、之を一言すれば淺薄なる現世快樂主義の福音なり。然れども、これ厭世の範圍に在ること斷じて、爭ふべからず。予は、こゝに至りて、宗教を有せざる漢代國民の不幸を憫まずむばあらず。彼等は、信仰に渴して、煩惱に堪へず、然れども、心靈の活動によりて繫縛を脫却する活手段を悟らず、肉慾的快樂の價値なきを悟りつゝも、その他、何を求むべきかを知らざるなり。嗚呼、哀々乎として危いかな、無宗教の國民や。

雄才大略ある武帝その人、自ら歌ふところ、秋風何ぞ悲哀の詞多き。而して、是れ漢代を通じたる詩想の始めて發現せしもの、樂極まつて哀來り、忽ち悔心を萌す、王通の評語、蓋し穿てるかな。次に揚惲が秦聲の唱、趙女の瑟に和し、酒後耳熱し、天を仰いて、缶を扣き、呼んで烏烏たりしもの、又感慨の深きを見るべし。古詩十九首、高古敦朴、その思深遠、言盡くるあつて意窮るなきは、實にこの思想の起伏するに因らずや。樂府又この類多し。東漢節義の士を尙び、多少の影響に人心を及ぼせしと雖も、如上の詩想は、未だ曾つて泯滅せず。かくの如くして、老莊哲理の感化せし厭世思想は、一道の暗流となり遙に後世に波及し、社會の事情日に窮迫するに及びては、驅つて極端に走らしめ、終に謂ゆる淸談家を生ず、その由つて來るところ、洵に遠いかな。

(二〇) 漢詩の價値及び略評

漢代の作、最も古るきは高祖の風起なり、これより先、項羽に垓下の歌あり、一に拔山操といふ。二首相對して各自英雄興廢の氣象を想見するに足る。唐山夫人の房中歌十七章、後人是非の論、未だ決せずと雖も、之を要するに、質厚に過ぎて、餘韵に乏しく、歷史上重要なる位地を占むるのみ。呂后の時に及びては、趙の幽王の幽歌あり、他に呂氏簒奪の史的事實に聯關して高祖の鴻鵠の歌、戚夫人の春歌ありと雖も、後人の假托に出でしやの嫌あり。韋孟の四言詩に於けるや、將に周詩の逸響に接せむとす、諷諫詩、在鄒詩、ともに淸肅醇厚を以て其勝を擅にす。以上は武帝以前に屬し、詩歌の製作、未だ盛ならざりし時に係る。

古詩十九首、實に漢代五言の冠冕なり。其中の八首、枚乘の作に係ると傳ふこと、前に已に述べたり。又文心雕龍に據るに、冉冉孤生竹の一篇を以て傅毅の作となせり。毅は東漢の人、而して、之と驅馬上東門との二首は、列して樂府の中に在り、乃ち知る、昭明太子の選、時の前後を考覈するに暇あらず、一時作者判明せざりしものを、得るに隨つて一所に匯收し、或は樂府と雖も詞意の似たるものを混淆し、題して無名氏の古詩十九首となせしに過ぎざるを。故を以て、或は逐臣棄妻の手に成りしもあるべく、或は親明

一字なく、游子他鄉に感吟せしもあるべく、或は離別羈旅、死生新古の詠もあるべし、然れども、之を一概して、寄托悠遠、神奇を溫厚に蓄へ、感愴を和平に寓するは、洵に絕代の神品たるに負かず、風餘詩母の稱、決して過賞に非ず。陳繹曾が「景眞情眞、事眞眞景眞、至淸天衣の如く、後の作者、之を鍼縷襞績の間に求む、愚に非ざれば妄」といへるを見れば、全く同時代の詩にして聲調相似たるのみならず思想聯關して、矛盾するところなきを知るに足らむ。他に又古詩と題するもの數首あり皆愛誦すべし。郊祀歌は、房中歌と同じく、章句錯亂せしに似たるものあり、その價値、やゝ下れり。古詩と郊祀と、その章數、ともに十九、又一奇となすべし。

武帝昭帝の詩、數篇あり、世之を傳ふ。蘇李贈作の諸作、古しへより擬作と稱す、然れども、六朝時代作者の能く模擬し得べきところに非ず、その漢詩たること、問はずして明かなり。沈德潛曰く、蘇李の詩、言情欵々として、感悟すでに具さに、急言竭論なくして、意自ら長く、神自ら遠く、聽者をして、油々善く入り、其然るを知らずして然らしむ、と。今之を細玩するに、神興自然、意象渾融、自ら千古に濶步するに足るを疑はず。

之の餘、烏孫公主・王昭君が胡國の作あり、卓文君の白頭吟・班婕妤の怨歌行あり、共に

女流の爲に大に氣を吐くものといふべし。東漢に入れば、蘇伯玉が妻の盤中詩、張衡の四愁・怨篇・定情・同聲あり、秦嘉・徐淑夫妻贈答の什あり、蔡邕の飲馬長城窟あり、氣格漸く下ると雖も、或は興趣深微、或は憂怫沈痛、或は荒凄悲凉、又稀世の吟たるべし。

以上の諸人、僅に兩三首を以て傳ふと雖も、蔡琰の作、二十首、今猶ほ存せり。琰、字は文姬、邕の女なり、夫を亡うて寡居し、漢末亂離の際、虜へられて胡中に入り、匈奴左賢王の爲に逼られて其婦となり、二子を擧げ、居ること二十餘年。後、曹操の爲に贖はれて故土に歸る。その作、悲憤の詩二首、胡笳拍辭十有八篇。史に稱す、亂離を感傷し、悲憤を追懷して作る、と。悲憤の第一詩は五言を以て之を出し、第二詩は、七言を以て之を出し、胡笳拍辭は、やゝ騷體に類し、頓挫淋漓の趣を曲盡し、全篇十八章、首尾連關、截割すべからず。之を總括して、深刻の語、愀愴の句、讀者をして恍然自ら其境を歷て、其人に接する如く、慨乎餘悲を牽き、悄乎餘思を動かさしむるに足る。琰、もと集あり、今唯だ詩を存するのみ。

樂府無慮數十篇、大抵無名氏の作なり。長歌行・短歌行・相逢行・戰城南・孤兒行・婦病行等、皆觀るべし。而して、最も有名なるは、陌上桑・羽林郎の二曲なり。陌上桑は、一縣令が路上採桑の婦人秦羅敷が姿容の美なるを艶とし、强いて迎へて妾となさむとせしに對し、可憐の羅敷が、箏を彈じて哀を述べ、その好夫婿あるを誇稱して、之を拒絶したる事實を作り、羽林郎は、霍將軍の奴馮子都といへる者、主家の權勢を恃むの餘、一酒家の少女を豪奪せむとせしに、少女が婉言微辭を以て、その强暴を斥けし一段の本事を敍述せり。羅敷が拒絶の詞に「羅敷前致詞、使君一何愚、使君自有婦、羅敷自有夫」といへると、酒家の少女の詞に「男兒愛後婦、女子重前夫」といへるとは、俱に是れ一幅の筆墨にして、大義凜然奪ふべからざるの概あり。如何に强暴無耻の者と雖も、之を聽いて、むしろ、その良心に羞ぢざらむや。二首、托諷微婉、ともに質古を以て勝る。

若し夫れ、廬江小吏妻の一篇に至りては、一千七百四十五言より成り、啻に漢代の詩中に異彩を放つのみならず、あらゆる支那詩歌中の最長篇にして、且つ敍事詩たるを以て、古今に匹儔なしといふも不可なく、唯だその樂府中に列するを以て、人口に膾炙せざるは、まことに惋惜すべき事に屬す。その小序にいふ、「漢末建安中、廬江府の小吏焦仲卿の妻劉氏、仲卿の母の逼るところなり、自ら嫁せざるを誓ふ。その家、これに逼る、乃ち水に投じて死す。仲卿之を聞いて、亦た庭樹に縊る。時人之を傷んで、詩を爲ると云ふ。」と。故に題して古詩爲焦仲卿妻作といへり。之を要するに、一場悲哀の物語を把り來り、最も巧妙なる方法を以て敍述したるものにして、殊に戀愛の超絶的なるに道ひ及びたるは、確に思想發露の自由を求めしなるべく、漢代の詩をして掉尾有力ならしめ、予

輩をして支那詩歌の一進境を成したる時期たるを斷定せしむるもの、一に此詩の儼存に賴らずむばあらず。この詩に就いて、細評を試むるは、紙數限ありて許さゞるところなれども、一言すれば、排偶の工と對話の妙とに於て、分析的觀察と藝術的技工とを見るといふべく王世貞が「質にして俚ならず亂れて能く整ひ、事を敘するは書くが如く、情を敘するは訴ふるが如く、長篇の聖なる者なり」といへるは、決して所好に阿りたる諛評に非ず。若し夫れ、之を却けて「絮々として厭ふべく、猶ほ此間情死演詞の如きのみ」といふに至りては、予は唯だ老顛何等の狂漢ぞといひ、一笑する外あらざるなり。

漢代詩歌の重要なるもの、略ぼ上に盡したり。今その特質を概括せむに、質の一字、以て之を蔽ふに足るべし。然れども、その質たるや、詩經に見たるものとは大に異にして、質中自ら文あり、漸く技工に意あらむとし、樸茂雄深の間に於て、一種の風韵を帶び、匠心靈活、工を求めずして自ら工を存し、特に佳句の摘むべきなく、渾成圓熟、勝を全篇を集むるもの、篇々皆然り。故に胡應麟は曰く、兩漢の詩、古今に冠絶する所以、率ね之を無意に得たればなり。唯だ里巷歌謠のみならず、匠心信口、即ち枚李張蔡、未だ嘗つて鍛鍊工を求めず、而して神聖工巧、備に天造に出づ、と。而して、之を讀むものは、陳繹曾が、云ひし如く、「其實を先にし其文を後にするを要するなり」

（二一）小說の發展

支那に於ける小說の目は、はじめて七略に見え、漢書藝文志、之を承く。然れども是れ、予輩が今日謂ゆる小說に非ず。班固云ふ、小說家者流は、蓋し稗官より出て、街談巷語、道聽塗說せしものゝ造るところなり、と。稗は細碎の義に取り、街談巷說、細碎の者に過ぎざるを以て言ふなり。古しへ傳ふるところに據れば、稗官は、街談巷語を綴り、閭里の風俗を王者に知らしめしもの、猶ほ采詩の官、各地の歌謠を采りしと一般、支那人は、之を合せて、政敎の一助となせしなりき。

漢書藝文志に載するもの、伊尹說二十七篇・鬻子十九篇・周考七十六篇・青史子五十七篇・師曠六篇・務成子十一篇・宋子十八篇・天乙三篇・黃帝記四十篇あり。蓋し一種想像力の產物に外ならずとするも、街談巷語に比して、却つて小說に遠く、伊尹割烹の說の如き、即ち其一なるべし。胡應麟曰く、實は後世の博物志怪と迥かに別なり、蓋し亦た雜家者流の稍や錯ゆるに事を以てせしのみ。列するところ、伊尹一篇・黃帝一篇・成湯一篇の如き、義を立て名を命ずる、動もすれば、聖賢に依る、豈に後世謂ゆる小說ならむや、と。おもふに、此等の書は戰國前後に出でしものなるべく、莊子に引ける齊諧の怪を志せる、やがて後世盛に起れる神仙譚の種子とも見るべく、而して、之を培養せしものは、老莊列

等、南方江澤道家の思想及び齊燕海濱方士の怪說なりとす。

藝文志に載する小說にして、明かに武帝前後に成りしものは、封禪方說四十篇待詔臣饒心術二十五篇・待詔臣安成未央術一篇・臣壽周紀七篇・虞初周說九百四十三篇等にして、之を一概して神仙譚なり。燕齊の地、海に濱し、風水の變多く、登州岬角は蜃樓の常現地たり。山東方士の謂ゆる三神山、亦た實に蜃樓に外ならざること、史記封禪書の本文に照らして明かなり。齊の威宣・燕の昭王・秦の始皇、一代の英主を以て、なほ其說に惑はされ、方士をして海に入つて之を求めしめ、漢の武帝、英雄の資あるに拘らず、その迷信の深き、不老不死を欲する、前の諸帝王に比して更に甚しく、李少君・少翁・欒大・公孫卿の輩、頻りに荒誕不稽の說を上れり。かくの如くして、如上の諸書は、武帝前後に成れる神仙譚たること、何の疑ふところぞ、況んや、書名、すでに小說に似ず、頗る神仙に傾きしを證するに於てをや

この中、特に注意を惹くは、虞初周說九百四十三篇なり。張衡の西京賦に曰く、匪惟虞好、廼有秘書、小說九百、本自虞初、從容之求寔俟寔儲、と。虞初、班固の本註に云ふ、河南の人、武帝の時、方士を以て侍郎たり、黃車使者と號す、と。應劭云ふ、その說、周書を以て本となせり、と。顏師古云ふ、史記に洛陽の人といふ、と。虞初、すでに方士、神仙怪誕の說をなして、帝者の好奇心に投せしものなるべし。胡應麟、以爲へらく、余恐る、虞初は即ち尙書百篇なるべく、九百篇は九百事に過ぎず、計るに、後世の卷を以てせば、數十餘事に過ぎざるのみ。七略稱するところの小說、唯だこれ當に後世と同じかるべく、方士務めて迂怪をなして、主心を惑はす、神異十洲の祖襲、自ら來るあり、と。要するに、神仙譚は、こゝに漸く小說に近き形體を備ふるに至れりしならむ。

然れども、如上の書は、今日すでに傳らず。その漢志に見えたる外、漢代小說として今に存するもの凡そ八、その中、神仙に關するもの四。海內十洲記一卷・神異經一卷・洞冥記四卷・漢武內傳一卷、是れなり。前二書は、東方朔の著と稱すれども、固より信ずべからず。但だ文致より推せば、後漢の人たるに似たり。洞冥記、亦た之と類を同うし、郭憲の著なりといふ。これ等の書は、すべて山海經を踏襲せしものに外ならず

漢武內傳は穆天子傳と科を同うし、武帝齋戒して、西王母に見え、神仙不老の術を受けしを記す。西王母、もと蠻種の名、はじめ穆王天下を巡遊し、その地に至り、之と會す、何の怪かあらむ、神仙の說起るに及び、西王母は女神となり、やがて、侍女を隨へて雲霄より降下して武帝と相見たりといふ。かくの如く、山海經をして神異・十洲・洞冥たらしめ、穆天子傳をして漢武內傳たらしめしは、小說たるに必要なる南方思想を以て潤色せ

し結果に過ぎず。如上四種の中、漢武内傳、最も小說に近し。この書、班固の作と稱すれども、亦た信ずべからず。

小說、すでに巷談街語を稱するものとすれば、西京雜記・漢武故事の如き隨筆の書、亦た此に含まるゝを怪まず。西京雜記は、武帝時代の雜事を記せしものにして、もと、劉歆の作と稱せしが、隋志、撰者の名を擧げず、唐志、はじめて葛洪撰といへり。葛洪は、晉の人。陳振孫、斷じて洪に出でざるを辨ぜり。或は又班固となし、王儉となす。胡應麟云ふ、其文を考ふるに、頗る衰薾、孟堅に類せず、これ六朝の作なり、と。然れども、予は漢代無名の文士、雜記の殘缺せしものなるを信ぜむとす。後世に至りては、この類、頗る發達し、唐の開元天寶遺事・宋の宣和遺事の如き、いづれも、同一の體裁に出づ。而して、これ小說てふ字義に於て尤も相當ると同時に、現時の意義に於ては愈よ遠きものなり。

この外、稍や考察を値すべきものは、飛燕外傳・雜事秘辛の二書なり。胡應麟は支那の小說を分つて五となし、一を志怪といひ、二を傳奇といひ、神仙譚を志怪中に攝し、人間の情事を描きしものを傳奇に攝し、飛燕を以て其首となせり。

飛燕外傳、陳振孫云ふ、漢の河東の尉伶玄撰す、自ら揚雄と時を同うすといへり。晁公武云ふ、茂陵の下理、之を金縢漆櫃に藏せしが、王莽の亂の時、劉恭世に傳ふるを得、晉の時、荀勗校して上るといへども、是れ亦た考ふべきなし、と。この書、前漢成帝の時、趙后飛燕、その妹后德と寵を宮闈に爭ふの狀を寫し、亦た以て漢末宮中の內情を察するに足る。然れども、小說としては、未だ采るに足らず。何となれば、單に筋書に止まり、加ふるに末段頗る淫猥、殆んど正讀する能はざればなり。但し文辭の妖麗なるに至りては、漢代の小品として、毫も遜色なし。

雜事秘辛、その婦女に關する點に於て此書と類を同うす。撰者の姓名、傳はらず。或は後世の贋作に係ると稱すれども、その文辭古雅にして幽婉、斷じて魏晉以下に落ちず。その記するところは、後漢の桓帝、大將軍乘高の女瑩を以て后となさむとし、吳妁といへる一老嫗をして、その身體を查せしめ、遂に冊立して后となすに至りし事にして、篇中、嘖々として稱せらるゝは、吳妁、瑩の燕處に入り、之を審視するの一段に在り。時日晷薄辰、穿照蜃牕、光送著瑩面上、如朝霞和雪艶射、不能正視より以下、文辭奇艶にして、善く細微を極むと雖も、寫實の筆の大膽なる、むしろ驚くべく、後世の淫書、皆端を此に發す。予は、こゝに至りて、揚愼が之を斥けて、但だ太だ穢褻のみといへるを以て、千秋の定評と爲さむとす。而して、この書、毫も人情の委曲に接觸せず、美人の身體檢査より、一轉して皇后冊立の典禮に及ぶ、結構單純にして他の奇なく、小說としての價値、はるかに飛

燕外傳の下に在りと謂はざるべからず。

予は、さきに漢代の好尚、驕奢に在るをいひ、文學に於て、叙事に長じ、詩歌に於て現世快樂主義の福音を宣傳したるを論じたり、然らば、飛燕外傳・雜事秘辛等、相踵いて出でしもの、何ぞ怪むに足らむ。蓋し肉體美の描寫は、實に當時人心の渴望を滿たすべき好個の藝術品なればなり。漢代の民、道念堅からざること、こゝに於て愈よ彰著なり。如上八種の小說は、すべて漢魏叢書に收む。篤學好文の士は、就いて見るべし。

第二　魏晉文學

(一)　魏晉の厭世思潮

兩漢四百年を通じて、人心に浸潤したる道敎の勢力は、固より異常にして、一たび魏晉に入れば、橫流滔々として際涯なし。顧れば、武帝が儒敎を表彰せし後、北方思想は、政治上に於て、絕對の威力を逞うするを得しも、南方思想は、決して、爲に泯滅せず、愈よ深く、その根柢を人心の奧底に托したりき。かくの如く、兩敎並立の結果、後者は、むしろ潛勢力を蓄積するの機會を得、早晚必ず爆發せずむば止まざるの狀勢を成せり。換言すれば、春秋戰國の際に發生せし厭世思想は、漢の中葉前後、文景の豐富・武宣の盛治に際し、物質的饒富を以て、一時殆んど鎭壓されしと雖も、こゝに至りて、再び其勢を鼓せむとせり。而して、之を激成せし理因、一にして足らず、外戚の禍・黨錮の變・莽操の簒奪、就中その多くは、崇儒の餘弊なり。こゝに於て、自然の反動として、愈よ黃老の盛行を見るに至れりき。

然れども、魏晉以後の厭世思想に對して、直接の關係を有するものは、主として、當時の社會的事情に在り。詳言すれば、三國の時勢と、當時の强國たりし魏室の少恩と、即ち

是れのみ。黄巾叛後、爭亂相踵ぎ、炎運すでに振はず、その極、遂に三國の分爭となる。這般騷亂の世、尙ぶところは、攻城野戰、權謀術數の士に在り、學問技藝は、不急の閑事にして、學者は殆んど當世に用なし、しかも、彼等は固より世間的勇氣に乏しきものにして、政治的大運動の軌道外に立ち、自然の勢、厭世に趨向したり。次に魏室の少恩に至りては、愈よ甚しきものあり。曹操すでに權謀を以て下を馭し、到底恩少きの嫌なき能はず。苟彧の如きは、一時の人材、その爲に盡せしところ少からず、唯だ漢室復興の志あるを以て、後、遂に藥を飲んで死するの止むを得ざるに至る。君臣すでに其志を異にし、互に相賴つて富貴利達を圖る、その間、毫も德義相慈むものあらず。操の子孫、亦た多くは刻薄、頻りに骨肉を殘害し、又外戚に信任せず。陳思王曹植、その人、固より簡易、必ずしも、兄を凌ぐの意あるに非ず、而かも、其父に寵せられしが故に、文帝に容れられず、一生を擧げて、文墨宴飲を事とし、又佛老に耽る、要は世と疎遠にして、長しへに相忘れむとするに在るなり。

以上述ぶるところは、直接間接の別あるも、均しく外部の理因に過ぎず。而して、之と相伴うて到底離るべからざる關係を有する內部の理因は、實に漢の中葉以後に於ける佛敎の流布に在り。佛道二敎の所說、頗る相似たりと雖も、厭世思想を促進するに對しては、佛敎の勢力、むしろ遙かに大なるものあり。その故、他なし、佛敎は、宗敎的特性を以て稱せらるゝ印度人の產出に係り、その敎理の深邃なる、到底道敎の比に非ず、その究極の理想及び所說の方法に於て、ともに現世を超越したればなり。故に魏晉の厭世思想は、道之を煽し、佛之を鼓せしといふを得べし。

支那に於て、政治上の紛亂、最も甚しく、從つて道義最も廢頹せし時代を求むれば、之を上にして春秋戰國あり、之を下にして魏晉六朝あり、而して、後者むしろ甚しきもの、世愈よ降りて、慘虐苛酷、その風を爲せしに由るや必せり。この間、子、父を弑するあり、臣、君を幽するあり、小人上に跳梁し、君子下に屏息し、破倫失序の事實、一一之を擧ぐの煩なるに堪へず、かくの如くして、榮枯盛衰の甚しき、眞に轉瞬の間に起り、輪奐の美を極めし宮闕も、忽にして、黍離麥秀、亡國の遺墟となり、深殿垂拱、萬乘の天子も、衞卒叱咤の孤囚となる、而して、當時政を執るもの、器宇偏狹、權威を弄し、猜疑構陷、これ事とす。その甚しきに至りては、一言の失、一笑の謔、以て其身を殺すに足る。この時に方り、自ら進んで、亂禍紛爭の盤渦に投ずるもの、多くは是れ、風雲の會を悅ぶ亂世の梟雄のみ。學者詞人等に在りては、固より然るを得ず、彼等は、すでに現世を嫌忌せり。故を以て、その衷情の最奥底には、多少の憤念ありしならむと雖も、唯だ夫れ、災禍眼前に在り、決して、熱罵

冷嘲の語を發するを得ず、かの永久の社會狀勢を慮り、故らに當今を蹂躙する如きは、絶對的に不可能なりき。彼等の多くが、老莊を嗜好せしは、元と斯世と遠ざかるの意に出て、その厭世的趣味、偶ま自己と一致し、且つ入り易かりしが故のみ。

漢末より晉初に至るまで、學者詞人の遭遇如何を見ば、士の當世を處すること、頗る難く、到底世を避くるの止むを得ざる所以を悟るべし。漢末の蔡邕・孔融、慘禍その身を喪ひ、楊修の如き、禰衡の如き、皆亦たその終を全うせず。三國の時、何晏あり、劉楨あり、晉に入りては、張華あり、嵇康あり、陸機兄弟あり、詞名重望、その累をなし、皆厄に罹り、甚しきは戮せらる。而して、偶ま生を全うしたるもの、多くは世を遯れ俗に背きし清談者流、老莊の徒に外ならず。彼等は、一身の安全を圖るに汲々として、全く人生の價値を認めず。乃ち以爲へらく、天地萬物、無を以て本となす人生何ぞ獨り無ならざらむや、と。こゝに於て、實踐的方面に於て、自ら道德を重んぜず、斯世に在る間は本能の發動に任かせ、大害を被らざる限り、十分の快樂を求め得むことを期せり。之を一概して清談者流の爲すところは、毫も名節を修めず、談笑無事、以て身を處せむことを勉め、縱酒酣飲、禮法を蔑視し、口を老莊虛無の旨に藉り、この五十年を擧げて、醉生夢死の間に斷送せむを欲せしものなり。賢士に在りては、實に止むを得ざるに出づと雖も、一般に亘るに及びては、その弊、言ふに勝ふべからず、國力の伸張、豈に望むべけむや、塞外諸胡の侵入、固より其故なきにあらず。こゝに至りて、因果聯關、愈よ其勢を助長し、やがて國力均衡の結果、南北兩朝の對立を見るに至るまで、毫も絶ゆることなかりき。

魏晉老莊の盛行は、儒敎の衰頽によりて、反照的に證明さるべし。之を前にして、王莽の簒奪あり、之を後にして、朋黨の慘禍あり。兩漢の末路は、儒敎に對する一大打擊なり。魏の漢室に繼ぐや、大學の制を立てたりと雖も、朝に簒弑の事を爲し、夕に科擧の法を行ふ、德敎幸に存すと雖も、唯だ形骸のみ。その間、二三儒を以て、稱せらると雖も、訓詁章句の流に過ぎず。加ふるに、王充早く孔孟を斥けて、老莊を尙び、王肅・何晏の徒、專ら虛無恬淡の說を弄し、王弼の如きは、老子を以て易を說き、之に次いで、夏侯玄・荀粲に至りては、六經を罵つて聖人の糟粕となせり。魏、すでに儒學なし、兩晉以下、愈よ甚し。擧世亂離に苦むの時、人は其生を聊んぜず、百年の志を懷いて、名節を硏くもの絶えて無く、兩晉の天下に君たる二百年、その末、淸節を以て稱せられしもの、僅に徐廣と陶淵明とありしのみ。儒敎は毫も人心を繫ぐ能はざりしなり。

儒學の衰頽は經世家の缺乏を證するものにして、魏晉の間、論策家なく、歷史家なく、漢の中葉以後に發生せし四六駢儷は、一種の華文として盛行せしも、固より骨力の高

きものなく、漸を以て、糜爛に赴けり。魏晋の文士、すでに律語に耽り、賦の陳套に歸するや、飜つて詩の新奇なるを喜びぬ。而して、その賦するところ、宴游の興に非ざれば、身世の變、しかも其人すでに識見氣概を缺くが故に、到底、孱弱纖穠を免れず、但だ厭世の念は、やがて自然に對する讃美となり、文界に新生面を拓きしの一事、特に注意を値すといはざるべからず。

(二) 武帝父子

漢代に於ては、賦家時に詩を賦せしに反し、魏晋に於ては、詩家時に賦を作れり。賦と詩と、今や文學上、尊卑の位置を顚倒しぬ。魏晋の文學、すでに詩を主とす。然れども、二代各異なるところあり、前者は兩漢の餘派にして、幾分質厚の趣を認むべきに反し、後者は齊梁の先驅にして、全く綺靡に流れたり。

魏の詩人の第一を、曹操となす。彼は三國第一の英雄たるのみならず、又實に支那四千年の史上、稀に見るところの豪傑なり。かつて劉玄德に向ひ、天下の英雄、使君と操とのみといひしが、要するに、儀式的辭令に過ぎずして、蜀の先主は、遂に其敵に非ず。赤壁の一敗、いたづらに周郎の名を爲せしと雖も、兗州の牧より入つて丞相となり、冀州の牧を領して魏公に封ぜられ、銅雀臺を鄴に造り、爵を進めて王となり、帝者の車服を用ひ、出入警蹕、殆んど天子の實權を掌握するに至るまでの事業は、絕代の雄才大略を證して餘ありといふべし。その詩の沈鷙雄傑、豈に故なしとせむや。

鍾嶸の詩品「曹公は古直、甚だ悲涼の句あり」といふ、中らざるに非ず。然れども、之を下品に置くに至りては、梁人綺靡を好むが故ならむと雖も、亦た決して沒眼識の譏を逃るべからず。陳巖肖又曰く、魏武父子、槊を横へて詩を賦す、遒壯抑揚と雖も帝王の度に乏し、と。未だ知らず、帝王の度とは、果して何者ぞ。而かも、魏武の詩、遂に時勢の產物たるを奈かむ。こゝに於てか、予は沈德潛が「孟德の詩、漢音を存し、沈雄俊爽、時に霸氣を露はす」といひしを以て、千古の定評となさむと欲す。かの月明星稀、烏鵲南飛といへる短歌行中の句は、後に東坡の賦に引抄せられ、今に人口に膾炙するものにして、赤壁の舟中、月下槊を横へて賦せしものといふ。然れども、孟德第一の傑作は、北上行の一首を推すべく、その他、龜雖壽・觀滄海・土不同等、皆誦すべく、今に傳ふるもの、凡そ二十三篇、他に令・敎表・奏・策・尺牘等あれども、斷篇零章、眞贋判し難きを奈かむ。

こゝに注意すべきことあり。後世李太白の詩、古樂府を借りて、諷詠するもの多く、その法、實に曹操に掬まりしこと、是れなり。操の作に係る薤露の篇は、全く漢末の實錄にして、何進宦者を誅するを名とし、董卓を宮廷に召し、却つて覆滅の禍を招くに至りし

事實を寫し、蒿里の篇は、袁術・袁紹の二人、董卓を討つ爲に義兵を擧げ、遂に功を爲さずして終りしを叙す。知るを要す、薤露・蒿里は、元と田横の客の作、漢代樂府、相和歌辭の一にして、曹操自ら其篇に命ぜしに非ざるを。

文帝、名は丕、字は子桓、操の長子、漢の禪を受けて帝位に上る。學を好みて文に妙なり。史に之を評して曰く、天資文藻、筆を下して章を爲し、博聞彊識、才執兼該、もし之に加ふるに、廣大の度を以てし、勵ますに公平の誠を以てし、邁志道を存し、克く德心を廣くすれば、古の賢王、何の遠きことあらむ、と。文帝の人と爲り、頗る多感、その作、亦た徘徊の致を極む。集中、浮淮賦・滄海賦・濟川賦・述征賦・校獵賦の如き、雄壯の文字を臚列したるものなきに非ずと雖も、その本色は、却つて感物賦・感離賦・離居賦・永思賦・悼天賦・鶯賦等に在り。文亦た頗る多く、就中典論と題せる一篇は、支那批評文字の祖となすべし。

その詩、今存するもの、凡そ四十首、之を一概して、便娟婉約を主とし、乃父が悲壯慷慨の習を變じ、巧に人情を寫すや、尤も樂府に長ぜり、短歌行に親を思うて、其物如故、其人不存といひ、善哉行に客憂を述べて、湯湯川流、中有行舟、隨波轉蕩、有似客遊といふ如き、是れなり。王世貞曰く、子桓の小藻、自ら是れ樂府の本色、と。鍾嶸之を中位に置き、且つ曰く所計百餘篇、率ね皆鄙質、偶語の如し。惟だ西北有浮雲の十餘首、殊に美贍翫ぶべく、はじめて其工を見る。然らざれば、何を以て、群彥を銓衡し、その弟に對揚するものならむや、と。その鄙質といふは、やゝ酷に過ぐるものにして、實は質直のみ。まことに、雜詩の數篇、最も傳ふべきは、爭ふべからずと雖も、之を其弟曹植に比すれば、迥かに及ばず、宜なり、その常に植の多才を忌み、之をして豆萁の咏あるに至らしめしや。ひとり、燕歌行の一篇、その體、七言を用ひ、每句韵を押し、掩抑徘徊、節奏の妙、天然に出づ。これ植に於て見ざるところなり。

文帝の皇后甄氏、塘上行の一首あり。文帝即位の後、安平の郭貴嬪、寵を得、因つて鄴に還つて復た見るを得ざるを傷むの作たるが如し。明帝は、甄后の出、その作、種瓜篇あり。魏室恩少しと雖も、歷世文雅を缺かず、亦た是れ、孟德の風化、乃ち然るのみ。

(三) 曹植

曹植、字は子建、操の第四子、文帝の同母弟なり、年十餘歲、詩論及び辭賦を誦讀すること、數十萬言、善く文を爲す。操、かつて其文を視て曰く、汝、人を倩ふか。植跪いて曰く、言出づれば論をなし、筆を下せば章を成す。顧るに、面試せらるべし、奈何ぞ人を倩はむや、と。時に鄴の銅雀臺、新に成る。操、悉く諸子を將ゐて臺に入り、各賦を爲らしむ。植筆を援つて、立どころに成る、觀るべし。操甚だ之を異とす。性簡易にして、威儀を治めず、輿馬服飾、

華麗を尙ばず、進見難問する毎に、聲に應じて對へ、特に寵愛せらる。平原侯に封ぜられ、又臨菑侯に徙る。植、すでに才を以て異とせらる。而して、丁儀・丁廙・楊修等、之が羽翼となる。操狐疑し、幾んど太子たるもの數ばなり。而して、植、性に任かせて行ひ、自ら彫勵せず、酒を飲んで節せず、文帝之を御するに術を以てし、情を矯めて自ら飾り、宮人左右、並に之が說をなす、故に遂に定めて嗣となし、植に邑を增す。植、かつて車に乘じて馳道中を行き、司馬門を開いて出づ。操、大に怒り、公車坐して死す。是に由つて、諸侯の科禁を重くし、寵、日に衰ふ。楊修、亦た尋いて誅せらる。文帝位に即くや、又丁儀・丁廙を誅す。植、諸侯と並に國に就く。黃初二年、監國謁者灌均、指を希ひ、植が酒に醉うて悖慢、使者を刼脅せしを奏し、有司請うて罪を治む。帝、太后の故を以て、爵を貶して、安鄉侯となし、其年改めて鄄城侯となし、後、鄄城王となし、又徙して雍邱王に封ず。植、常に自ら憤怨し、利器を抱いて施すところなく、かつて上疏して、自試を求めしことあり。然れども、用ひられず。後、陳の四縣を以て、植を封じて陳王となす。植、每に別に見て、獨り談じ、時政に論及し、常に冀くは試用せられむことを欲すれども、終に得る能はず。すでに還るや、悵然として望を絕つ。時に法制藩國を待つや、すでに自ら峻迫、寮屬皆賈豎下才、兵人その殘老を給し、大官二百人に過ぎず。又植は前過を以て、事々復た半を減じ、十一年中、三たび都を徙し、汲々として歡なく、遂に疾を發して薨ず。時に年四十一。遺令して薄葬す。子志嗣ぎ、徙つて濟北王に封ぜらる。黃初中、詔して曰く、陳思王、むかし過失ありと雖も、すでに已に克つて、行を愼み、以て前闕を補ひ、且つ少より終に至るまで、篇籍手に離れず、誠に能くし難きなり、其れ黃初中、諸の植を奏する罪狀、公卿已下、尙書秘書中書の三府、大鴻臚に議するもの、皆之を削除せよ、と。又植が前後著すところ、賦・頌・詩・銘・雜論凡そ三百篇を撰錄し、副は內外に藏す。志累りに邑を增し、前と幷せて、九百九十戶に至る。

陳思王の一生は、轗軻不遇なり。文帝、骨肉の親あるに拘らず、之を疎斥せしもの、その因、固より一にして足らず。その曩に屢ば繼嗣たらむとせしこと、蓋し其最たるや必せりと雖も、文帝漢室の簒奪に慊らざりしが如き、亦た有力なる一因たるべく、その甄皇后に對する失戀は、たとひ、小說家に出でゝ信ずるに足らずとするも、他に相似たるものなきを保せず。要するに、文帝は、至情を缺くものに非ざれども、狹量にして、猜忌の心あり、さながら、女子の如く、終に初一念を翻す能はず。之に反して、植は東漢の敎化に養はれたる人にして、忠悌の念、太だ厚く、又功名に意あり、而かも、その狂簡、地を易ふれば、孔融・禰衡たるべく、之を魏室の親としては、甚だ適せず、故を以て、常に不滿の情に堪へず、遂に窮死するの止むを得ざるに至る。豆萁の詠の外、聖皇篇・吁嗟篇・棄婦篇の如き、皆

猜疑嫌貳の際に於ける哀怨を述べ、人をして、覺えず嗟嘆せしむ。彼が胸中の苦悶をいへば、道義と社會との衝突に在り。こゝに於てか、强いて功名富貴等、世間的願望を抑壓せむが爲に、老莊に耽り、又佛經を窺へり。その七啓に「我が身位、我が躬を累す、竊に古人の志ざすところを慕ひ、老莊の遺風を仰ぐ」といひしが如き、以て證とすべく、その他、九愁賦の如き、その慨世の念を表示して、餘あるを見るべし。

植は、天下一石の才、その八斗を傾くと稱せられ、固より天才の人なり。然れども、如上の境遇は、之を驅つて愈よ述作に慰安を求めしきぬ。當時鄴下の文物、一時の盛を極むと雖も、子建ひとり群を挺き、衆能く及ぶなく、その楊德祖に與ふるの書、中、諸子を品隲し、眼中人なきの趣を逗露せり。劉勰之と其兄とを比論して曰く、子建、思捷にして才儁、子桓、慮詳にして力緩、と。之に次いで、鍾嶸は、之を上品に列し、推稱到らざるなし。曰く、その源、國風より出て、骨氣奇高、詞彩華茂、情は雅怨を兼ね、體は文質を被り、今古に恣溢し、卓爾として不群なり。嗟乎、陳思の文章に於けるや、人倫の周孔あり、鱗羽の龍鳳あり、音樂の琴笙あり、女工の黼黻あるが如く、鉛を懷き墨を吮ふものをして、篇章を抱いて景慕し、餘暉に映じ、以て自ら燭さしむ。故に孔氏の門、如し詩を用ふれば、公幹は堂に昇り、思王は室に入り、景陽潘陸は自ら廊廡の間に坐すべし、と。然れども、予輩は、評者たる鍾嶸が、梁人たるを忘るべからず。子建が漢魏六朝の間に獨步するは、固より異論なし。唯だ之を後世の李杜諸公に比すれば、必ずしも、かくの如く然るを得ず。沈德潛、又同一の言を反覆して曰く、子建の詩、五色相宜しく、八音朗暢、才を使うて才を矜らず、博を用ひて博を逞うせず。蘇李以下、故に大家に推す。仲宣、公幹、焉んぞ金鼓を執つて抗顏すべけむや、と。而して、如上の理由は、後人をして、或は聊か慊らざるの言を爲さしめしことあり。徐楨卿は之を其兄に比較し「曹丕の質は美媛に近く、遠く植に逮ばず。然れども、植の才、整栗に堪へざるも憾なり」といひ、陸時雍は「子建の樂府、豐贍餘ありて、精彩足らず。陳羹宿飯の咄嗟に辨ずるが如きも、その新味を求むれば、有ることなきのみ」といへり。語やゝ酷なれども、必ずしも、中らざるに非ず。

これを要するに、植の詩の稱すべきは、風骨の高きと氣象の濶きとに在るべし。その樂府中、名都、美女、白馬の諸篇、いづれも、措辭贍麗にして用意周匝。之に次いで、雜詩、七哀等、天才流麗、頗る風人の遺音あり。委讀の下、無數の格言は、絡繹として集中に奔赴し、殆んど應接に暇あらず。その八方各異氣、千里殊風雨といひ、生存華屋處、零落歸山丘といひ、爲君既不易、爲臣良獨難といひ、利劍不在掌、結交何須多といひ、在貴多忌賤、爲恩誰能博といひ、權家雖愛勝、全國爲令名といひ、丈夫志四海、萬里猶此鄰といひ、孤獸走索群、啣

草不遑食といひ、重陰潤萬物、何懼澤不周といひ、龍欲昇天須躋雲、人之仕進在中人といふが如き、皆洗錬して之を出し、數莖の髭を白了して然るを想はしむ。但し集中殊に贈答の什に富むは、その特色にして、後世應酬の作、故らに情を矯め境を設くるの弊、或は其端を此に開くかを疑はしむ。

詩は建安に至りて、はじめて詞に意あらむとす。こゝに於て、漢代の遺音、天然の古質、すでに絶ゆ。六朝の間、五言盛にして、思王實に其覇を稱し、九鼎大呂の重きを爲すこと、言を俟たずと雖も、偶ま風氣轉移の期に當りしは、最も注意すべきなり。

その集、今存するもの、詩及び樂府の外、賦・騷・令・表・章・書・序・七・論・說・誡・碑・頌・贊・銘・文・誄・辭の諸體あり。賦は强弩の末なりと雖も、情緒殊に纒綿、洛神・出婦・感婚等、自己の閱歷を述べしものゝ如く、その間、頗る微意あり、他の文に至りては、四六駢儷の跡、愈よ明かに、往々にして、衰颯の氣あるを病む。

(四) 鄴下の諸子

武帝父子、相踵いで文學を玩びしが故に、上の好むところ、下之より甚しきはなく、鄴都に於ては、文士雲集せり。その中、最も名あるは、孔融・陳琳・王粲・徐幹・阮瑀・應瑒・劉楨にして、世に鄴下の七子といひ、又その時、建安の前後に在るを以て、建安七子といひ、その體を稱して建安體といふ。但し孔融は、漢代氣節の士、之を以て、鄴下の諸子に伍せしむるは、固より其志に非ざるべく、且つ前に論ぜしを以て、こゝに贅せず。他の諸子皆集あり、徐幹ひとり、その傳を失せしのみ。

陳琳字は孔璋、元と何進の主簿、後、袁紹に從つて、文章を典り、かつて爲に檄を作りて、曹操を詆りしが、袁氏敗るゝや、曹氏に歸し、操、その才を愛して、之を咎めず。琳、はじめ、學を蔡邕に受け、その操に歸するや、軍國の書檄を作る。操、かつて頭風を病みしとき、琳の作るところを讀み、翕然として起つて曰く、これ我が病を癒す、と。その重んぜられしを知るべし。王粲字は仲宣、山陽高平の人、曾祖父及び祖父、ともに漢の三公たり。粲、少くして蔡邕の爲に奇とせらる。邕、かつて嘆じて曰く、これ王公の孫、異才あり、吾如かず。吾家の書籍文章、盡く之に與ふべし、と。後、劉表に從ひ、表の卒するや、その子琮に勸めて、曹氏に歸せしむ。魏國の建つや、侍中となり、制度を興造するに與つて力あり。建安二十二年卒す。徐幹、字は偉長、北海の人、五官中郎將の文學となり、澹然として自ら守り、苟くも得るところを求めず。時人之を敬重す。著すところ、中論二十餘篇あり。阮瑀字は元瑜、亦た少にして學を蔡邕に受く、曹洪徵して尙書記となさむとす、聽かず。曹操、その名を聞いて、之を辟すも應ぜず。遽りに逼促せらるゝや、乃ち山中に入る。操、人をして山を燒かしめ

て之を得、終に之を引具し、後、その司空軍となり、建安十七年卒す。その子籍、魏晋代興の間に名あり。應瑒字は德璉、父祖叔父一家、皆文學の士、瑒、魏に事へ、平原侯植の庶子に任ぜられ、後轉じて五官將丕の文學たり、建安二十二年に卒す。劉楨、字は公幹、亦た太子丕の文學たり、かつて太子に侍し、酒酣にして坐歡ぶとき、太子、夫氏甄氏をして坐中に出てしむ。衆人伏するも、楨、ひとり平視す。操、聞いて、楨を收めて不敬となし、死を減じて輸作せしむ。

如上の諸子、時を同うして、鄴都に聚まり、丕植兄弟、友を以て之を視、一時の文化を皷吹せり。七子の品隲に關して、之を詳論すれば、徒に紙數を費すを以て、こゝには、前人の評語二三を擧げむ。魏の文帝、かつて典論中に論じて曰く、この七字なる者は學に於て遺すところなく、辭に於て似るところなし。咸な以爲へらく、自ら驥騄を千里に騁せ、仰いで足を齊うして並馳す、と。王粲は辭賦に長じ、徐幹は時に齋氣あり、然れども粲の匹なり。粲の初征・登樓・槐賦・征思、幹の玄猿・漏巵・團扇・橘賦の如き、張蔡と雖も、過ぎざるなり。然れども、他の文に於ては、是に稱ふ能はず。琳璃の章表書記は今の儁なり。應瑒は和にして壯ならず、劉楨は壯にして密ならず、と。又書を吳質に與へて曰く、古今文人を觀るに、頗ね細行を護らず、皆能く名節を以て自立すること鮮し。而して、偉長ひとり文を懷き、質を抱き、恬淡寡欲、箕山の志あり、彬々たる君子といふべし。中論二十餘篇を著して、一家の業を成し、辭義典雅、後に傳ふるに足る、此子不朽なりとす。德璉は、常に斐然として、述作の意あり、その才學、以て書を著すに足るも、美志遂げず、更に痛息すべし、孔璋は章表殊に健。公幹は逸氣あり、但だ未だ適ならざるのみ。その五言詩に至りては、妙當時に絕す。元瑜の書記翩々、樂に足るを致す。仲宣、ひとり自ら辭賦を善くす、その體、弱くして起たざるを惜む。その文なるところに至りては、古人も遠く過ぐるなきなり、と。之に次いで、謝靈運は曰く、王粲は、家もと秦川貴公の子孫、亂に遭うて流寓し、自ら傷み、情多し。陳琳は袁本初が書記の故に喪亂を述ぶること多し。徐幹は少うして官情なく、箕潁の心事あり、故に世に仕へて素辭多し。劉楨は卓犖たる偏人、而して文最も氣あり、得るところ、頗る經奇。應瑒は汝潁の士、世故に流離し、頗る飄薄の歎あり。阮瑀は書記の任を管す、故に優渥の言あり、と。談藝錄、又曰く、漢魏の交、文人特に茂し、然れども、衰世叔運、終に粹才鮮し、孔融懿名高く諸子に列す、臨終の詩を觀るに、大に、銘箴の語に類するのみ。應瑒、巧思透迤たり、之を靡靡に失す。休璉百一、微にして能く振ふ、然れども、媚に傷らる。仲宣は流客慷慨、西京を懷ふあるの餘は、誦すべきもの少し。陳琳は意氣鏘鏘たり、凡人の度に非ず。阮生、優緩餘あり。劉楨、錐角重陽割曳綴懸すれば、並に稱すべし、と。この論、や

丶酷なりと雖も、時に正鵠に中れるを覺ゆ。之を要するに、七子互に得失ありと雖も、王粲・劉楨、蓋し領袖たるべく、詩賦ともに然り。故に鍾嶸の詩品、二人を上品に列し、應を中品に列し、徐阮を下品に列す、その劉を評するに曰く、眞骨霜を凌ぎ、高風俗に跨る、但だ氣その文に過ぎ、雕潤少きを恨む。然れども、陳思より已下、楨獨歩と稱す、と。王を評するに曰く。愁愴の詞を發し、文秀にして體羸、曹劉の間に在りて、別に一體を構ふ。陳思に方ぶれば足らず、魏文に比すれば餘あり、と。

王粲に七哀の詩あり、漢末亂離の情況を、目覩せし儘に寫し出せしものにして、その路有饑婦人、抱子棄草間、顧聞號泣聲、揮淚獨不還、未知身死處、何能兩相完」といへるは、詩經の「我躬不閱、遑恤其後」と異曲同工にして、人をして、一讀酸鼻に堪へざらしむ。少陵の三吏・三別等、諸篇、全く此種を祖とせしものなるや疑なし。鍾嶸の評語、是等の諸篇に視れば、未だ確ならざるものあり。粲、すでに七哀の詩あり、曹植にも亦た之あり、而して、曹植に三良の詩あり、王粲にも亦た之あり。知るべし、當時翰墨徽逐、一題出づる毎に、各競うて其才を騁せむとし、この二人、偶ま工力相敵するを以て、研鍊精思、互に凌駕せむと欲せしことを。魏國文物の盛、こゝに概見すべきなり。

粲の詩、七哀・從軍を主とし、賦には登樓・初征あり、劉楨の詩、贈從弟の三首を主とし、賦には魯都・遂志あり。之に次いで、陳琳に飲馬長城窟あり、徐幹に雜詩あり、就中「自君之出矣、明鏡暗不治、思君如流水、何有窮已時」の一解は、後人別に截して小樂府となし、擬するもの頗る多しと雖も、すべて、その自然を遜るを以て稱せらる。その他、一一擧げず。應瑒の宗人に應璩あり、又建安の時に當り、今に其集を傳へ、百一の詩、最も稱せらる。

魏國の奎運、かくの如く盛なりと雖も、吳蜀二國は、遂に及ばず。隋唐經籍志を按ずるに、その地の人にして當時集ありしもの、蜀には、ひとり諸葛亮あるのみ。吳には、張溫・駱統・暨豔・楊厚・陸凱・胡綜・張儼・糺隲等あり。韋昭の如きは、一代の大儒たりしと雖も、末路の慘禍、蔡邕と相似て、頗る痛悼すべく二國の文學を重んぜざる、亦た開國君主の氣風に沿ふならむか。諸家の集、皆佚し、ひとり諸葛丞相集の殘缺、わづかに存するのみ。次に四六駢儷の橫流、散文の發達を妨礙せし狀勢を考察し、諸葛亮以下、魏晉間の古文家二三を併叙せむと欲す。

(五) 八代文章の衰

東漢以後文章の衰は、四六文の盛行に歸すべし。四六文とは何ぞ。その語を四六にし、その辭を偶儷にし、その聲を諧協し、一に駢體といふもの、即ち是れなり。抑も四六駢儷の文たるや、修辭上より見れば、固より捨つべきに非ず、間ま之を用ふれば、溶々たる春

水、數片の落紅を浮べたるが如く、優に風神を具へて、情致楚々、頗る章をなし、その妙、殆んど言ふべからず。劉勰が文心雕龍に論ぜしところ、之を以て、人性自然の發出に係るとなし、陳繹曾が文章歐冶に說きしところ、之を以て、必然的なる一種の美辭となす。四六の價値、實にかくの如し。然れども思へ、濃粧は却つて醜となり易く、多寶は毫も珍とするに足らざるを。故に四六も、一歩を踏過して、濫用過巧に近づくに至れば、詞氣をして淫柔軟弱に流れしむること、言を俟たず。先秦の古文に之を用ひて、絕えて其弊を見ざるは、その頗る自然に出でゝ矩を踰えざるが故のみ。

四六の古文に見ゆるもの、その例、一にして足らず、書・易・老子に於て、すでに之を見るべく、左氏・孟・荀・莊・列に至つて愈よ多く、未だ駢四儷六、確然たる形式を樹立するに至らずと雖も、工緻の襯染を加へて、文を彩らむと欲せし形跡は、斷じて掩蔽すべからず。加之、戰國游士の辯を弄する、亦た然るものあり。戰國策中の文、明かに之を證す、但し、その緊切精工を極めて、淫靡纖柔に陷らざりしは、主として時勢の風氣に出づと雖も、亦た推して妙とすべきなり。子史の文、もと氣力の邁往と規度の宏壯とを特色とするものにして、隱約の中、四六の搖動を見るや、かくの如く、詩經・楚辭の如き律語に於て、愈よ進歩したるもの、理當に然るべきなり。

さなきだに、四六は、人性自然の發出にして、文章の華飾に供せられしを、時は漢代に入り、辭賦が貴族的文學として、標置されしに方りては、愈よ文章を犯し來り、こゝに文章は明かに辭賦化し去られたり。李斯は秦時に在り、すでに暗流の源頭に立つものにして、逐客を諫むる書の如き、盛に華辭を點綴し、仍つて、古人の風、漸く衰ふと稱せらる。下つて、漢代の詞客文人、唯だ一の司馬遷を除いて、その文、盡く辭賦の趣致を存せり。賈誼の過秦論・枚乘の七發より以下、鄒陽の「獄中の書」王褒の「聖主賢臣を得るの頌」の如きに至りては、故事を疊み來り、駸々として偶句漸く多からむとするのみならず、更に進んで四六對偶の奕奕たるを覺ゆるものあり。然れども、西漢は、猶ほ古に近し、東漢以降は、固より言ふに足らず。班固は命世の文豪、漢書の文、時に太史公の墨を摩するものなきに非ずと雖も、その作るところ「燕然山に封するの銘」の如き、短幅の中、四六對偶の指摘すべきもの、頗る多く、遂に人意を滿すに足らず。蔡邕は、曠世の逸才、その文、華麗なれども強いて儷句を用ひたる跡は、徒に醜とすべし。これより後、魏の曹植の如き、專ら偶儷の文を作り、却つて拙劣を免れざるものあり、而かも、當代第一の文人と稱す、他は推して知るべし。

假りに數歩を讓りて、魏晉は、猶ほ或は、可なりとするも、寶鼎一たび南に遷つて後、文

氣の陵夷、日に甚しく、四六の濁流は、遂に六朝三百年を一貫し、長く大江の南北に漲溢し、波を揚げ、瀾を起し、その餘勢、遠く唐宋の汀岸を盪すに至れりき。顧るに、西漢以上、間ま四六あるは、自然の調に出て、秦漢の四六は、尙ほ僅に華詞を拈出せしに過ぎず、文の體裁に因つて然るのみ。魏晉以降は、强いて奇巧を弄し、遍ねく諸種の文體に及ぼさむとす。今夫れ、萬綠叢中の紅一點、點綴の妙、人を惱すは、決して其多きを須ゆべからず、然れども、紫の朱を奪ふは、むしろ惡むべきのみ。蓋し江左偏安の後、淫靡浮華の俗は、自ら延いて、この濃艶佻冶の文體を激成し、之を驅つて、やがて極點に到達せしめしなりき。

これを要するに、四六は辭賦文章の中間に立つものにして、一種の律語なり、少くとも、美文の一體なり。予は、必ずしも、之を却くるを欲せず、否、支那に於て始めて見るを得べき整雅秀美の體式たるを否定せず。而して、予輩が八代文章の衰を公言して憚らざるは、この律語の濫用をいふのみ。凡そ文學の極致は、外形內容の調諧に在り、四六を以て非美文的題目、敍記論策に適用せむとするは、謬見に非ずして何ぞ。況んや、自在なる散文の一體、常に之を揮霍すべき餘地を存するに於てをや。

かくの如き四六瀰漫の間に在りて、簡略に入らず、盪靡に失せず、優に西漢以上の氣格を存するもの、二三その人なきに非ず、諸葛亮・陳壽・杜預・陶淵明の如き、亭々として文質彬々の妙を具へ、宛として時粧群中、古衣冠の人を見るの趣あり。古文一縷の命脈は、斷えむと欲して、幸に未だ絕えず、やがて陳隋を經て、唐に至り、韓柳二氏を得て、はじめて復古の氣運の發するを見たりき。

(六) 魏晉間の古文家

班孟堅の後、すでに文章なし、他なし、經世の志あるもの、極めて希なればなり。而して、諸葛亮が魏晉古文家の第一たるに至りては、予輩をして、至大の興味を感ぜしむ。亮の傳記は、こゝに詳述するの要なし。その作るところ、もと二十四篇、凡そ十萬四千一百一十二字。その篇目を考ふるに、皆治國の大策なり。陳壽の表に曰く、亮、危國を毗佐し、不賓を負阻す、然れども、其言を存錄するに、耻善遺あり、誠に是れ大晉光明、至德澤被、疆なく古より未だ之が倫あらざるなり、と。隋書に二十五卷といひ、唐書に二十四卷といふもの、皆是なるべし。然れども、散佚すでに久しく、現存するもの數種、ともに後人が斷篇零章を蒐錄せしものにして、依據するに足らず、その全きは前後出師の二表のみ。蘇東坡曰く、孔明出師の二表、簡にして且つ盡き、直にして肆ならず、大なるかな言や。伊訓・說命と相表裏し、秦漢以下、君に事ふるを以て悅となすものゝ、能く至るところに非ざるなり、と。安子順、之を後世李令伯の陳情表・韓文公、十二郎を祭るの文と並稱し、これを讀ん

て涙を墮さざるもの其人必ず不忠となせり。而して、その純然たる古文の氣格を具ふるは。滿腔の至情、乃ち然るものにして、乃ち、四六駢儷の虛飾に過ぎざるを悟了すべし。亮又梁甫吟あり、今傳ふるもの一首に過ぎざるも、亦た以て、その詩才を知るべし。

魏晉代興の際、首に鍾會あれども、その集、殘缺觀るに足らず。杜預の作中、完全なるは、左氏傳の序のみ。而して、當代の文豪は、斷じて陳壽を推さゞるべからず。

陳壽、字は承祚、巴西安漢の人。少にして學を好み、同郡の譙周に仕事し、仕宦して觀閣令史となる。宦人黄皓、專ら威權を弄し、大臣皆曲意之に附く。壽ひとり、之が爲に屈せず、是に由つて、屢ば譴黜せらる。父の喪に遭うて疾あり、碑をして藥を丸せしむ。客往いて之を觀、鄕黨以て貶議を爲す。蜀の平ぐに及び、是に坐して沈滯するもの累年。司空張華、その才を愛し、擧げて孝廉となし、佐著作郎に除し、出てゝ陽平令に補し、蜀相諸葛亮の集を選して之を奏し、著作郎に除し、本郡中正を領し魏吳蜀三國の志、凡そ六十五篇を選す。時人その善く事を敘し、良史の才あるを稱す。夏侯湛、時に魏書を著し、壽の作るところを見、便ち己の書を壞つて罷む。張華、深く之を善とし、謂つて曰く、常に晉書を以て相付すべきのみ、と。その時に重んぜらるゝこと、此の如し。或は曰く、丁儀・丁廙、魏に盛名あり、壽、その子に謂つて曰く、千斛の米を覓めて與へらるべし、尊公の爲に佳傳を作らむ、と。丁、之を與へず。竟に爲に傳を立てず。壽の父、馬謖の參軍たり、謖諸葛亮に誅せられ、壽の父、亦た坐して髡せらる。諸葛瞻又壽を輕んず。壽、亮の爲に傳を立て、將略は長ずるところに非ず、敵に應ずるの才なしといひ、瞻、惟だ書を工にして、名、その實に過ぐるを言ふ。議者此を以て之を少とす。張華、將に壽を擧げて中書郎となさむとす。荀勗、華を忌んで、壽を疾み、遂に吏部に諷し、壽を遷して、長廣太守となす。母の老を辭として就かず。杜預、將に鎭に之かむとし、復た武帝に薦め、黄散に補すべしといふ。是に由つて、御史治書を授けられ、母の憂を以て職を去る。母遺言して、洛陽に葬らしむ。壽、その志に遵ひしが、又母を以て歸葬せざるに坐し、竟に貶議せらるはじめ、譙周、壽に謂つて曰く、卿必ず才學を以て名を成さむも、損折せらるべし、亦た不幸に非ざるなり、宜しく、深く之を愼むべし、と。壽、こゝに至りて、再び凌辱せられしこと、皆周の言の如し。後數歲、起つて太子中庶子となりしが、未だ拜せず、元康中、病んで卒す。時に年六十五。梁州大中正尙書郎范頵等、上書し、その著三國志を採錄せむことを請ひ、武帝詔して、家に就いて其書を寫さしむ。壽、又古國志五十篇・益都耆舊傳十篇を撰し、餘の文章、當時並に世に傳へしといふ。

三國志六十五卷、その魏を以て紀となし、吳蜀を傳となせし如き、後人異論ありと雖も、當時の事情、亦た已むを得ざるに出でしものにして、咎むるに足らず。紀曉嵐、亦た之

を言へり。若し夫れ、書法に至りては、王通が「高簡にして法あり」といひし如く、明覈詳晰、事核文直、班固に比して、その下に在らず、往々にして、馬遷の壘を摩せむとす、まことに漢唐間、稀に見るの大史筆なり。

之に次いで、晉初には、摯虞の文章流別、批判文學の稍や成形せしものなれども、簡に過ぐるを以て、こゝに論ぜず。孫楚・束晳・夏侯湛の如き、詩賦文章の作あれども、特色なきを以て、こゝに省異し、直に當時の詩客に就いて、述ぶところあるを得む。

(七) 阮籍と嵇康

魏晉代興の際に方り、敢て建安七子の末流を汲まず、獨りその性情を陶寫し、幽思を發揚し、翹然崛起して、別に一家を爲すものを阮籍となす。籍は實に竹林七賢の一、尤も清談家の本色を見るべきものにして、身を亂世に全うせむが爲に、故らに狂態を恣にし、强いて自ら韜晦せしものなり。籍、字は嗣宗、陳留尉氏の人、瑀の子なり、容貌瓌傑、志氣宏放、性に任かせて不羈、或は戶を閉ぢて書を讀み、累月出でず。或は山水に登臨し、日を繼いで歸るを忘る。性酒を嗜み、能く嘯き、又善く琴を彈じ、その得意の時に當りては、忽ち形骸を忘る。時人多く之を癡といふ。唯だ族兄文業、每に之を嘆服し、以て己に勝れりとなす。籍、本と濟世の志あり。魏晉の際、天下多故、名士全きを得るもの少きを見、遂に世事に與らず、常に酣飲を以て事とす。鍾會、素より籍を惡み、數ば時事を以て問ひ、その可否に因つて、之を罪せむと欲す、皆酣醉を以て免るを得たり。又かつて步兵の厨營人、善く酒を釀し、三百斛を貯ふるものありと聞くや、求めて步兵校尉となり、職を去ると雖も、恒に府內に遊び、必す宴に與れりといふ。かくの如くして狂態百出、或は風前に犢鼻褌を暴して上巳の彩旗に代へ、或は酣醉六十日、人言を聞かず。又常に青白眼をなし、禮俗の士に對するに白眼を以てし、同氣の人に逢うては青眼をなす。頹唐自放、こゝに至りて極まれりといふべし。籍、かつて廣武の古戰場を見、浩嘆して曰く、時に英雄なく、豎子をして名を爲さしむと。その材器、想ふべきなり。惜いかな、時に合はず、纔に詩を以て傳ふるのみ。その作に係る詠懷八十二首、源を離騷に發し、資くるに小雅怨誹して亂れざるの旨を以てす。詠ずるところ、皆司馬氏簒奪の陰謀と魏の明帝の庸愚暗弱、奸雄の覬覦を啓きしとを傷むに在り。然れども、措辭婉曲にして、世を忍り俗を嫉むの語なく綣繾の情、自ら着色の外に在り、最も其妙を推す。古詩十九首以後の大文字、唯だ之あるのみ。唐代陳子昂の感遇詩三十八首・張九齡の感遇十二首・李白の古風五十九首、等、皆之を學びしものなり。籍の作、賦には東平・首陽・清志等あり、文には達莊論・大人先生傳等あり、ともに其志を觀るに足る。

阮籍に次いで、竹林の詞客たるもの、嵇康あり。字は叔夜、譙國銍の人、幼にして孤、身の長七尺八寸、風儀あり、形骸を土木にし、自ら藻飾せず、人以て、龍章鳳質、天質自然なるが如しとなす。資性恬靜にして欲寡く、大量あり、學は師受するところなけれども、博覽にして該通せざるなく、魏の宗室と婚し、中散太夫に拜せらる。康、固より老莊を好み、籍等と交り、その人となり、全く相似たりと雖も、鍾會を禮せざりしに因り、爲に讒せられて、獄に繫がる。その將に東市に刑せられむとするや、大學生三千人、請うて師となさむとせしも許されず。康、顧みて日影を見、琴を索めて彈じて曰く、廣陵散、今に於て絶ゆ、と。時に年四十。海内の士、之を聞いて、痛悼せざるものなし。康又詩を善くす。劉勰かつて之を論じ、善く二語を以て、評し盡せり。曰く、嵇志は清峻にして阮旨は遙深なり、と。之に次いで、鍾嶸は、峻直を以て嵇康の病なりとし、頗る淵雅の致を少くといへり。阮籍に比しては、やゝ下れり。その作、雜詩・幽憤等、最も名あり。その他、集中の傑作、琴賦・養生論・絶交書等、又觀るに足る。

七賢の徒、阮嵇以外、その作を傳へず。唯だ向秀は莊子を註せしといふ。而して、劉伶の酒德頌、今に傳誦せらる。方秋崖曰く、前輩文を以て名あるもの、多きに非ず、伯倫は只だ一篇の酒德、他の文なく、孤山處士の後世に傳ふる所以、僅に月香水影の兩句のみ、と。李格非、善く文を論ずるを以て名あり、之を以て諸葛亮の出師表・陶潛の歸去來・李令伯の乞養親表と並稱し、皆沛然として肺肝中より流出する如く、殊に斧鑿の痕を見ずといへり。その體、韵を押し、且つ頗る新意あるを多とすべし。

(八) 張傅潘陸の諸家

阮嵇二人、魏晉代興の際に當り、その時代は、比較的に早し。若し兩晉の詞人を求むれば、傅玄及び三張・二陸・兩潘・一左、蓋し其人なるべく、張華・張載・張協・陸機・陸雲・潘岳・潘尼・左思、即ち是れなり。この諸人、いづれも、賦と詩とを兼ね、一代の聲名を擅にしたるものなれども、左思を除いて、其他はいづれも同一の窠臼に陷り、之を鄴下の詞人に比すれば、その間、甚しき徑庭の存するを見る。

建安及び阮嵇二人を境界線として、その上、漢魏の詩は、主として意を造れるに反し、その下、兩晉以後の詩は、唯だ詞を造れり。換言すれば、前者は專ら内容を重んじ、後者は翻つて外形を貴ぶに至りしこと、是れのみ。漢の中葉、辭賦の腐敗と同じく、晉に於ては、五古の詩體、又こゝに頽墮の兆を見むとす。蓋し漢魏以前の詩は、患難流離の餘に成れるもの多く、兩晉以後の詩は、恬安娛樂の用に供するを主としたり。凡そ患難流離の際に成れるものは、自然の勢、必ず直に胸臆を抒寫して、復たその文字の如何を顧るに暇

あらず、純ら是れ一片肺腑中の語、その巧拙は、姑らく之を措き、生氣凛然人を感ずること必ず深し。これに反して、恬安娯樂の用に供するものは、唯だ文字を錬り、聲律を研き、肝を鏤め、肺を琢き、力めて精巧を以て人に勝たむことを求むるが故に、纖密なれども氣骨なく、秀整なれども精神に乏し。これ蓋し風氣の變遷に因つて詩格の升降を致せるものにして、實に古今その揆を一にす、この故に、たとひ大作手ありと雖も、亦た之を奈かむともするなし。一たび、西晉に此の如き傾向を顯はせし後、齊梁に至りて、愈よ甚しく、唐に至るまで、遂に挽回せられず、時代とともにその儘に降下せり。

諸家の傳、一二詳述するの煩に堪へざるを以て下に極めて簡略なる叙述を着けむ

傅玄、字は休奕、北地泥陽の人、少にして孤貧、博學にして善く文を屬し、性剛勁亮直、人の短を容るゝ能はず。晉に事へて侍中となり、奏効する毎に、或は日暮に値へば、白簡を捧げ、簪帶を整へ、竦踊して寢ねず、坐して旦を待てりといふ。玄、顯貴に及ぶも、著述を廢せず、傅子數十萬言を作る。また數ば武帝に上書して、時務を論ぜしことあり。而して、その詩に長ずるや、晉代宗廟の樂府、皆その手に出で、且つ頗る作に富む、然れども、聰穎の處、時に累句あり、却つて古詩に短、古樸なれども骨力に乏し。

張華、字は茂先、范陽方城の人、少時孤貧にして羊を牧す。同郡の盧欽、鄉人劉放、皆之を奇とし、阮籍亦た王佐の才となす。歷進して、尚書廣武縣侯となり、晉の儀禮憲章を制定し、詔誥又その手に成る。惠帝の世、荀勗これを忌み、出して持節都督幽州諸軍事となし、後遂に害に遭ふ。性人物を好み、後進を奬引して倦まず。陸機兄弟の如き、皆その惠を蒙るに因つて進む。その集、今存するもの、文極めて少く、詩最も多し。然れども、筆力高からず、凌空矯捷の致を少く。張載、字は孟陽、安平の人、劍閣の銘を以て名を知らる。傅玄、又その濠汜賦を賞し、車を以て之を迎へ、後、官して弘農太守となりしが、幾もなくして、亂を避け、病と稱し、家に歸つて復た出てず。その弟協、字は景陽、河間內史たり。永嘉の初、黃門侍郎に徵せられしも就かず。尤も詩を善くし、風流調達。二張の詩文、互に長短あり、景陽の文は兄に及ばず、孟陽の詩は弟に遜ると稱せらる。

陸機、字は士衡、吳郡の人、家、世、吳の名族たり、身の長七尺、聲、雷の如し。年二十、吳の滅ぶや、舊里に退居し、學を積むこと十年。太康の末、弟雲とともに洛に入る。成都王穎、表して平原內史となす。太安の初、後將軍河北大都督を假し、兵廿萬を率ゐて、長沙王を討つや、大に敗れ、爲に罪せられて斬らる。機、天才秀逸、辭藻宏麗、張華かつて之に謂つて曰く、人の文を爲る常に才なきを恨むも、子は更に其多きを患ふと。葛洪又その文を評し曰く、玄圃の積玉、夜光に非ざるはなきが如く、その弘麗妍贍、英鋭飄逸、亦た一代の絕たるか、

と。然れども、沈德潛が「意、博を逞うせむと欲して、胸に慧珠少く、筆又以て之を學ぐるに足らず、遂に間ま排偶の一家を出し、西京以來、空靈矯健の氣、復た存せず」といひ、士衡、名將の後を以て、閫を破り、家を忘れ、情に稱うて言ひ、必ず哀怨多く、乃ち詞旨敷淺、但だ塗澤に工、復た貴ぶに足らむや」といへる如く、通贍自ら足れども、絢綵力なし。機の弟雲、字は士龍、才理あり、少にして兄と名を齊うし、文章は及ばずと雖も、持論は之に過ぎ、世に二陸と稱す。官、清河内史に至り、機の敗るゝや、並に害せらる、今其集を觀るに、賦は遂に兄に及ばずと雖も、詩は正に正に伯仲し、その失、亦た偶ま相似たり。

潘岳、字は安仁、滎陽中牟の人、少にして才穎を以て稱せらる。後、才名世に冠たるに及び、衆に疾まれ、栖遲すること十年、出でゝ河陽令となる。奇才偃蹇、久しく志を得ず。後、給事黄門侍郎に遷る。性輕躁なれども、姿貌甚だ美、少時かつて彈を挾んで洛陽の道に出づるや、婦人之に遇ふもの、皆手を連ねて縈繞し、之に投ずるに果を以てし、果積んで車に滿つ。然れども、其行かつて立たず。賈謐に諂事し、賈后の爲に太子遹を謀殺するに與りしが如き、人品の汚劣なるを見るべく、末路亦た人に誣告せられて市に誅せらる。その賦は辭藻絶麗、その詩は、氣を以て勝ると稱せられ、敷布具さに饒きも、溫籍絶えて無く、その品、陸機の下に在り。

潘尼は、少にして清才あり、岳とともに文章を以て知られしが、性靜退、競はず、唯だ勤學著述を以て事となし、安身論を著し、以て守るところを明かにす。累進して著作郎となり、趙王倫の位を簒するや、去つて齊王冏に從ひ、その參軍となり、永興の末、中書令となる。時に三王戰爭、皇家多故、尼、職、顯要に居り、從容たるのみ、憂虞及ばずと雖も、而かも備さに艱難を嘗む。永興中、太常卿に遷り洛陽の沒せむとするや、鄉里に還らむとし、賊に遇うて、前むを得ず、病んで卒す。詩賦の作、諸子の中にありて最も劣る。

次に如上諸家の著作を擧げむに、傅子、もと百四十卷、今存するもの一卷、時弊に激して作り、政體を經綸し、儒教を存重するを以て主となし、論衡、昌言と相並ふべく、魏晉六朝の間、希に見るところなり。故に紀曉嵐は曰く、この書、論ずるところ、皆治道に關切にして、儒風を闡啓し、精意名言、往々にして在り、寶貴となすべきなり、と。詩は郊祀宗廟樂歌、無慮數十篇、雜詩亦た誦すべし。張華の賦は、鉅製少く、詩は勵志九首の如き、さすがに淺語なし。張載は濛汜賦・劍閣銘の外に七哀詩あり。張協は、七命の外に、雜詩十首あり。陸機は、々賦・豪士賦、最も觀るべく、短歌行・猛虎行の如き、眞に才多きを患ふといふに負かず。陸雲は、四言の古詩多く、しかも其意は稍や新穎。潘岳の賦には、閑居・懷舊・悼亡・寡婦・秋興あり、詩亦た悼亡の三首あり。潘尼は、洛水作等、わづかに存すべし。

張傅潘陸の諸家、固より是れ、得易からざるの才なれども、ともに時習の移すところとなるを免れず、況んや、此より下なるものをや。張茂先の詩は、古しへより兒女の情多くして風雲の氣少しと稱す。この一語、以て斷案となすべく、その雜詩の篇「朱火青無光、蘭膏坐自凝、重衾無暖氣、挾纊如懷冰」と云ふ如き、寒夜燈下に孤坐する神理を刻劃し盡せりと雖も、天然の致、空靈の妙、地を拂ふと云ふも、決して過言に非ず。又情詩の篇「巢居知風寒、穴處識陰雨」と云ふ如き、如何にも善く理想を極めたしかに名句と稱すべきに似たれども、之をその粉本たる漢末蔡邕の飲馬長城窟「枯桑知天風、海水知天寒」に比すれば、氣象の大小、語句の强弱、音節の高低、果して如何ぞや。傅休奕の詩は、妍媚宛轉の趣あり、しかも、ひとり氣骨の一點に於ては、全く講究せざりしに似たり。潘安仁は、貌を以て名あり、陸士衡は才を以て名あり、然れども、その專ら英華を煥發し膏澤を塗飾し、綵を剪つて花と爲し、絕えて生韵少きに至つては、諸家實に一轍に出づ。この體、一たび行はれて、建安の詩格、全く撕滅に歸せり。これ唐朝以前、律語の歷史に於て、最も注意すべき一大現象なり。

諸家の詩、略ぼ上に述べたるが如く、漢魏を崇拜する者の眼中より論定すれば、殆んど言ふに足らざれども、亦た必ずしも、棄つべからざるものあり。何となれば、詩は必ずしも氣骨にのみ偏すべからず、質直切實なるもの、獨り詩にして、華靡柔麗なるもの、詩に非ずといふの理、果して何處にかある。諸家亦た何ぞ嘗て詩人に非ざらむ、又何ぞ嘗て大家たらざらむ。六朝緣情綺語の一體、四人實に之が祖たり、唐代溫李新聲の一派、四人實に之が源たり。その他、後世詩人の排偶駢儷を以て奇巧を逞うし、新異を競ふもの、實に四人を以て模範と爲さゞるなし。善いかな、劉勰の言に曰く、奇を酌めども其眞を失はず、華を翫べども其實を墜さずむば、顧盼以て辭力を驅るべく、咳唾以て文致を窮むべし、と。東晉以後、六朝の詩を讀み、若しくは之を學ぶもの、宜しく、この數語を三復し以て眞訣に當つべきなり。

(九) 東晉の三詩傑

張傅潘陸、四家綺靡の音、一たび起つてより、雄健俊警の作、復た得べからず、詩格漸く卑下に趨き、殆んど底止するところを知らざらむとす。この時に方り、左太冲の挺拔劉越石の清剛、郭景純の豪儁あり、這般の風氣に浸潤せられず、漢魏を陶冶し、氣骨を烹鍊し、さながら空谷の跫音たり。予は、王漁洋に倣うて、之を東晉の三詩傑と呼ばむとす。

左思、字は太冲、貌寢にして口訥、辭藻壯麗、性交遊を好まず、唯だ閑居を以て事とす。かつて齊都賦を作り、一年にして成るや、復た三都を賦せむと欲し、思を構ふること十年、

門庭藩溷、皆筆紙を著け、一句を得れば即ち書す。賦成るや、豪貴の家、競うて傳寫し、洛陽の紙價、爲に貴きに至る。はじめ、陸機洛に入り、此賦を作らむと欲し、思が方に之を作るを聞き、掌を撫して笑ひ、又書を弟雲に與へて云ふ、この間、傖父ありて、三都賦を作らむと欲すと聞く、その成るを須つて、當に酒甕を覆ふべきのみ、とすでにして、其賦を觀るや、敷服して、加ふる能はずとなし、遂に筆を輟めたりといふ。三都の賦、妙は妙なれども、これを班固・張衡等に比すれば、固より及ばず、時すでに降るが故のみ。思をして重からしむるものは、斷じて詩に在り。ひとり思に於てのみならむや、晉人皆然り。謝靈運は「左太冲の賦、潘安仁の詩、古今に比なし」といひしが、これ紗燈と鳧鐘とを同一視したるものにして、且つ比擬不倫なるを免れず。その詩に就いては、鍾嶸謂ふ、陸機より野なりと雖も、潘岳よりも深し、と。亦た篤論に非ず。沈德潛曰く、太冲胸次高曠にして、筆力復た雄邁、漢魏を陶冶し、自ら偉詞を製す、故に是れ一代の作手、豈に潘陸輩の比埒するところならむや、と。この論、頗る肯綮に中れり。或は、その稍や粗に、村氣人を撲つを覺ゆといふも、斷じて可ならず。詠史・招隱の諸作、詞偉にして、格高く、優に千秋の絶唱たるべく、その自ら謂ゆる「振衣千仞岡、濯足萬里流」の二句、直に移して、その總評に充つべし。思の妹芬、亦た文思あり、武帝の貴嬪となり、賦詠少らずと稱す。

劉琨、字は越石、中山魏昌の人、年二十六にして司隷從事となり、石崇が金谷園中に賓客を引欵するに預り、文詠頗る當時に許さる。時に秘書監賈謐、朝政に參管し、京師の人、心を傾けざるなく、潘岳・陸機以下、皆之に事へ、琨亦た其間に在り、號して二十四友といふ。琨、官は侍中太尉幷幽薊三州諸軍都督に至り、志、常に晉室に存し、戎狄國家の恥を雪がむとし、しかも、謀遂に成らず、後、王敦の爲に殺さる。その詩、託意雄深、直に胸臆を攄べ、悲壯慷慨、頗る其人と爲りに類す。鍾嶸之を中品に置く、不滿の意あるものの如し。而して元遺山の論詩絶句に云ふ、曹劉坐嘯虎生風、四海無人角兩雄、可惜並州劉越石、不教橫槊建安中、と。その意、越石をして、建安の時に生れ、曹子建・劉公幹等と相並び、一たび、其才を角せしめざりしを恨むに在り、これ洵に越石の價値を知るもの、予は之に左袒せむと欲す。沈德潛曰く、越石英雄失路、萬緒悲涼、故に其詩、筆に隨ひ、哀音を傾吐して次なし、讀者何ぞ語句の間に於て之を求むるを得む、と。その作、重贈盧諶の一首の如き、之を證して餘あり。

郭璞、字は景純、聞喜の人、博學高才、詞賦に工なり、時に郭公といふものあり、卜筮に精しく、璞之に從つて遊び、青囊中の書を得たり。是に由つて、五行卜筮の術を聞知し、占驗甚だ多く、洞林・新林・卜韻・爾雅註數十篇を撰し、また三蒼・方言・山海經・楚辭を註し、詩賦數

十萬言、地を避けて江を過ぐ。東晉の元帝、之を重んじ、以て著作郎となす。王敦の反して病むや、璞をして、之を筮せしむ。璞曰く、明公事を起さば、禍必ず久しからず、と。敦大に怒つて曰く、卿の壽如何。璞曰く、命、今日中に盡きむ、と。敦之を斬る。その死や、まことに慘といふべし。璞の詩に於けるや、建安以後、稀に觀るところなり。鍾嶸曰く、潘岳を憲章し、文體相輝き、彪炳翫ぶべく、はじめて、永嘉平淡の體を變ず、故に中興第一と稱し、翰林以て詩の首となす。但だ游仙の作、辭に慷慨多く、玄宗に乖遠す、乃ち是れ坎壈詠懷、列仙の趣に非ざるなり、と。璞を以て中興第一となすは可なれども、之を以て潘岳を學ぶものとなし、又游仙の題意に乖くを云々するは、斷じて非なり。蓋し晉の中葉、江左偏安の後、老莊虛無の學、大に行はれ、詩人亦皆玄風を宗とせざるはなく、潘陸華麗の風、こゝに又一變して、浮誕散漫の一路に入り、鮮明緊健、能く凡俗を脱すと雖も、その辭趣、大抵一揆に出て、虛玄の旨に惑溺せざるもの少し。ひとり景純、獨かに之と撰を異にす。その游仙の詩十四章、名は游仙と云ふと雖も、實は阮籍の詠懷・左思の詠史と同意にして、千古に並傳すべきものなり。沈德潛曰く、游仙の詩、本と託あつて言ふ、坎壈詠懷は、その本旨なり、鍾嶸、その列仙の趣少きを貶するは、謬れり、と。おもふに、その之を以て題を命ぜし所以、當時の弊風を矯正せむとし、故らに襲用せしものならむのみ。かの「左挹浮邱袖、右拍洪厓肩、借問蜉蝣輩、寧知龜鶴年」といふ如き高潔なる詩想は、古今獨歩を推すべく、中興第一の稱、決して過譽に非ず。

凡そ魏晉六朝の作、泯滅すでに久しく、隋志聊か之を存錄するも、その今に傳ふるものは、蓋し十の一二。その以外のものは、全く考ふべからず。されば、晉代の文人詞客にして、晉書文苑傳に見ゆるもの、なほ他に應貞・成公綏・趙思・鄒湛・裴據・褚陶・王沈・張翰・庾闡・曹毘・李充・袁宏・伏滔・羅含・顧愷之・郭澄之あり、その集の存するもの、傅咸・王羲之・王獻之・孫綽あり。その作、又或は史に載せ、或は文選に見ゆと雖も、すべて、省略に從ひ、次に陶淵明を論じ、以て魏晉文學の殿後となさむ。

（一〇）陶淵明

魏晉の詩、始に綺靡豐褥となり、次に浮誕虛玄となり、その變、すでに極まり、復た變ずべきなく、三詩傑の力を以てして、頹瀾を既倒に廻す能はず、こゝに於てか、天は特に一大偉人を下し、晉詩をして、百代の重きをなさしむ、これを陶淵明となす。

陶淵明、字は元亮、或は云ふ、潛字は淵明、潯陽柴桑の人。曾祖侃、晉の大司馬たり。淵明、少にして、高趣あり、博學にして、善く文を屬し、穎脫不群、眞に任かせて自得し、かつて五柳先生傳を著して、自ら況す。親老ひ家貧なるや、起つて、州の祭酒となりしも、吏職に堪へ

ず、少日自ら解いて歸る。州、主簿に召せども、就かず。躬耕自ら資し、遂に羸疾を抱く。江州刺史檀道濟、往いて候し、之を起さむとす、應ぜず。後、鎮軍建武參軍となり、親朋に謂つて曰く、聊か絃歌して、三徑の資となさむとす、可ならむか、と。執事者、之を聞いて、彭澤令となす。歳終、郡、督郵を遣して、縣に至るに會し、吏請うて曰く、束帶して、これを見るべし、と。淵明歎じて曰く、我豈に五斗米の爲に、腰を折つて、鄕里の小兒に向はむや、と。即日綬を解いて職を去り、歸去來を賦す。著作郎に徵されしが、就かず、その性、頗る淡、音律を解せざるも、無絃琴一張を蓄へ、酒適する毎に、輒ち撫弄して、其意を寄す、貴賤之を造るもの酒あれば、輒ち設く。淵明、もし先づ醉へば、便ち客に語るらく、我醉うて眠らむと欲す、卿去るべし、と。その眞率、かくの如し。自ら曾祖晉世の宰輔たりしを以て、身を後世に屈するを耻ぢ、宋の高祖、王業漸く隆なるより、復た仕へず。元嘉四年、將に復た徵命せむとするや、會ま卒す、時に年六十三、世に靖節先生と號す。

淵明の少時、固より英氣に富みて、功名に意ありしと雖も、宗社の末運は、之をして一代の隱逸たるに終らしめたり。熟ら之を考ふるに、彼は情の人なるが故に、始に悲觀せり。家貧にして給ぜず、乞食の詩を賦せしことすらあり、耕植以て飢を支ふるに足らず、加ふるに、幼稚室に滿ち、餅に儲粟なく、生生資するところ、其術を見ず、終に微官を求むるの止むを得ざるに至り、しかも、之を終へずして止む。すでに、名家の胄裔を以てして、時に遇はず、こゝに於て、「貧士」を歌ひ、「士不遇」を賦し、伯牙と莊周とを呼び、此士難再得、吾行欲何求と吟ぜしことあり。之に次いで、晉主恭帝飲酒掩殺の悲劇は、如何に遺民の心を傷ましめけむ、述酒の詩、隱語を以て暗寫し、意を寓するところ、慢奥たり。彼れ是に至つて、全く意を世に得ざるなり。乃ち荆軻を詠じて、千載有餘情といひ、或は商山の四皓を想ひ、讀史九章に微旨を洩らし、遂に饑食首陽薇、渴飲易水流といふに至る。亡國の遺民は、穢土を泣けり。而して、彼は、如何にして安心立命を求めたる。

こゝに於て、彼も亦た淸談家の如く、老莊の哲理を取り、善く其旨に通ぜしが、その悟徹するところの深き、到底曲士輩の比に非ず。乃ち現世を逆旅と呼び、死を本宅に歸るといひ、死後の安樂界を想像しては、得失不復知、是非安能覺、千秋萬歳後、誰知榮與辱といひ、その處世の法を說くや、縱浪大化中、不喜亦不懼、應盡便須盡、無復獨多慮と歌ひ、輓歌に擬しては、脫略の趣を曲盡し、有形有爲の沈濁界を脫離し、無形無爲の自由界に參透し、天地と並び、神明とともに往く。これ淸談家の夢視せざるところ、彼が樂天主義の基礎に外ならず。

樂天主義の淵明は、支那に於ける田園詩人の開祖たりき。彼は世外の閑地に肥遯し

高尚なる趣味を以て天然を察し、溫かなる感情を以て之と同化せり。そも田園は、人界の最も平穩なるところにして、天然の粹美を靜觀すべき好個の樂園（パラダイス）なり。若し之を以て、趣に乏しといはゞ、蕭散淡遠の美たるを解するの趣味なく、徒に變化を好み、遂に幽妙を悟り得ざる癡呆子のみ。凡そ天然に對する愛は、人類の心意に存する善の不變の表彰にして、之より受くべき感情は、誠實にして且つ神聖なり。個中の消息は、東籬採菊の一詩に於て遺憾なく表現されたり。曰く、採菊東籬下、悠然見南山、山氣日夕佳、飛鳥相與還、此中有眞意、欲辯已忘言、と。

淵明は、詩人たるに必要なる豐富なる想像力を有せり。その上古を追想するや、桃花源といへる仙境は、彼れ一家のユートピヤとして描寫されたり。而して是れ實に南方文學の原始的理想を其儘に取り來りしものにして、老子の篇末に見え、莊子の胠篋篇に見えしものと異なるなしと雖も、かばかり一層現實的に構成せしは、その想像力の結果に非ずして何ぞ。

要するに、淵明の樂天主義は、厭世より一轉し、人生を疎外し、宇宙と契合せむと欲せしものなり。然れども、情の人は、あくまで眞摯にして、遂に現世を忘るゝ能はず。たとへば、風雨陰寒の夜、創瘢奇痛を生じ、終夜眠るを許さゞるが如く、その念、一たび國家に還及するとき、悲哀凄凉、自ら堪へず、窮通靡攸慮、顧額由化遷、撫己有深懷、履運增慨然と歌ひ、乃ち去つて醉鄉に逍遙し、何以稱我情、濁酒且自陶、千歲非所知、聊以永今朝と吟ずるに至る。「彼れ偃蹇世と接するを欲せず、然れども、猶ほ其心を平かにする能はず、或は事物是非相感發し、酒に托して逃る」といひし韓愈の言、穿てりといふべし。夫れ智と情と常に相戰ふもの、未だ全く悟徹せず、こゝに於てか、常に詩あり。かの停雲の友を思ひ、時運の分に安んずるをいふが如き、善く性情を陶寫したるを見るべし。

予は、淵明の人物及び思想を論じ、こゝに其詩が一の主義を以て貫かれ、理想のほのめかされたるものあるを斷言す。彼は、支那に於ける最始の詩人なり。その詩百五十首に滿たず、數に於て、むしろ貧なりと雖も、文學の價値は、固より、質に在つて量に在らず。彼は光風霽月の懷を以て、山川淸淑の氣を鍾め、邱壑煙霞の眞情と妙趣とを抒寫せむとす、故にその宗とするところは、天然に在り、詩材を求むる、夐かに前人と異なれり。かくの如くして、天機に任かせ、興會を主とし、筆、意に隨つて下り、一點の俗氣なく、一個の廢字なく、全く澁滯窘束の苦を離れ、自在に文字を運旋し、巧を弄し奇を衒ふの失なく、たとへば、大匠の斧斤を運らす如く、繩削を煩はさずして自ら規矩に合し、一も間然するところなきは、彼が獨得の擅場を推すに足るべし。鍾嶸の詩品、これを中位に置く、後

人動もすれば、之に慊らず。然れども、予輩は、魏晋の全詩を見ざれば、今日之を驗するに由なく、且つ淵明の詩たるや、固より色澤臭味の尋ぬべきなく、梁人の嗜好と合はざるが故なるを知らざるべからず。しかも更に之を稱して「古隱逸詩人之宗也」といふに至りては、蠡、亦た妄人と爲すべからず。次に體制上より立論すれば、その四言は、優に高致あり、直に三百篇の後に追隨すべく、五言は體整にして意洽ねく、ともに古體の上乘なり。東坡は、「吾、詩人に於て好むところなきも、獨り淵明の詩を好む。淵明、詩を作ること多からず、然れども、質にして實は綺、癯にして實は腴、曹劉鮑謝李杜の諸人より、皆及ぶなきなり」といひ、黄山谷は「謝康樂・庾義城の詩、鑪錘の功、餘力を遺さず、然れども、未だ彭澤數仞の牆を窺ふ能はざるもの、二子、俗人その工拙を贊毀するに意あり、淵明は直に寄す、これを持して淵明を論ずる、亦た以て、その關鍵を知るべきなり」といひ、その他、古今諸家の評語、一々擧げず。要するに、淵明は六朝第一の人物、從つて其詩も亦た前に古人なく、後に來者なし、唐代王孟韋柳の諸家、才學を以て、その風神を模倣し、僅に其性の近きところを得て罷み、しかも遂に天籟と人籟との別あり、その樸質、或は及ぶべし、その神奇は終に及ぶべからず。

淵明の詩、特に選を施すべからず。而して、賦には、感士不遇・閒情あり、又古文に長じ、一

縷の命脈を衰微の日に維持す。その功、尤も偉なり。歸去來辭の如き、歐陽修、かつて激賞して、「晋に文章なし、唯だ淵明歸去來辭一篇のみ」といへり。桃花源記・五柳先生傳・孟府君傳及び疏・祭文等、皆觀るべし。

第三　江左文學

(一)　佛教の影響

吳晉宋齊梁陳、相繼いで江左に國し、普通に六朝と稱すと雖も、こゝは、便宜上、宋齊以下謂ゆる南朝を稱して江左と呼ばむとす。この間、思想界に特異とするところは、佛教の流行とその影響とに在り。兩晉の清談、或は高人達士の玩弄物たるに適すと雖も、老莊虛無の說、專ら退嬰主義を旨とし、一般の教義となすべからず。佛教の之に代る、豈に故なしとせむや。他なし、大なる宗教は、殆んど根柢より一國の民心を刷新し得べければなり。

佛教の影響は非常なりき。淺近膚薄なる老莊虛無主義は、こゝに消滅するの止むを得ざるに至り、道教中の或者は、佛者と爭論を試みしも、全く失敗せり。かくの如くして、佛教の感化は、思想界に及び、遂に文辭の上に隱見するに至る。周顒・劉善經・高侯詠・王斌を經、梁の沈約に至りて、はじめて大成したる四聲譜の如きは、實に悉曇聲韵の學より起りしものにして、その作に係る懺悔の文の如きは、王巾の頭陀寺碑文とともに、佛教崇信の念、頗る著しきを表示するものなり。その他、六朝文士の制作、浮屠氏の分子を含まざるもの、幾んど稀に、その例、一一こゝに擧ぐるの煩なるに堪へず。これより先、廬山東林寺の慧遠が、山西巖下般若臺精舍に創めたる白蓮社は、緇素百廿三人を集めたるものにして、その間、聲譽高きもの、十八賢の稱あり。謝靈運、一時の才學を以て、江左の冠となり、才を負ひ、物に傲りたるも、猶ほ慧遠を見れば、容を改め、敬を致し、頻にその社中の人たらむを欲し、しかも得ざりしといふ。虎溪三笑は、世なほ之を傳へ、その交るところの文士、皆一時の選、陶淵明の如き、亦た數ば招致せられたるも、常に反麾して之を謝せりといふ。知るを要す、佛教は、當初善く文士輩に慰安を與へ、又その皷吹の力により て愈よ盛行に赴きしを。

佛教流布の結果は、多くの場合に、厭世の動機を與ふれども、深邃高尙なる教理は、容易に凡衆に解知せられず。こゝに於てか、一轉して、現世快樂主義に入らむとす。而して、六朝の間、這般の傾向を激成せしに就いては、他に又頗る注意すべき事あり。顧みれば、漢魏以後、思想紛亂の根本的原因は、その一面に於て、矛盾せる儒道二教の衝突に歸すべし。而して、この矛盾を調和するに有力なるものは、實に佛教に外ならず。蓋し佛教は、數ば言へる如く、南方思想に近接せしものにして、その初、相輔相助の緊密なる關係を有したりしが、佛教大乘の思想は、敢て現世を否定せざるを以て、飜つて、儒教と契合し

易き性質ありこゝに於て、佛教は、漸を以て、支那化し、來世を論ぜむよりは、むしろ現世を究め、この肉身を如何にすべきかといふ問題に逢着し、厭世教は、一變して、樂天教を形成するに至り、儒佛二教は、互に讓歩し、佛教の倫理觀は、未だ十分ならず、且つ到底漢族の特性に適合せざるを以て、儒教を認許し、自ら退いて、形而上學的もしくは神學的方面に限りしと同時に、儒教は、佛教の流布を公認し、その宗教的儀式を葬祭に行ふを許したり。佛教の基礎、こゝに於て、愈よ固く、その流行の結果として、寺を建つるに輪奐の美を窮め、佛を飾るに五彩を以てし、斯世からなる極樂淨土に、五官の快感を受け、以て未來の冥福を求めむとし、同時に又印度の文化を傳へて、之を融會するに至れり。六朝亂離の間、詩歌音樂建築等、諸種藝術の興隆を見る、亦た自然の勢のみ。然れども、注意すべきは、均しく現世快樂主義といふも、六朝の淫柔は、遂に西漢の豪奢に似ざるの一事にして要するに、山水佳麗なる江南風氣の感化に外ならず。されば、その文字の如きも、奢華侈靡、後には愈よ纖巧となり、やがて極微となりぬ。

佛教の流布は、自然の勢、佛典飜譯の氣運を促しぬ。はじめ、後漢明帝の時、迦葉摩騰竺法蘭の二人、優塡王、造るところの佛像及び四十二章經を携へ、遠く西域より來り、洛陽に入るや、明帝之を迎へて、白馬寺に居らしめ、梵經を飜譯して、萬民に示さしむ。これ、その權輿なり。漢末佛教の飜譯、すべて三百部、少しと爲さず。爾後、この業、決して絶ゆることなく、卷數亦た漸を以て增加せしが、次いで、後秦の姚興に至れば、龜茲國の沙門鳩摩羅什を尊敬して、國師となし、經論を譯さしめ、僧尼を度すること數千萬。而して前後秦の兩朝、譯出せしところの經論は、三藏百餘卷の多きに達し、梁の武帝、華林園中に於て總集せし經典、凡そ五千四百卷、元魏の孝文帝の時、又新に一千餘卷を增し、唐の太宗の世、玄奘の出づるや、現存せる重要の經論は、殆んど全部を擧げて、飜譯され了んぬ。されば、佛經の飜譯は、全く六朝間の大事業にして、前後その比なきものといふべし。この間、偶ま文章衰廢の時に當りしが、佛經の譯文は、達意を主として、隨意に句勢語法を變化し、絶えて彫飾を施さず、その中、梵語を原音の儘に漢字に寫して、文中に挿入せしは、最も特異とするところにして、後に之を詩文に移用し、因襲の餘、毫も怪むところなかりし如きは、文學上、語彙の豐富を致せし所以にして、當初に在りては、英斷と大膽と、兩つながら、推稱すべく、たしかに注意を値すべき大事變といはざるべからず。

江左の文章、專ら華藻を事とすること、魏晉に比して、更に甚しく、文は駢儷の工に過ぎ、賦は靡麗の技に失し、詩も亦た自ら之に染みて、多く彫繪を事とし、整比に拘泥し、技工愈よ細緻となり、遂に對偶排比の端を開き、四聲八病の說起るに及びて、愈よ甚しこと

れを要するに、當代の文學は、散文と律語とを問はず、妖艶輕浮、その詞は輕儉に失し、その情は哀思多く、幾んど亡國の音を聽くが如く、南風長く競はざりしもの、自ら其故なくむばあらず。加ふるに、梁陳の間、君臣遊樂半壁の江山に據つて、一時の偷安を貪り、かつて百年の大計を爲すものなく、風俗頽廢、性情日に卑く、淫猥習をなし、愈よ之を助成せり。されば、華過ぎて實少きは、其弊にして、その極、鋪敘敷陳、千篇一律、絶えて變化なく、動もすれば、人をして厭嫌の念を起すに至らしむ。李太白が自從建安來、綺麗不足珍といひしもの、以て其證となすべし。然れども、その間、自ら風氣の先となり、後代に典型を遺せしもの亦た時に之なきに非ざれば、固より一概して之を棄つすべからず。かくて、物極まれば復た變じ、梁陳の後、隋の天下を統一するや、氣運こゝに革まり、唐に至りては、文質彬々、復た一時の盛を觀るを得たりき。

江左の文人詞客、史に見ゆるもの、固より多く、盡く之を收むべからざるを以て、こゝに特に其尤を拔き、小傳を揭げ、其作の一斑を示すことゝなさむ。唯だ風氣の遷徙に就いては、決して、之を忽にせず、聊か勢の趁くところを審にするを期す、これ予輩が本志に外ならず。

(二) 謝顏鮑の三家

詩は魏晉を經、宋に至つて一變せり。他なし、性情愈よ隱れ、聲色大に開け、形式的方面に注意したるの極、修辭的技工、特に發達したるの謂のみ。古人が「詩は、宋より一大變す、氣變じて韶かに、色變じて麗しく、體變じて整ひ、句變じて琢けり。蓋し古に於て漸く遠くして、律に於て漸く開けたるなり」といふは、頗る肯綮に中るの言を推すべく、王世懋が「古詩、兩漢以來、曹子建出てゝ、始めて宏肆となり、漸く情態を生ず、これ一變なり。これより、作者多く史語を入る、然れども、經語を入るゝこと能はず。謝靈運出でゝ、易辭莊語、用を爲さゞるなく、剪裁の妙、千古宗と爲す、又一變なり。中間何庾工を加へ、沈宋麗を增し、變態未だ極まらず、七言なほ閒雅を以て致となす」といへるは、更に切實なり。要するに、宋代謝靈運出てゝより、建安以後の文詩、又面目を革めしなり。

謝靈運は、陳郡陽夏の人。少にして學を好み、博く群書を覽、文章の美、江左逮ぶなしと稱せられ、康樂侯に襲封し、邑二千戶を食む。その性、豪奢を喜び、車服鮮麗、衣裳器物、多く舊制を改む。人と爲り、偏激にして、多く體度を愆り、志を得ざるを以て、常に憤志を懷き、終に族を以て東歸し、游娛宴集、夜を以て晝に繼ぐ。性、尤も山澤の游を喜び、從者數百人、木を伐り、徑を開き、その間に嘯傲して詩を賦す。百姓驚擾、或はその異志あるを疑ふものあり。その後、臨川の內史となるや、有司之を糾して收めむとす。靈運、兵を起して逃避

し、詩を作つて曰く。韓亡子房奮、秦帝魯連耻、と。幾もなくして、追討して擒にせられ、廣州に徙され、すでにして棄市せらる。靈運の一生、すでに、かくの如く、固より取るに足らざれども、一種の別才、亦た能く天然の詩人たりき。

その詩、之を一概して、彫章琢句、詞彩絢爛、殆んど目を眩せむとす。鍾嶸曰く、興多く、才高く、寓目即ち書す、内に乏思なく、外に遺物なし、その繁富、宜なるかな。然れども、名章迥句、處々に間起し、麗典新聲、絡繹として奔會す。たとへば、青松灌木を拔き、白玉塵沙に映ずるが如く、未だ高潔を貶するに足らざるなり」と。その詩は、慘澹たる經營に成り、洗錬の後、彫琢の痕を止めざるところ、偶ま其妙を見るべきなり。沈德潛、乃ち曰く、前人、康樂の詩を評して、東海帆を揚げ、風日流和なりといへり、これ甚だ允ならず、大約經營慘澹、深を鉤し、隱を索め、しかも、一に自然に歸す。山水閒適、時に理趣に遇ひ、匠心獨り運らして、規少し、さきには建安諸公、すべて屑しとするところに非ず、況んや、士衡以下をや、と。修辭を生命となし、しかも斬新の構想、比較的に少きは、主として時勢の影響と人物の性癖とに因らずむばあらず。

康樂の詩、完璧に乏しと雖も、名句は固より算なし。白雲抱幽石、綠篠媚清漣の如き、着語何ぞ悠曠なる。猿鳴誠知曙、谷幽光未顯、巖下雲方合、花上露猶泫の如き、何等の清芬。その他、池塘生春草、園柳變鳴禽といひ、林壑斂暝色、雲霞收夕霏といひ、密林含餘清、遠峰隱半規といひ、雲日相輝映、空水共澄鮮といひ、野曠沙岸淨、天高秋日明といひ、春晩綠野秀、巖高白雲屯といふ如き、洵に必傳を推すべし。その詩、對句に富み、往々にして首尾を一貫するものあり、初唐沈宋律詩の源、正に此に在り、後に沈約四聲八病を唱ふるに及び、自然に發達して、現時見るところの定式を確立するに至る。

康樂は、陶淵明に次ぐ天然の詩人なり。然れども、兩者自ら別あり。陶詩は主觀的にして、自然を含下し、及ぶべからざるところ、眞に在り、厚に在り。謝詩は客觀的にして、追琢自然に返り、及ぶべからざるところ、新に在り、俊に在り。千古並稱、固より不可となさゞれども、陶詩の高きところは、排せざるに在り、謝詩の勝れたるところは、排に在り、終に一籌を遜る。康樂、亦た文を善くし、辨宗論、佛經諸贊等、集中の金玉と稱せらる。

靈運の族兄に謝瞻あり、ともに盛名あり。族弟に謝惠連あり、當時小謝と稱す。十歲にして能く文を屬し頗る盛名あり。靈運、その新文を見、毎に曰く、張華重ねて生るるも、尚ふる能はず、と。然れども、一味鏤刻、自然の致を失ふを惜む。唯た秋懷擣衣等、誦すべくその他、諸謝名あるもの、亦た少からず。

謝靈運と同時に、顏延之あり、顏謝と稱す。その人と爲り、偏激にして、酒過あれども、肆

意直言、身を居ゝこと清約、財利を營まず。布衣蔬食、郊野に獨酌し、その適意の時、傍に人なきが如し。はじめ、步兵校尉となりしが、劉湛・殷景仁等專ら要任に當るに不平にして、毎に權要を犯し、後に秘書監光祿勳太常となり、孝建三年卒す、年七十三。蓋しその人格、靈運と頗る相似たれども、幾分高きものあり、然れども、詩は却つて相及はず。湯惠休、かつて二家を評して曰く、謝は芙蓉水より出づる如く、顏は錯彩鏤金の如し、と。之に次いて、其失は、鍾嶸が、體裁綺密、情喩淵深、却つて虛散なり、一句一字、喜んで古事を用ひて、彌よ拘束せらる」といひし如く、塡綴の工、往々にして、眞氣を傷けむとす。たゞ其作に係る五君詠・秋胡行の如き清眞高逸の趣を見る。文には、庭誥尤も觀るべし。

謝顏二人の間に立つものを鮑照となす、字は明遠、東海の人、文辭贍逸、元嘉中、河濟ともに清みしに因り、河清頌を爲る、その敘、甚だ工。文帝に事へて、中書舍人となる。帝、文章を好み、他人能く及ぶものなしとなすや、照、その旨を悟り、文章を爲るに、鄙言累句を多くせり、といふ。後、亂兵の爲に殺さる。その文は、蕪城賦・河清頌等あり。詩、殊に高妙、その長は、樂府に在り。五丁山を鑿つて開くが如く、人世未だ有らざるところ、後、太白往々にして之に效ふ」と稱せらる。代東門行・代出自薊門行・行路難の如き、皆傑出を推す。次いで、その五言は、彫琢の處、謝と相似て、自然の趣、少しく足らずと雖も、高きものは、遠く機雲に軼し、上は操植を追ふ。杜甫、かつて俊逸の二字を以て之に許す、公論移易すべからず。若し其失を求むれば、筆力矯健、之ありと雖も、動もすれば、巧を尙ぶの極、險俗の弊に陷らむとするに在り。當時顏謝並稱すと雖も、謝鮑二人、實に其冠たり。

その他、宋人にして、集を存するもの、何承天・傅亮・袁淑等あり、孝武帝・南平王鑠・鮑令暉・吳邁遠・王微・王僧達・沈慶・陸凱・湯惠休等、間ま其作を傳ふ。而して、范曄の後漢書、この間の大史筆と稱すれども、佻巧に過ぐるところ、偶ま以て時弊を見るべし。

(三) 謝朓及び齊の諸家

齊の永嘉體は、之を宋の元嘉體に比して、綺靡は纖巧となり、麗は艶となり、色澤益す濃にして、性情の眞、却つて遠からむとす。然れども、その傳ふべきもの、謝朓あり、

謝朓、字は玄暉、陳郡陽夏の人、かつて宣城太守となりしが、故に、世に謝宣城と稱す。建武中、尙書吏部郎に遷り後、始光王遙光等の爲に構へられ、三十六にして獄死す。その詩、後人の贊稱を得たるは、蓋し稀に見るところ。梁の武帝、特に之を重んじ、三日讀まざれば口の臭きを覺ゆといひ、簡文帝は之を推して、文章の冠冕といひ、沈約は、二百年來、この詩なしといひ、李白の仙才、眼中古人なきに拘らず、ひとり之に就いては、三四稱服して措かず、蓬萊文章建安骨、中間小謝又清發といひ、解道澄江淨如練、令人長憶謝玄暉と

いふに至る。沈德潛又曰く、玄暉靈心秀工、名句を誦する毎に、淵然冷然、筆墨の中、筆墨の外、別に一段の深情妙理あるを覺ゆ、と。その詩、專ら發端に工にして、起筆千鈞の力あり、唐代岑參・高適諸人の規撫するところ、自ら法門を開くと雖も、往々にして、首尾貫徹せず、龍頭蛇尾の誚を貽すものあり。鍾嶸は、意鋭にして才弱といへり。試に之を康樂に比するに、能く清なるも、厚なる能はず、詩品或は其下に在り。その作るところ、玆山亘百里、合沓與雲齊といひ、大江流日夜、客心悲未央といひ、江路西南永、歸流東北鶩といひ、洞庭張樂地、瀟湘帝子遊といひ、餘雪映青山、寒霧開白日といふ如き、皆誦すべきなり。

謝朓と同時に王融あり、好んで艶句を作り、刻飾塗澤、聲色を以て人に勝たむことを務む。然れども、神氣に乏しく、觀るべきもの、多からず流水曲の如き、わづかに稱すべし。文には曲水詩序、巧麗を以て稱せらる、實に王勃滕王閣序の粉本たり。

謝詩に對して、齊代文章の秀を以て傳ふべきものを孔稚圭となす。字は德璋、會稽山陰の人、少にして學に渉り、美譽あり。外兄張融と情趣相得、又王思遠・何默と欵交して、世務を樂まず。居宅幽雅、山水の間に營み、几に憑つて獨坐し、傍に雜事なく、門庭の內、草萊剪らず、中に蛙鳴あり。官、太子參車事散騎常侍に至る。かつて、汝南の周顒、鍾山に隱れしが、後、詔に應じ、出てゝ山陰令となり、此山を經るや、稚圭、北山移文を作つて、之を却く。歸震川、評して曰く、此等の文字活潑、畫工景を描いて眞切なるが如く、美女情を傳へて婉媚なるが如く、眞に一世を驚倒せしむ、と。その中段、高霞孤映、明月獨舉、青松落陰、白雪維侶の數語は、王安石、最も喜んで誦せしといふ。四六の妙、正に此に極まる。然れども、その頗る彫琢に過ぎたるところ、偶ま以て時尙を窺ふに足るべし。

(四) 梁陳の作家

梁の文學に於けるや、江左第一となす。上に武帝・文帝・元帝あり、昭明太子は文選を著し、劉勰は文心雕龍を作り、鍾嶸は詩品を撰び、ともに六朝文學を品隲し、その精華を煥發せり。その朝位に在るものは、沈約・江淹・任昉、並に文采妙絕、然れども、鏤刻の工、愈よ甚しく、渾厚の意に乏し。況んや、沈は聲律に拘はり、江は模擬を事としたるに於てをや。詩の變、將に極まらむとす。顧みれば、東晉の末、陶淵明あり、次いで兩謝を出せしと雖も、文章宮闈に入りし後は、自然の勢、再び潘陸綺靡の故習に歸れり。

梁の武帝、少くして學に篤く、儒玄に洞達し、萬機の間、手に卷を輟めず、晩年に及びては、正法を信じて、梵典に耽り、亦た頗る造詣するところあり、古しへの人君、恭儉莊敬、藝能博學、帝の如きは、蓋し稀なり。梁の君臣、文學の才多きは、全くその餘澤、之を然らしめしのみ。その詩、風華を以て勝ち、なほ幾分渾厚の處あり、西洲曲・河中之水歌の如き、とも

に傑作と稱するに足るべく、宛轉たる聲調、初唐諸家、刻苦模して止まざるところなり。

昭明太子、名は統、字は德施、武帝の長子なり。天監五年、立つて太子となる。性仁孝にして寛和、能く衆を容れ、常に才學の士を引き納れて、賞愛倦むことなく、篇籍を討論し、古今を商搉して、繼ぐに文章著述を以てす。東宮の藏書、殆んど三萬卷、名才並び集まる、晉宋以來、未だ之あらず。大通三年、三十一にして薨ず。かつて遠く周秦以來の雜文を編して文選といひ、大に時に行はる。その詩文、亦た甚だ美。後に簡文帝、躬らその遺稿を編次し、序を作つて、その十四德を頌す、まことに翩々たる濁世の佳公子たるに近し。

簡文帝、好んで艶曲を作つてより、江左之に化し、因つて宮體の目ありその朱顏半已醉、微笑隱香屏といふもの、以て其詩を品すべし。沈德潛曰く、詩、蕭梁に至つて、君臣上下、唯だ艶情を以て娛となし、溫柔敦厚の旨を失ひ、漢魏の遺音、蕩然として地を掃ふと。溫柔敦厚、果して詩の本領なりや否やは、姑らく之を措き、格力愈よ卑きは、爭ふべからざる事實なり。その臨高臺に、草樹無參差、山河同一色といふ如き、神遠く語警、まことに稀に見るところ、登高の神理を極盡せしに庶幾しと雖も、之を後世杜甫の儕視但一氣、焉能辨皇州に比すれば、殆んど言ふに足らず。元帝、その人、取るに足らず。しかも、著すところの金樓子、雜家の流なれども文格綺靡、又孝德傳・忠臣傳あり。詩文雜著、亦た多し。

武帝時代、名あるものを沈約・江淹・范雲・任昉の四家となす。概ね前朝の遺臣にして、勝國に事へしものなり。而して、沈約の江左に於けるや、欝然たる大家なり。約、字は休文、吳興武康の人、幼にして孤貧、篤志學を好み、晝夜倦まず、母、その勞を以て疾を生ぜむことを恐れ、常に油を減じて火を滅す。梁に事へて、官、左光祿大夫侍中中少傅に至る。性、酒を飲まず、嗜欲亦た甚だ少く、居處儉素、宅を東田に立て、郊阜を囑望し、かつて郊居賦を作つて其懷を述ぶ。卒するとき、年七十三、謚して隱といふ。著作尤も多く、詩文偏長なし。宋書は、范曄の後漢書に及ばず、その史筆緩弱なれども、該詳富贍、往々にして觀るべきものあり。其他の文は、懺悔文、最も名あり。唯だ哀泣號哭、佛の慈悲を乞ふは、頗る笑ふべく、亦た以て時習を知るべし。而して、其詩に就いては、沈德潛曰く、之を鮑謝に較ぶれば、性情聲色、ともに一格を遜ると雖も、蕭梁の間に在りては、亦た大家を推す、邊幅尙ほ濶く、詞氣尙ほ厚く、能く古詩の一派を存するを以てなり」と。その詩、名句に富み、氣格やゝ高きもの、亦た之ありと雖も、聲律に拘はりしが故に、殆んど後世の律詩に近きものあり。漢魏の古詩と初唐沈宋體との連鎖として、特に研究を値す。約、亦た四聲譜を大成して、平上去入を分ち、又八病の說を創む、これ詩學に於て、最も注意すべき事項なりとす。

江淹、字は文通、濟陽考城の人、散騎常侍左衛將軍に至る。別賦・恨賦を以て世に知らる、

晩節才思微に退くや、時人之を才盡きたりといふ。范雲、字は彥龍、吏部尚書に至る。任昉、字は彥章、樂安博昌の人、新安太守となり、官に卒す。文亦た觀るべきものあり。四家の詩に就いて古人「沈江は體料に饒にして性情に乏しく、范任は性情に足りて體料に短し」といひしが、ともに沈約に及ばず、江淹は頗る能く修飾し、擬古、最も名ありと雖も、風骨未だ高からず。范任は道ふに足らず。

次は庾肩吾、字は子愼、八歲にして、詩を賦し、兄於陵に友愛せらる。太宗、藩に在るとき、之を賞接し、東宮に居り、文德省を開いて、學士を置くや、先づ其選に充て、後、官、度支尚書に至る。その詩、聲色臭味、ともに備はり、琢句に巧なりと稱す。陸時雍、之を評して曰く推錬精工、氣韻香美、當に是れ聲律の絕技たるべし、と。然り、その秀朗の風神は、愈よ之を促進せしなるべし。その子信、北朝に名あり。

何遜は、前にしては沈約・江淹と鼎足すべく、後にしては陰鏗と相並んで陰何と稱せらる。字は仲言、東海剡の人、弱冠にして秀才に擧げらる。范雲、その文を見て、輒ち嗟賞し、因つて、忘年の交を結ぶ。沈約、亦た之に謂つて曰く、吾、卿の詩を讀む毎に、一日三復、なほ已む能はず、と。その名流の爲に推稱されしを知るべし。今、その詩を觀るに、風骨に乏しと雖も、情詞宛轉、淺語ともに深く、遂に後代陰鏗の上に在り。遜、又文章を善くし、劉孝綽と同時に並び重んぜられ、世に何劉と稱す。

その他、梁に於て名あるものを擧ぐれば、王文憲は集序を以て知られ、吳均・柳惲は、詩に於て、艶靡の習を去り、本素を攄寫せむと欲せしが、力未だ足らず。陶弘景・丘遲・王僧孺・陸倕・劉孝標・王筠・劉孝綽・劉潛・劉孝威等、その集を傳へ、王籍・劉峻・孺・徐虞義等、亦た作あり。

陳の作家には、後主を始め、陰鏗・徐陵・江總・張正見あり。就中、前の二人、家數最も大と稱せらる。

陰鏗、字は子堅、武威の人、梁の湘東法曹參軍となる。かつて、賓友と宴飲するや、酒を以て、行觴者に與ふ。衆皆笑ふ。鏗曰く、吾輩終日酣醉、而して、爵を執るもの、其味を知らず、これ人情に非ざるなり、と。後、侯景の亂に値ひ、賊の爲に擒にせらる。或人之を赦免す、其人を問へば、即ち後の行觴者なり。後、陳に入りて身を終ふ。その詩、蓋し何遜の流亞、世に陰何と稱す。然れども、琢句の工を競うて、氣格骨力、甚だ卑し。後に杜甫、頗學陰何苦用心といひ、李侯有佳句、往々似陰鏗といひしが、其句を賞するのみ、決して其格を取るに非ず。

徐陵、字は孝穆、東海剡の人、官、左光祿大夫太子少傅に至り、至德元年卒す、年七十七。少にして佛を信じ、經論多く精解あり。目に靑睛あり、時人以て聰慧の相となす。陳の業を創めしより、文檄軍書詔策の類、皆その手に出で、蔚然として、一代の文宗たり。集中に於

て九錫最も雄篇たり。玉臺新詠序・與李那書、亦た完璧、駢儷文中、有數の作たり。玉臺新詠は、漢魏より當代に至るまての詩を選錄せしものにして、後人の典據たり。但し、その詩は、梁の餘習に沿ひ、飜つて、排偶愈よ多し。張正見の詩、卑弱論ずるに足らず。

陳の後主、名は叔寶。太子たりしときより、詹事江總等と長夜の飲をなし、即位の後、未だ幾ならず、臨春・結綺・望仙の諸閣を起し、各高さ數十丈、連延數十間、皆沈檀を以て之を爲り、金玉珠翠、之が飾となし、珠簾寶帳、服玩瑰麗、近古未だ有らず。その下に石を積んで山となし、水を引いて池となし、花卉を雜植し、後主は臨春に居り、貴妃張麗華は結綺に居り、龔孔の二貴嬪は望仙に居り、複道より往來す。江總、宰輔となり、政事を親らせず、日に孔範、等諸文士と後庭に侍宴し、これを狎客といひ、諸貴嬪をして、客と唱和せしむ。その曲、玉樹後庭花等あり。君臣酣飲、夕より旦に達す。こゝに於て、宦官近習、內外連結、宗戚縱橫、貨賂公行す、而して、孔範、貴嬪と結んで兄弟となる。範、自ら謂ふ、文武の材能、擧朝及ぶなし、と。將帥微に過失あれば、即ち兵權を奪ふ。これに因つて、文武解體、以て覆滅に至る。後主在位七年、その隋兵將に來り攻めむとするを聞くや、近臣に謂つて曰く、王氣こゝに在り、彼何するものぞ、と。孔範曰く、長江は天塹、豈に能く飛渡せむや。臣、常に官の卑きを患ふ、虜若し江を渡らば、定めて太尉公となせと。後主これを然りとし、伎を奏し、酒を縱にし、詩を賦して輟まず。すでにして、隋將韓擒虎、橫江より、宵に采石を濟り、守者の醉ふに乘じ、遂に新林より直に朱雀門に入る。後主、自ら景陽井中に投ず。軍人井を窺ひ、將に石を下さむとするや、乃ち叫ぶ。因つて、繩を以て、之を引けば、張麗華・孔貴嬪と同じく束ねて上り、遂に俘にせられ、陳、こゝに亡ぶ。後主、後、長安に送られしが、宥されて且つ厚く給賜せらる。後、隋の文帝に侍し、東巡して芒山に登るや、賦して曰く、日月光天德、山河壯帝居、太平無以報、願上萬年枝、と。下筆の時、何の興會かある。仁壽四年、遂に洛陽に沒す。江總、性寬和溫裕、詩文を善くせしが、國政を恤へず、識者多く之に滿たず。隋に入つて後、上開府に拜し、江都に卒す、年七十六。

陳の後主の人と爲り、此の如く、詩、亦た頗る輕靡。その愁多明月下、淚盡雁行前といひ、妖姬臉似花含露といふが如き、以て一斑を見るべく、江左の風流、こゝに極まり、孱弱尤も甚しく、九五の終へざるもの、決して偶然ならず。江總、まゝ佳句あり、淨心抱氷雪、暮齒逼桑榆といひ、荷衣步林泉、麥氣凉昏曉といふ如き、遂に大度に乏し。これを要するに、陳詩は殊に骨力なく、宛然たる亡國の音、永く以て後世の鑑戒となすべし。

(五) 六朝の樂府

魏の漢に代るや、その古樂を用ひしが、晉に至れば、朝廷宗廟の樂、多く古に準じて、そ

の曲調を定め、然らざるものは、詞臣に命じて制作せしめ、樂府の面目一變し、これより、歴代亦た然り。されば、齊梁陳、三代の詩、すでに上に述べたる如しと雖も、當時の樂府、特に軍中馬上に用ふる横吹曲の一體は、武人の詞、多きに居り、音に鏗鏘なるもの多く、一種の異彩を放ち、婦人群中、丈夫を見るの感あり。企喩歌・隴頭歌辭・折楊柳詞の如き、即ち是れなり。若し夫れ、木蘭の詩に至りては、古今稀に見るところ。この詩、普通に梁詩といひ、胡應麟は、その句格と篇中に可汗の字あるとの二因を以て、之を晉代の作となせり。然れども、沈德潛の證言、亦た捨つべきに非ざるを以て、予は必ずしも晉梁の別を爲さず、唯だ六朝中葉の作といはむと欲す。而して「その高きものは、上、漢魏に逼り平かなるものは、下、齊梁を兆す」といへるは、蓋し動かすべからざる公評なり、木蘭は、女子男粧、その父に代つて遠征したるもの、燕山の下、黒水の頭、十年功成り、天子の賞を受けて家に歸る。その事、すでに奇にして、詩も亦た奇、警挺奇拔、毫も時習に染まず、人目爲に快なるを覺ゆ。中間の數解、乍ち胡地征戍の苦を叙し、「朝辭爺孃去、暮宿黄河邊、不聞爺孃喚女聲、但聞黄河流水鳴濺濺、朝辭黄河去、暮至黒水頭、不聞爺孃喚女聲、但聞燕山胡騎聲啾啾」といふに至りては、情景兩語、雙關の妙あり、聲調宛轉、まことに歌行の絶調を推すべし。されば、唐子西は「杜子美、木蘭に本づく」といひ、沈德潛は、「杜少陵の草堂一篇、全く此詩の章法を用ふ」といひ、或は「木蘭長にして妙、此に熟せば、歌行の法、他に求むべからず、杜詩多く是より悟入するに似たり」とさへいへり。更に全篇の價値に至りては、「事奇にして詩奇、卑靡の時、之を得たるは、鳳凰の鳴き慶雲の見はるゝが如し」といへるもの、最も中れりとなすべし。

その他、漢魏の小樂府は、變じて五言四句二十字となり、專ら即興應酬に用ひられ、子夜・團扇郎より以下、蕩子浪婦が信口道情の具となりしが、その篇幅、短くして、餘意あるが故に、往々にして、沈痛なるものあり、善く一種の古音を保てり。この體、やがて平仄を論ずるや、乃ち絶句となる、これ最も注意すべきなり。

(六) 北朝の詞人

北朝の詞人、固より多からずと雖も、偶ま之あれば、その作、頗る清響を存す。その地、固より朔漠に近く、その詩、胡語に類し、然らざるも亦た胡中の景を裁して詩に入る。齊の高昂「隴種千口牛、泉連百壺酒、朝朝圍山獵、夜夜迎新婦」の如き、以て見るべし。魏の高允・溫子昇、齊の邢邵・魏收等、皆集を存し、常景、古人を詠ずるの作、又觀るべく、胡叟・胡太后・祖珽・鄭公超・蕭慤・顔之推の輩、その作を傳ふ。而して、最も稱すべきは、北齊斛律金の敕勒歌「敕勒川、陰山下、天似穹廬、籠蓋四野、天蒼蒼、野茫茫、風吹草低見牛羊」僅々二十七字、その高古

の神趣、直に漢人の遺響なり。或は曰く、雄勁蒼莽、自ら是れ北音、迥かに齋梁綺靡の習と別なり。漢魏歌謠の一派、こゝに至つて響を絶つ。僅に廿七文字、風雲の氣を含む如し。その中、三言・四言・七言・相錯り、歌行の結篇・立章・鍊句・換韵・開合・頓折の諸法を併せて、皆備はる。唯だ一首、下半部の文選に敵すべきなり。敕勒は短くして妙、木蘭は長くして妙、この二歌に熟せば、歌行の法、他に求めざるべし」と。以てその價値を知るべきなり。北方の詩、大抵かくの如しと雖も、魏の王德の春詞「春花綺繡色、春鳥絃歌聲、春風復蕩漾、春女亦多情、愛將鶯作友、憐傍錦爲屏、回頭語夫婿、莫負艶陽粧」の如き、情語纏綿、亦た以て江南遊蕩兒の腸を斷つに足るべし。

然れども、北朝の文士、庾信・王褒を推して、その冠冕となす、しかも皆南人にして、北に往きしものなり。信、字は子山、南陸新野の人、梁の庾肩吾の子。幼にして俊邁、群書を博覽し、尤も春秋左氏傳に善く、身の長八尺、腰帶十圍、容止頎然として人に過ぐ。はじめ、徐陵とともに東宮に出入し、詩文ともに綺艶、世に號して徐庾體といふ。信、後に流寓して、北に赴くや、周人の重んずるところとなり、開府儀同三司に擢んでらる。陳氏の起るや、流離の人、皆赦して歸さる。周の孝閔帝、文學を好み、信と王褒とを留めて遣らず。大象の初、疾を以て職を辭し、尋いで卒す。信、位望通顯なりと雖も、常に鄉關の思あり、かつて哀江南賦を作り、以て意を致す、凄怨にして悲壯、時人その志を悼むといふ。

信は、河朔文學をして重からしめしものなり。否、此の如く言ふは、其志に非ずと雖も、河朔の景象に感化されしは、固より爭ふべからず、しかも亦た、六朝の大詞宗たるべきなり。その作、はじめ、齊梁の宮體に沿へども、後には、乍ち一變し、蒼凉蕭瑟の一體を以て、其勝を擅にせり。杜甫が庾信文章老更成といひ、清新庾開府といひしもの、決して過褒に非ず。杜甫の信に於ける、猶ほ李白の謝朓に於けるが如し。胡應麟、乃ち說を爲して曰く、供奉の宣城に僻するや、明艶合ふを以てなり。工部の開府に僻するや、沈實合ふを以てなり」と。凡そ陳隋間の詩人、たゞ名句を得むと欲するのみ、而して、信や、ひとり琢句の中に於て、復た清氣に饒、故に能く流俗の中に拔出す、まことに軒鶴鷄群に立つものなり。史氏、その淫放輕險、却つて北方の文章を累せしといふ、誤れりといふべし。

その詩、頗る清響あり、謝朓に似て、更に雋逸、詠懷最も觀べく、樂府又莊重なり。沈德潛かつて信の「漢帝看桃核、齊侯問棗花」「荷風驚浴鳥、橋影聚行魚」「樹宿含櫻鳥、花留釀蜜蜂」「塞迴翻榆葉、關寒落雁毛」「佛影胡人記、經文漢語翻」「羊腸連九阪、熊耳對雙峰」「早雷驚蟄戶、流雪長河源」「樵隱恒同路、人禽或對巢」「猿嘯風逾急、鷄鳴潮欲來」「驚雉逐鷹飛、騰猿看箭轉」「絡緯無機織、流螢帶火寒」「石險松橫植、巖懸澗竪流」「愛靜魚爭樂、依人鳥入懷」「日光釵影動、窓影鏡花

搖等十數句を摘み、少陵の謂ゆる清新なるものかといへり。張溥曰く、唐人の文章、徐庾を去ること、最も近く、形を窮め、態を寫すや、摸範これより出づ、と。鐵案山の如く、復た搖動すべからず。その文は、贅銘小品を第一とし、表章序論、これに次ぎ、王公貴紳の墓碑、その作固より多きも、篇幅結構、なほ缺くところあり、遂に詩人の文にして、文人の文に非ざるが如し。

王褒、字は子淵(漢にも同名字の人あり)瑯琊臨沂の人、志懷沈靜にして風儀あり、善く談笑す。庾信とともに周に留められ、宣州刺史を以て官に卒す。生時信と名を齊うせしが、遂に相及ばず、詩に於ては、關山篇の如き、感愴の句、誦すべきに庶幾し。

(七) 隋の文藝

六朝轉瞬の興亡、陳滅して隋興り、隋倒れて唐起る。隋に於ける唯一の詞人を煬帝となす。帝亦た荒淫驕奢を以て國を亡ぼせしと雖も、之を陳の後主に比すれば、大に豪健の處あり。その詩に見はるもの、又かくの如し。帝、はじめ藝文を講習し、專ら梁陳の餘風を慕ひしが、位に即くに及び、其體を一變し、專ら雅頌を存せむと欲す。然れども、復古の功、未だ全からず、その格、僅に成つて、精華未だ備らず。飲馬長城窟・白馬篇の如き、その集中に在りては、ともに傑作を推すに足るべく、當時摸範となせしところなり。その七言、全く唐律と異なるなく、沈宋の體、この時、すでに成れるに近し。その詔書、亦た雅潔にして純麗、再伐高麗詔の如き、雄偉宏麗、自ら其體を得たり、しかも是れ帝の手筆に係る。

帝の外に楊素あり、武人にして、且つ奸雄の資あるに拘はらず、その詩格、頗る清遠、世外の高士に似て、頗る異とすべく、山齋獨坐の如き、その一例なり。次に盧思道・薛道衡・李德林・牛奇章等、その集を傳ふ、然れども、觀るべきもの多からず。但だ思道の文には、北齊後周興亡論あり、勞生論は、莊子の大塊、勞我以生より出で、結末、田家閑適の興を叙す處、亦た愛誦すべし。王通は一代の大儒と稱すれども、文學上、特に言ふべきものなし。

六朝の詩、頽靡甚しきこと、かくの如く、初唐の四傑、王楊盧駱、亦た其風を傳へて治麗の習に沿ひ、沈宋二人、之に附和す。然る後陳子昂出てゝ、その格、漸く蒼古。張九齡、之に次いで、その詞、更に沈雄。而して、李杜の二大詩聖は出でぬ。

(八) 六朝の雜著

魏晉以後、思索家なし。諸子者流、二三その人あるも、淺膚庸近、漢代の諸家に比して、更に下れり。而して、謂ゆる小說としては、拾遺記・述異記・續齊諧記・搜神記・同續・還冤記等あれども、佛老の盛行に伴うて生じたる迷信に本づき、妖跡怪談を集錄せしものにして、荒誕殊に甚しく、文辭亦た瑣碎、遂に詳論を値せず。その他、求法高僧畫の紀行の如き、歷

史地理上、至大の價値あれども、文學としては、觀るに足らず。

天然を描寫するもの、詩人として陶謝あり、之に對する文士、未だ出でず、酈道元の水經註、わづかに觀るべし。水經は元と地理書の一種にして、支那河流の狀勢を記す。その作者、或は桑欽といへども、實は詳ならず。之に註せしものはじめ郭璞あれども、今傳はらず。道元の注、亦た散佚せしと雖も、清朝の學者、力を盡して整理せしにより、今幸に存す。その書の體裁、未だ確然樹立せずと雖も、その文字、甚だ流暢にして、明媚愛すべく、且つ曲折自在、本文を離れて優に翫賞を値す。若し夫れ、淥水平潭、清潔澄深、俯見游魚、類若乘空といふ如きに至りては、柳宗元小石潭記の粉本となりしものにして、亦た以て、豹の一斑を窺ふに足るべし。

(九) 古文の命脈

魏晉の間、なほ二三文章の家あり。梁齊以下は、駢儷の陋習、正に其極に達し、全く觀るに足るものなし。而して、古文一縷の命脈は、却つて北方に存せり。周主、宇文泰、性朴素を好み、丞相たりし時、干戈騷擾の中に在りて、獨り善く儒術を尊崇したりしが、位に即くに及び、時文の綺麗浮華を患ひ、之を革めむと欲し、蘇綽をして、書の大誥に倣うて詔勅を作らしめ、畢く群臣を會し、文筆皆之に依るべきを命じたり。その文、太だ森嚴、その語、亦た一々時弊に中る、疑もなく、四六は、こゝに一頓の衝挫を受けぬ。ひとり惜むらくは、周祚不幸にして、久しからず因つて、全く古に復する能はざりしや。

隋の周に代つて南北を混一するや、李鍔といふ者あり、上書して曰く、江左齊梁、事弊彌よ甚しく、貴賤賢愚、唯だ吟詠を努め、遂に復た理を遺し、異を存し、虛を尋ね、微を逐ひ、一韵の奇を競ひ、一字の巧を爭ひ、連篇累牘、月露の形を出でず、積案盈箱、唯だ是れ風雲の狀、世俗此を以て相高くす、と。四六の弊を攻むるもの、漸く多きを見るべし。

梁より隋に至るの間、姚察最も文名あり。その梁陳二史を撰するや、散文單行を用ひ、明覈詳晰、頗る觀るべし。その子思廉、善く父の業を紹述せしを以て、唐初に名あり。

(一〇) 批評文學の興起

こゝに江左文學を終るに臨み、特筆大書すべきことあり、批評文學の興起、即ち是れ。その能く當代を重からしめ、文學上に新生面を開きし功、斷じて、沒すべからず。抑も支那に於ける文藝批判の發達は、むしろ頗る遲々たりき。先秦時代の諸子百家、互に辨難攻擊を逞うし、甲論乙駁、結んで解けず。その間、荀子の非十二子、莊子の天下篇等ありと雖も、單に學風の批判に止まり、毫も文藝の事に關せず。次いで、漢代詞人多く輩出するや、互に評隲を爲せしことあり、司馬遷の史記、論贊中、往々詞人の文藻を評價し、揚雄・劉

向、時に指を此に染め、西京雜記の中、時に前漢賦家の個人評を載す。後漢に至りては、班固の漢書及び西都賦の序の如きものを始とし、僅に二三之あるを見るも、なほ言ふに足らず。建安前後、鄴下の文物、一時の盛を極めたる時、人は互に詞藻を以て相重んぜむとす。こゝに於て、魏の文帝の典論は、騷壇の要求を充すべく現はれぬ。これ眞正の意義に於ける批評文學の權輿なり。その後、曹子建に與楊德祖書あり、應瑒に文質論あり、陸機に文賦あり、摯虞に文章流別あり、李充に翰林論あり、その論ずるところ、未だ以て研鑽の典據となすに足らざるも、歷史的價値は、斷じて否定すべからず。梁に至りて、劉勰、の文心雕龍あり。古今を商搉し、群籍を苞羅し、博攻旁稽、盡さゞるなく、眞に至寶となすべし。

劉勰、字は彥和、東莞莒の人、天監中、東宮通事舍人となり、步兵校尉に遷り、舍人を兼ぬ。後出家して沙門となり、名を慧地といふ。文心雕龍の作は、實に齊代に在り。而して、こゝに注意すべきは、劉勰その人、かの文選の作者たる昭明太子と極めて親密なる關係あり、東宮舍人として、その左右に奉侍し、頗る寵遇を受けたりといふ事實にして、更に重要なるは、この二人の著書が、ともに文學研究上、必須なる位地を有し、兩々相待ち決して離すべからざること、是れなり。げにや、秦漢より梁に至るまでの製作を各體の下に排列したる文選と、同じ時代を通じての文體の批判及び修辭論を以て成れる文心雕龍とを併觀するときは、前半期の支那文學は、略ぼ之を尋繹するを得べく、一は製作を主とし、一は談理を主とし、互に裨補して、はじめて完璧を見るべし。

文心雕龍、篇を分つこと四十九、序・志を合せて五十、卷を分つこと十、その中、一より六に至るまでを上篇となし、七より十に至るまでを下篇となせり。上篇は、彼が自ら綱目明矣といへる如く、主として文體論を以て成り、下篇は毛目顯矣といへる如く、重に修辭論を以て成り、多少體系的なる處、大に推奬すべし。上篇の劈頭、原道の一篇、文章は人間の必然的產物なるを論じ、徵聖は聖を師として、その文辭を學ぶべしといひ、宗經は儒家諸經の價値を論じ、正緯は緯書の妄、取るに足らずと雖も、文章に助あるを論じ、辨騷は楚辭の價値と儒家の經典との異同を論じ、次いで、明詩・樂府・詮賦等、いづれも前代文學の歷史的研究より出て、最も參核に資すべし。之に次いで、下篇に於ては、神思の一篇、著作の動機を論じ、體性・情采に於て、文學の美的價値とその種類とを論じ、最後に聲律・章句・麗辭等に及び、修辭學上の法則を論定せり。

その論の正否は、こゝに詳論せず。終に臨んで、その文體を考へむに、これ正に六朝の特色たる四六を以て成れるものにして、采を敷き文を摛ふるの妙、典を使ひ詞を措く

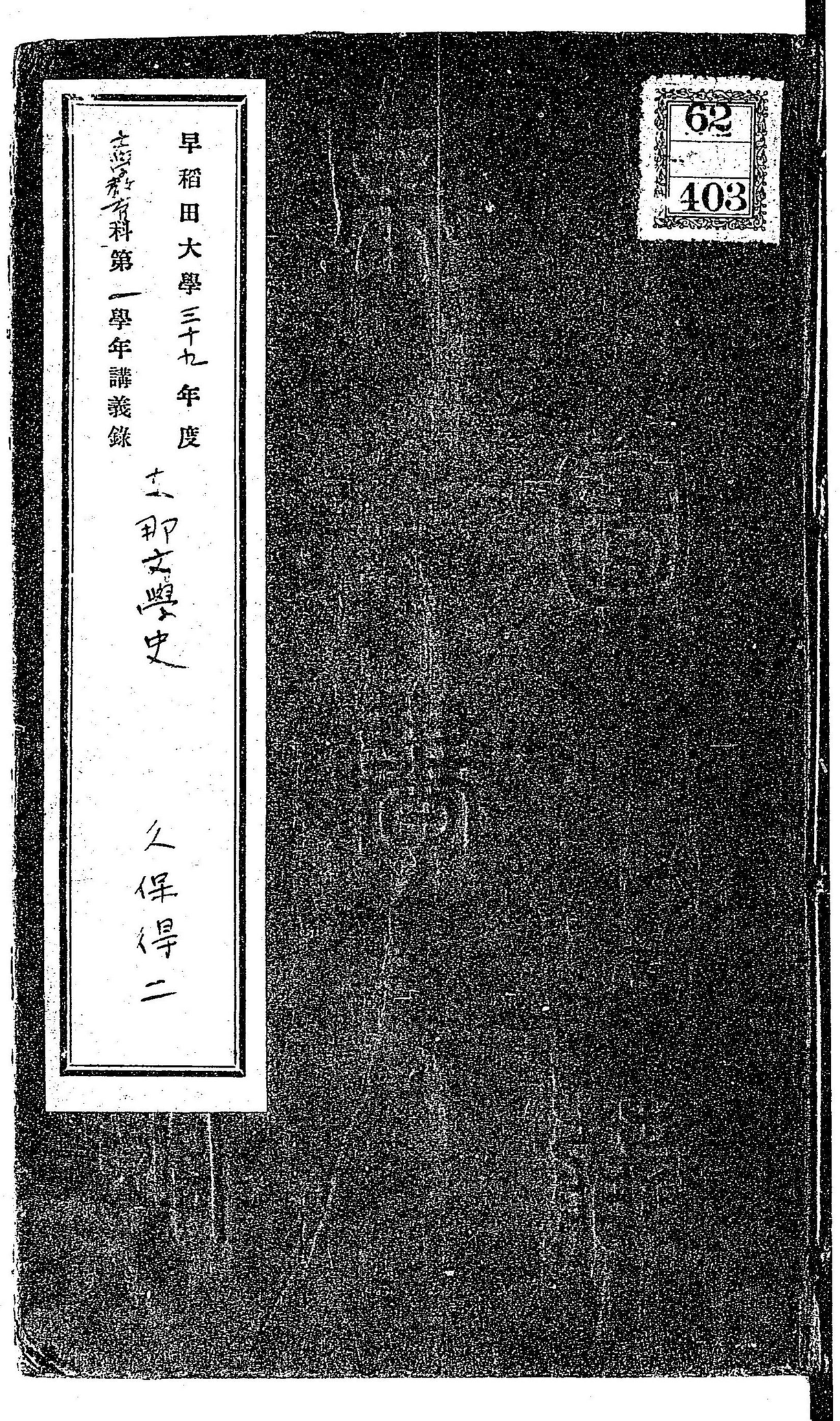
62
403

の巧、綢繆羅織、金を經とし、翠を緯とし、一匹の錦繡、人目を眩せしむ。然れども彼が四六を用ひしを難ずるは酷なり。その著をして世に行はしめむとせば、勢、この體を要し、且つ自ら四六の大渦中に立つもの、未だ其弊を痛切に感せざればなり。

文選の後塵を追ふもの、徐陵の玉臺新詠あり。雕龍と步武を接するもの、鍾嶸の詩品あり。並に前二書に下ること數等なれども、亦た必須の寶典たるを失はず。

鍾嶸、字は仲偉、潁川長社の人、兄岷・弟嶼とともに學を好み、詞藻に長じ、又周易に深し。晉の安王に事へて、その記室たり。詩品は、漢魏六朝の詩家百餘人を、上中下の三品に分ち、その傳統と文學的伎倆とを評す。その見、或は穩ならず、その文、時に艱なれども、雕龍と相待つて善く、其用を爲すべし。

支那文學史上 終



310549－000－0
62－403

支那文学史

久保 得二 述